

一代の奇人
畫家

幼にして繪
畫を嗜む

土左衛門

なり、屢々翁の畫室を訪づれたり。以下記する生首寫生談は、當時翁が口づから予に物語りしものにて、世間に傳へらるゝ所とは多少相違する點あり。翁、幼名は周三郎、初め狂齋と稱す、下總古河に生る。幼にして父に別れ、母江戸湯島なる某に再縁するに及び、伴はれて其家に養はれしが、生來氣骨ありて他に屈するを潔しとせず、且つ酷だ繪畫を嗜めり。然るに、其家素より貧しかりし爲め、彼は商家又は工匠の家へ奉公に出されしも、一と月と經ざるに逃け歸り、自宅にて相變らず繪畫にのみ耽りたれば、母親は良人に對する義理もある事として、其都度いたく責め懲らせしが、聊かも其甲斐なく、繼父亦鍾愛の餘り、毫も之を咎めず、爲すが儘に放任し置きぬ。

斯くてありけるに、一と夏炎熱甚しかりし日、彼は他の小兒等と共に水泳を試みんと、程近き御茶の水に赴きしに、頓ての事に、一童高聲に「土左衛門よ、土左衛門よ」と叫びしかば、群童之を聞くと共に、狼狽して岸に上り、銘々己が衣服を引抱へて逃げ去れり。彼も亦少からず驚きて、一旦は逃げ去らんとせしが、此時例の嗜める繪心より、土左衛門の容貌を一目見たしとの念、油然と起りたれば、早速件んの場所に泳ぎ行き、覆ひし蓆の間より、具さに死者の姿を窺ひ

大膽なる生
首の寫生

母の氣絶

家出して姿
を晦ます

たり。

六七歳の小兒としては、是さへ既に大膽極まる行ひなるに、而も彼は其日の暮るゝを待ち、銳利の小刀を携へて再び茗溪に到り、彼の水死人の首を切り落し、密に家に持歸りて之を物置の片隅に隠し置き、日々人目を偷みては、其腐敗し行く死者の面相を寫生し、以てこよなき樂みとなし居たり。彼が畫道に對して、幼時より如何に執着心の深かりしかば、此大膽不敵の振舞に依て推知するを得べし。

然るに、一夕彼の母は、所用ありし爲め、手燭して物置に入り、其處此處と物を探し居りしに、異様の臭氣鼻をつくさへあるに、頓て何やらん重げなる黒き塊の端なくも足元に轉び出でしに、氣付き、燭を翳して熟視せしに、こはそも如何に、二タ目と見られぬ人間の生首なるにぞ、アツとばかり、其儘其處に昏倒せり。彼は、先程より母の物置に入りしを見て、疵持つ足の一方ならず思ひ惱みしに、今や此たゞならぬ物音を耳にせしかば、驚破や、事露頭に及びぬと、子供心の分別もなく、矢庭に家を飛び出せしまゝ、一時姿を晦ますに至りぬ。斯かりし程に、父親はじめ近隣の誰れ彼れ打集ひ、彼に就いての善後策を談

國芳の門に
入る
出て、洞白
に師事す

合せしに、母のみは最も強硬に、何處までも勘當放逐すべしと主張せしも、繼父の反つて之を聽かざるのみか、結局子供にして斯程まで繪の道を好むならば、一層の事然るべき師に就きて、十分繪畫を稽古さす方、却て當人行末の爲なるべしと相談一決し、遂に彼をして歌川國芳の門に入らしめたり。
さるほどに、彼は最初國芳に就て、専ら浮世繪を學びしも、自から意に適はぬ事ありとて、出て狩野洞白に師事し、名も洞郁と更め、刻苦勵精、終に一家を成すの基を開くに至りぬ。

一一二四 得所の龍と曉齋の龍

佐瀬得所
猩々曉齋

或年、老書家佐瀬得所主催の下に、兩國中村樓に於て書畫會を開きし事あり。當日は催主の得所が得意の大字を揮毫することゝて、其評判前方より甚だ盛なりしが、如何なる手落ちにや、平素交際ある曉齋に對して、何等の通知をもなさざりき。然るに、其頃猩々曉齋といへば、既に浮世繪の大家として、人も許し自らも許す程なれば、心私かに面白からず思ひ居りしに、平素愛顧を蒙る某紳士の誘引により、いや／＼乍らも得所の會に列する事となれり。

「龍」字の大

「ペランメ
龍が何だ」

墨汁鉢を轉
倒す

雲龍の大畫

去れど、心面白からざる曉齋は、敢て得意の繪筆を執らんとせざ、態と別室に入り、只管大杯を傾け、痛飲淋漓、玉山將さに頽れんとする時しも、人あり、彼に向ひ、「只今、得所先生、龍の一字を六疊敷一杯に大書されしが、其筆勢真に龍の雲を呼び起すが如く、階上階下、看者の歎聲雷に似たり。」と告ぐ。
猩々の如くに酔へる曉齋、之を聽くや否や、岸破と席を起ち、朦朧たる醉眼を据ゑつゝ、「ペランメ、得所の龍が何んだ。糞ッ。」と、嗷鳴り出し、大に江戸、見式の痰呵を切りしが、泥酔の極、殆ど腰起たず、辛うじて傍人に扶けられ、前庭の芝生に設けし揮毫場に赴きしに、醉步蹣跚、過つて椽より下に轉び墜ち、之と共に豫て用意せる墨汁鉢を轉倒せしかば、中なる墨汁は、滾々として今や芝生に擴げたる大紙一面に注がれたり。

此時遅く、彼の時速く、泥の如く酔しれたる曉齋、忽ち身を擦すよと見る間に、電光石火、目近き手洗水の柄杓を手にし、件の大紙に水打ちかけ／＼して、墨汁を薄め、有合ふ草箒木を揮て紙面を拂ひ、次で自から穿ち居し足袋を脱ぎ、其先端を濃き墨に浸して筆に代へ、一氣に龍頭龍體を描き、最後に其睛を點じ、立どころに一幅雲龍の大畫を呵成し、筆(實は足袋)を捨つるより早く、自から描ける

雲霧中に横臥し、其儘軒聲雷の如し。看者爲めに驚倒せり。

當日予も亦本會に列し、親しく此活劇を目撃せしが、彼が庭先へ轉び落ちしより、描寫終りて酣睡する迄僅々一分間餘、二分時とは費さざりき。奇人の奇行、蓋し奇と爲すに足るものか。

一一五 盲人蛇に怖ぢず

是も亦前と同じき江東中村樓の書畫會に於ける出來事なるが例の曉齋例に因て衆人還視の中心となり、人々半切扇面、さては絹紙畫帖等を手にし、先を争うて揮毫を需む。彼固より好む道なれば、多々益々辨ずる底の勢を以て、且つ飲み且つ描き、數刻の間、殆ど息をもつかず、片端より描きなぐりしが、而も盃の數重なるにつれ、彼の意氣益々昂然たり。

時に一客あり、表裝美々敷き卷軸を捧げ、衆を排してにじり出で、卷頭約一尺許を開き、「何なりとも一つ」と叩頭して揮毫を乞ふ。然るに、朝より筆を描くの逸なかりしのみか、小品ものゝみにて、流石の彼も聊か氣を腐らし、自然情氣を催せる折柄、餘りに大切さうに差出せる卷軸を見たることゝて、忽ち快諾

「何なりとも一つ」と

「今少しお擴げなさい」

一番其人に向ひ「今少し御擴げなさい……モウ少々御展べなさい……今チット……モウ少し……」と、段々に其卷軸を押し擴げさせ、果ては到頭其全幅を引き展ばさしめ畢んぬ。

斯くして彼は、改めて其人に向ひ、「倍、何んでもよろしきや。」と馬鹿念を押したる上、大筆を執り上げ、十二分に墨を含ませて起ち、無造作に卷頭第一の邊に一點を畫すると見るや、忽ち筆を股間に挿み、毫端を紙上に着けし儘、小走りに走り出せしかば、只見る長く引き展べたる卷物に、一條の墨痕蜿蜒として印せるを。是に於て請ふ者色を失し、觀る人眼を睜り、如何に成り行く事ぞと、各々手に汗して啞然たりしが、頓て筆鋒卷末に達したる一刹、那突如、逆行一番すれば、紙上忽ちにして巨蟒の口を開いて、乾坤をも呑まんづ形相を現出せり。請ふ者、觀る人、技に至て再び啞然たらざるを得ず。

既にして眼を筆者の毫端に注げば、須臾の間に、數十百の小人影を點じ來れるが、仔細に之を視れば、何ぞ料らん、一團の群盲杖を突き、手を取り、或は腰を押し、下駄を携へ、嬉々嗚々として巨蟒の口に突進する光景ならんとは。

彼は斯くも無造作に、斯くも無頓着に所謂「盲人蛇に怖ぢず」てふ一卷の諷

當意即妙の諷刺畫

群盲巨蟒の口に突進す

忽巨蟒を描出す

刺畫を畫き上げぬ。而も筆致は固より此當意即妙の天才に對しては、請ふ者観る人終に三たび嗔然たらざるを得ざりし也。

一二六 姦字の訓

或繪畫展覽會にて、一婦人「平和」と題する作品の前に立ち、伴れの男を顧み、繪の意義の存する所を問ふ。其男對て曰く、「善く見給へ、此畫幅中には、一人の女も居らぬではないか」。

一二七 女の足癖

或女學校の校長先生の話に、「履物を善く揃へて脱ぐ女教員は、概して有夫者か左もなくば年齢三十以上の人で、其不揃ひなるは、十中の八九未婚者に非ざれば、則ち二十歳前後の者。そして脱ぎ方の最も亂暴なるは、高女卒業者に限る。」と。蓋し一面の眞理たるを失はず。

一二八 禁亂履

禪家の玄關には禁亂履とありて、雲水等の履物幾十足あるも、一足づゝ皆な外へ向けて揃ひ居り、見るに心地よし。玄關は主人の性格を表はすとさへ云ふ程にて、下駄草履の亂雜に脱ぎ棄てある家は、其の家の萬事不取締なる事を表現するもの也。盜人は晝の間に玄關を窺ひ置き、狙をつくる由、心すべき事にこそ。

一二九 女の履物

徳川中世已後天保年中まで、萬事奢侈を極めし頃は、賤業婦輩の綺羅を競ひし事言語に絶し、履物の如きには、當時の黄金にて一足三兩三步を投ぜし者もありとか。其一例を擧ぐれば、鼻緒に珊瑚珠を纏ひ込み、臺の上面を籠甲にて張り、周圍は總金蒔繪抽斗を拵へ、其中に白縮緬の切を入れ、足の汚れを拭ふ用意とせるもの、又は寒中足の冷えざるやう、臺の中に湯を入れるものもありしとか。予が往年維也納にて見し貴婦人の靴は、踵の所に小さきアルコールランプを具へ、防寒用に供する仕掛ありしが、此等は孰れも驕奢の極にして、正さしく亡國の具とや謂ふべからん。

アルコールランプの設備

一足三兩三步の履物

玄關は主人性格の反映所也

女教員と履物の整不整

一面の眞理

一三〇 女の首

首の粧飾
サイノロヂ
スト

今より約二百二三十年前、貞享・元祿の昔に在りても、女の首筋より上のみに要する品、既に十六種ありしと云ひ、又夫れより僅かに六十年を経し、延享年間には、其數二十餘種になりたりとて、殊更に書き立てし者もあれど、今日大正式婦人の首一個には、凡そ幾拾種の粧飾品を要するにや、將た又之に費す所幾百千金に達するや、世に在るサイノロヂストの君に問はせ欲し。

蚊帳へ蚊を入れる娘の髪の出來

一三一 偽善狸婆

世に慈善家の稱ある某富豪夫人、一日盛裝して救濟事業の會合に出席せり。會衆は入り來る夫人の盛裝を目して、如何に割引きしても、其値二千圓を下らざる可しと評判せしが、イザ喜捨金といふ段になり、彼の女の膨れたる財囊を

大枚一個の
白銅

故らに帯を
捐賣りての義

出づる物を見れば、勿驚大枚一個の白銅なりし也。今までいろ／＼あり難き演説等に傾聽し、人一倍多く流したる夫人の涙は、只の五錢に値ひするのかと、傍人は私語せり。

其他、右と同じく恒に大なる財産を持ちながら、救民の爲め施米の代價を補助せんとて、故ら己が締め居る帯を賣り、其代金を出捐して見せし婦人教育家もあり。

要するに、此等は孰れも當世流行の偽善家なれど、前者は寧ろ正直にて罪なし、後者に至ては聞くさへ嘔吐を催すの感なき能はず。去れど後者の如き行爲を見て、非常なる善行にてもあるかの如く、盛んに謳歌する者あるに至ては、實に沙汰の限りと謂はざる可らず。去りては、憂ふべき世情なるかな。

一三二 嗅天下

蜘蛛は其性甚だ食欲無情にして、同類相食み、又夫婦仲も至つて惡し蟲き也。而して雌の方雄より大にして強く、其腹部肥え太り、美麗なる網を張り、昆蟲を陥れて捕り啖ふ様、恰も人間界に於ける虚榮の女のごとし。雄蟲は小にして

蜘蛛の性行

一三三 古き女
情弱に巢を營まず、只管雌蟲の傍を彷徨する様、恰も野良久良亭主のごとく、拔足、差足して歩み寄り、雌の隙を窺ひ、急に飛び着きて交尾するを常とせるが、而も其利那雄もし敏活ならざれば、交尾はあろか、雌の激怒に觸れ、巢より外へ振り飛ばされ、又は咬殺さるゝに至る。要するに雌蜘蛛は、最も徹底せる噴天下の標本也。

予が知れる人にて、嘗て獨逸婦人を娶りし者ありしが、其婦人蜘蛛以上の噴天下なりし爲め、あたら一生を不幸の中に過ごしたり。此等はハイカラ黨のよき見せしめと謂ふべし。

一三三 古き女

最近歐米間に猛烈の勢力を得つゝある、婦人選舉權論者などの聞かば、何と言ふか知らざれど、人類間に於ける古來の男尊女卑てふ傾向は、容易に矯正せらる可き者とは思はれず。最も古き所にてヒポクラテスやアリストテレスなどは、女を目して「不完不完なる人間なり。」又は「女は兩手兩手を一様に使用し能はざる人間なり。」杯と嘲笑し、又或人は、「女は男に反し、内に熱なく、力少き

爲め、外形にまで凹陷あり。」などの奇説をさへ立てし程なるが、比較的晚近の人類學者、又は解剖學者間にては、種々の點よりして、「女は男よりも階級低く、發達中途に在る者。換言すれば、女は未成品にして、小兒に近き身と心とを有するものなり。」と見做しつゝあり。

心理状態に於ても、概して女は感情的にして、忽ち笑ひ、忽ち泣き、理性に依つて判断を下すこと稀に、創作力に乏しき等、如何にも小兒に近き點少からず。男尊女卑の傾向の因て生ずる所、敢て根據なしとは謂ふ可らず。

さる女嫌ひの哲學者は曰く、「矮軀にして肩狭く、腰のみ廣く、脚短き者を、美形なりと稱するは、畢竟性慾に曇りたる色眼鏡をかけて、見る爲めのみ。女は自身が美ならざるが故に、審美の觀念に乏し。陽に美を好むが如く、粧へど實は、求めて人の心を迎へんとするに過ぎず。彼等美粧の目的も、一人の男を喜ばせんと云ふに在らずして、他の多くの女達をして、成るべく仰山に羨ましからせんが爲なるのみ。女は何處までも虚榮の權化也。」と。此語思ひ切て、慘酷なる嘲罵の様なれど、然も冷靜なる理智の立場より觀たらんには、或は斯くの如きものなるべし。

斯の如くにして、原始已來、女は男に及ばざる者と見做され、幾數萬年間、不利の地に立ちし事なれば、彼等をして完全に男子と共に、平等同權の位を獲得せしめんとするには、今より幾何の期間をば、自由にして且つ有利に生活せしむれば可なるや、這是到底判斷し能はざる所なる可し。

一三四 結婚雑話

前節の「女」に因み、茲に少しく男女の結婚に就きて述べし。

上古の結婚は、所謂掠奪結婚にして、女は全く掠奪によりて、男子の妻妾となりしもの也。這是印度のラマヤナ物語にも、希臘の古史にも見え、又スバルタ時代にも行はれたり。今時、濠洲の蠻族間にも、山野に保護者なき婦女を見れば、之を撃ちて失神せしめし上、連れ歸りて従はしむるの風あり。我邦にても、近代まで或地方(土佐又は淡路等)にては、女房擔とて、理不盡に他人の娘を掠奪する悪習ありき。其他婚禮ある家の門戸に、土石を投ずるなど、是れ皆な掠奪結婚の遺風也。

掠奪結婚の次は、賣買結婚にして、こは自家の娘又は妹を、他に嫁する代りに、

掠奪結婚

女房擔

賣買結婚

結納

銀環と金環

エンゲージ
リング

羊何頭牛幾匹とかを受くるが如く、正しく人身と畜産とを交換せるものにて、支那などにては、今日尙ほ之に類似の風習行はる。我邦現代の結納なども、同じく賣買結婚遺風の變態なりと謂ふ可し。

此外支那にては、古へ、后妃群妾の君に御するに當り、其御すべき者は、銀の指環を以て之を進め、娠めば金環を以て之を退け、進む時は右手に著け、退く時は左手に著くといふ事あり。西洋の婚約に指輪を用ふるも、是れ正しく某男の有なりと云ふ事を證明する爲めにして、例へば猶ほ飼犬に首輪を附するが如きのみ。古來、男の女を見る事、概ね斯の如し。

一三五 藝娼妓は昔の奴隸

昔は人商人、今は女術と呼ぶ專業者あり。殊に南北兩朝の頃は、世の中麻の如く亂れしに乘じ、容貌よき婦人、美少女、美少年とあれば、女取り、引とて、誰彼上下の差別なく、奪ひ去て、奴婢遊女に賣りし程にて、我邦、人身賣買の弊、此時代を以て極度とす。人買船などありしも、此頃の事にして、現時行はる、賤業婦の身の代取り、極めなど云ふ事も、亦皆な此時代よりの習はしに因る。藝娼妓

昔は人商人
今は女術
引女取り、勾

人買船

一三六 男女の身の代 一三七 根を絶ち葉を枯らせ
の類が、奴隷賣買の遺物たりし事、是にて推知するを得べし。

一三六 男女の身の代

天平年間に於ける奴隷の賣買は、大概稻何束といふを以て代りとせし事、記録に在り。即ち奴一人(三十九歳)、稻一千四百束、婢三十五歳、稻一千束、婢二人(九歳、十歳)、稻一千二百束、婢一人、二十歳、稻八百束、婢一人、十九歳、稻一千束、婢一人、十七歳、稻九百五十束などありて、尙ほ是等の奴隷が逃走の場合に、捉へたる者に與ふべき懸賞の高きても、記るされたり。

一三七 根を絶ち葉を枯らせ

近頃、或筋にて私娼取締を非常に八ヶ間敷云爲すれども、未だ一として其根柢に觸れず、悉く徒勞に終れり。惟ふに、酌即ち雜妓を全廢し、且つ年若き素人の女子に對し、一切狹斜の巷に出入するを嚴禁するは、事迂遠に似たるも實は捷徑の策たり。風俗の亂れたり云はるゝ維也納などにて、此點は勵行されつゝある様也。

賣買に稻束

私娼撲滅策

課税嫌の支那人

京都市の好財源

俗悪化する京都市

一三八 脂粉錢

何れの世、何れの國か、苛税を歡ぶべき。其中にても、支那人程課税を嫌ふ國民はあらず。支那が古より難治の國と稱せらるゝ、職として之に由れり。

然るに此課税嫌ひの支那人も、古今に通じ、女閭樂戶土伎私窠子などと唱ふる淫坊よりは、多額の税を徵收して更に苦情なきのみか、或時代には、是が軍國の助けをなせし事さへあり、近代までも脂粉錢と稱し、官家其利を覓め、到る處賣色を公許せり。

仍て思ふに、我が京都市の如きも、課税の重要なものは、花柳界に在るを以て、市の財源は、所謂此脂粉錢に依て豊富なりと謂ふ可き歟。

或人、最近京都市街の俗悪化せるを見て、許して曰く、「是れ恰も未だ垢ぬけもせぬ少女の顔に、浪りに濃厚なる脂粉を施し、以て大に其嬌を競はしめんとするが如し。」と。蓋し彼のペンキ塗り樓閣と、電燈濫用と、旗招牌の虚飾等が、舊都の舊觀を甚しく損ぜる事實に徴すれば、實に或人の評言の適切なるを覺ゆ。去れど所謂現代式何やら商法より觀る時は、帝國到る處の大小都會、概ね

然らざるは无ければ、此際單り舊都をのみ咎むるにも當らざるべし。

一三九 女郎の稱號

女郎は娼婦の謂に非ず
鳩山女郎と
下田女郎と

女郎と書きて娼婦と解するは、僻事也。既に白居易の詩にも「色爲天下艶心乃女中郎」とありて、女子中の男といふ程の意なれば、女丈夫とでも云ひ度き所に用ゐて然るべき稱なりと、或先生は語れり。去ればとて、今更ら鳩山女郎、下田女郎でも、何とやらんへんなもの也。

一四〇 山の神

「奥」の隠語

山の神といへば、角の生へかゝりし鬼女の様にも聞ゆれど、實はいろは歌の中なる、おくの隠語に過ぎず。世の夫人方、以後御安心ありて然るべし。

一四一 山神の末裔

天の叢雲の劍の新解釋

或學者は、天の叢雲の劍に就いて、「昔素盞鳴尊が、簸の川上で、八岐の大蛇を退治して寶劍を獲られたと云ふ神話は、土着の山の神を平らげ、御味方として

砂鐵山を有する多額納税者

之に酒を振舞ひ、次で彼等を獎勵して、山陰、山陽兩道の境なる、砂鐵山を切開かせ、遂に其鐵を以て劍を造らせ給ひしを云ふたのである。」との解釋を下せり。果して然らば、今の雲伯地方に於て、砂鐵の山を所有する多額納税者の面々は、差詰め、山の神の後裔にて、出雲の國造様と同様、男爵位の價值十分あるべしと思はるが、如何。

一四二 砂鐵と水電

砂鐵と製鋼業

我邦無盡藏の砂鐵を利用し、盛んに製鋼業を起すべしと獎勵せし事も、今は早や二十五六年前の昔となりぬ。

實業家の迂遠

當時、相手は舊套を墨守する山主のみにて、世間亦未だ其要を知らざりしを以て、徒らに電氣事業の發達を待ち居りしが、今日は既に國內到る處に水電の設備あり、而も未だ嘗て大に之れを製鐵業、殊に砂鐵に應用せんとする者あるを聞かず。此一事に徹しても、世に所謂實業家などいふ輩の、案外企業に迂遠なるを察知すべし。

一四三 水電國有

水電と云へば、凡そ世界中にて我邦の水電程、利益の壟斷を恣まゝにする者はあらず。従て諸工業の發達を阻止する障礙物たる事、固より論を須むず。政府若し眞に國家將來の計を思はゞ、宜しく烟草や鹽などの世話を焼かず、一日も速に全國の水電を統一し、之を公共管理の下に置くの英斷なかる可らず。若し遲疑して一日を空過せば、恐らくは百年の悔立どころに到らん。工業立國を國是とする今日、敢て當局の考慮を促す。

一四四 能率

近年、所謂實業界と稱する商人七分、工人三分位の階級に於て、頻りに部下即ち使用人の能率を云爲する者がある。其言ふ所説く所は、皆な一應御尤の様にも聞えるが、煎じ詰めると、多くは我田引水の言ひ草に過ぎない。予は敢て問はんとす、抑も人の能率を出す源は、何であるかと。惟ふに、個人の體力、元氣、熱心、智能及び才幹等は、皆な其能率の幾分かづゝを

水電統一策

多くは我田引水の論

一人一役

實業界の巨頭

温室で咲かせる商工の花

分擔するには相違ないが、而も之を總括して大に發揮させるのは、所謂一人一役を背負つて立つ底の、旺盛なる義務觀念、責任觀念の結晶であらねばならぬ。而して此結晶體の涵養は、上級の人達が率先躬行して、範を部下に示すより良き法は無き。

然るに今世に在る實業界の巨頭、即ち多くの商工業家の崇拜する某々老人が、一人にして假令名義丈けでも、十も十五もの大々の會社——而も其種類の難多なる——を代表し、多々益々辨ずるの概あるが如き、克く一人十役乃至十五役としての大能率を發揮せる者と、讚め度いが、實は論外である。

序だから言ふが、斯ういふ人物が居て、諸方面を結び合はせると云ふ事は、或點に於て多少便利かは知らぬが、實は怪しいものである。眞劍を棄て、妥協と行くのは、樂な代りに毒であつて、謂はゞ商工の花を温室で咲かせる様なものである。今や將さに我國運に一大進轉を見んとする折角の奮闘時代に當り、斯かる手段が果して大なる幸福を産むか、恚うか、チト考へてもらひたいものである。

一四五 江戸時代の町人と今の紳商

御用町人本位

商人殿様と従○位様

最近發行されたる或書に曰く、「江戸の最盛期は文化文政なり。其頃の江戸は、屋敷七分に町屋三分といふ配合、商業は御用町人本位にて、同業者間の取引に非ず、又競争入札なども無く、只々政府に資縁して、怪しき利益を壟斷す。大なる者は役人、小なる者は武士を向ふへ回はしての商賣のみ。此名残は東京となりても盡さず、夫は殿様商人、否、商人殿様の男爵もあれば、従○位様といふ連中も尠からず。前代に於ける江戸の御用商人は、鷹揚なる殿様氣取に満足し、敢て殿様などと他人から云はせ様ともせず。又自からは論語が好さなりと云ひながら、火附もしたり、消し口も取たりする様な者は、一人もなかりし。資本主として職工の喉を締め上げなどすることを尾籠なりと解釋し、従て労働者には、相應の餘裕もありしなり、云云。」と。

一四六 古屏風の不平

商人と屏風

商人と屏風は曲らねば立ち難しとは、彼の道灌の譬語を曲解せし世人の言

古屏風の夢物語

ひ草ならんが、茲に去る商家に、年久しく使はれし古屏風あり。一夜主人の夢枕に立て曰く、「年頃、主公の我を曲れる者とのみ思ひ給ふこそ、うたてけれ。曲は元と我が心に非ず、只其伸縮こそ我が徳なれ。然れども、強ひて開き伸るときは、片時も立ち難く、又た、み縮る時も亦立ち難し。伸縮中道を得て、始めて久しく立ちて危からず。尙ほ其立つ所の地は、平かにして且つ正からざれば、則ち覆り倒るを免れず、是れ第一の要點なり。主公若し其心を平かに且つ正しくして、其上に伸縮の度を考へ、餘りに開かず、餘りに縮めずして、善き程に身を立てんには、危きことなかる可し。此理を知らずして、只に我を曲める者とのみ心得給ふは、いとく口惜しく侍るとなん。」と。

沙翁の夢説

昔、沙翁は「夢は空想の兒にして、役立たぬ腦より生る。」と言ひしが、之を以て這般の夢と同一視する勿れ。

一四七 罰か賞か

遣り樹と取り樹

強慾の米商、常に其店に小なる遣り樹と、大なる取り樹との二種を備へ、多く不正の利を獲たり。此事領主の耳に入り、其罰として反對に遣り樹にて取り、

一四七 罰か賞か

一四八 洋人の觀たる我が鐵道乗客
取り掛にて賣る事を嚴命す。買手之を聞き其日より來り買ふもの山の如く、
之れが爲め忽ちにして莫大の利益を獲たりしとぞ。

一四八 洋人の觀たる我が鐵道乗客

洋人の我が
乗客觀

嘗て内地を旅行せる際、一日偶然洋客と列車を同じうせり。彼我退屈まぎ
れに様々の雜談を交へしが、其折彼私かに語て曰く、「貴邦の風俗として、家居は
何所も清酒清淨を極むれば、我々外人中、殊に家庭的の婦人等は、常にそを羨望
して已まざる程なり。然るに、其潔癖にして且つ行儀正しき貴邦人が、一たび
旅客となりて車中の人となるや、忽ち豹變して異人種の如く、平生の作法も態
度も、全く打ち忘れたるかの振舞あるは如何。是れ實に吾等外人の怪訝に堪
へざる所也。」

紳士淑女の
喫烟

「家庭に於ては、必ずや行儀も正しからんと思はるゝ、立派なる紳士達が、喫烟
度なく、周圍悉く烟艸の灰だらけとなし、剩さへ、火のつきたるマツチや吸殻を
床上に投げ散らして顧みず。之に伴ふ貴婦人さへ、銀キセルを木履の先にて
敲き、飛出す火玉を追かけて、次の一服に點火する杯、其舉止行動のさもしさ、何

果實の飽喫

とも名状なし難し。果實を食ふ時も、外皮は悉く床上に投げ棄て置く故、進行
中過て靴などに之を踏めば、立どころに滑倒の憂目を見るべし。前者は失
火の原因ともなるべく、後者は他人に不測の傷害を蒙らすの虞あり。」

不謹慎の行
爲

「左もなき迄も、我々はすべて、居室御座敷と心得居る一等列車内を、恰かも陋
巷のごとくに汚穢にするは、甚だ遺憾千萬也。尙ほ言ふべきは、股引を着けざ
る大の男が、何の憚りもなく大安坐をかき、露はす可からざる所を露はし居た
り、又は白晝衆人環視の中にて裸體となり、悠々衣服を着替へるなど、我々をし
て止むを得ず面を背かしむる者尠ならず。」

何の爲の寢
臺券ぞ

「此他寢臺室に集り、深夜大聲に談笑し、甚しきは酒もりを行ふ杯、傍人をし
て安眠せしめざるのみか、彼等は抑も何の爲めに、寢臺券を購ひしやを疑はし
む。」

無作法不始
末の數々

「男女を論ぜず、多くの時間を洗面所内に費すのみか、其跡始末もせずに出で
去る者。便所を洗滌することを知らざる者。寢室の扉の開閉を手荒くする
者等、其無作法不始末の點を數へ來れば、日も亦足らず。是でも世界に轟く日
本帝國の貴紳淑女の集團かと思へば、實に不可思議、不可解にして、終には只だ

一四九 家の前の瘠犬 一五〇 小善と小惡
お氣の毒と申すの外なきに至る。貴君は何と思はるゝや。」

一四九 家の前の瘠犬

英米に於ける邦人の態度

右にて、我同胞が國內旅行中の不行儀を、明らさまに素破拔れしは、近頃赤面の至りなるが、茲にいと奇異なるは、此等不行儀極まる同胞中の紳士達も、海外殊に英米の地に到れば、一見如何にも行儀よく、其行装も決して外人に譲らず、其態度の如き、寧ろ謹慎過ぎはせずやと思はるゝ事、是れ也。
然るに英米人に至りては、全然之れに反し、自國內にては飽まで端正を粧へど、足一たび他國の土を踏めば、天真爛漫、不羈磊落をゴツチャにして、随分目に餘る行爲を敢てする者なきにしも非ず。其行き方の我が日本人と正反對なるは、是にも何か譯のある事ならん。

外國に於ける英米人の態度

一五〇 小善と小惡

小人以小善爲無益、而弗爲也。以小惡爲無傷、而弗去也。故惡積而不可掩、罪大而不可解。

一五一 十返舎一九

偏屈翁

十返舎一九といへば、誰しも「膝栗毛」に聯想して、定めて滑稽洒脫の人なりしかの如く思はんが、事實は却て餘程の氣六ヶ敷屋にて、當時世人より偏屈翁と綽名されし位の人物なりし由。然るに其逸話に、彼が臨終の時自から鼠花火を懷中し、茶毘に際し爆發せしめて、會葬者を驚かしたりとあれど、右は落語家林屋林泉の事を誤り傳へしなりと云ふ。

林屋林泉

一五二 膝栗毛

膝栗毛の名は一九の創意に非ず、意に非ず

「膝栗毛」の名は一九の創意に非ず、季吟五十の祝に、三物詠草として

年の矢や五十の望宿の春

湖春

達者にと其身を祝ひ月

正立

膝栗毛あゆませ行かん花待ちて

季吟

といふがあり。季吟五十歳といへば、延寶元年にて今より二百四五十年前、一九の歿せしは、天保二年也。

一五一 十返舎一九 一五二 膝栗毛

一五三 箱根八里 一五四 はたごやと木賃宿

一五三 箱根八里

箱根の山道は、延暦二十一年に富士山噴火して、在来の足柄路を壅塞せしを以て、新たに一條の宮荷路を開けり。是れ後世の所謂箱根八里也。因に云ふ、足柄路は、奈良・平安朝の頃、既に開通し居りたり。

一五四 はたごやと木賃宿

我が帝國も、今より千二百年前までは、殆ど未開の國にして、人烟の稀薄に兼ぬるに、往還の艱難を以てせしかば、庶民の旅行には、皆な糧食を携へ、飢、飧袋までも用意し、夜も通例は野宿せり。去れば古歌にも

旅人は籠も篋も空しきを早くいなしめ山の刀禰達

といへり。山の刀禰達とは山賊共の事、篋は共に竹器にて、旅具、蓑笠、人馬の食糧を入れるもの、即ち旅行用の食料をも容る、籠なれば旅籠とも書き、後ち轉じて食料共物を旅籠と云ひ、更に後世驛路にて、旅人を宿せしむる屋舎を、旅籠屋と呼ぶに至りし也。

宮荷路

往古に於ける旅行の困難

籠篋山の刀禰達

旅籠と旅籠屋

木賃と木賃宿

降つて慶長の初めには、既に旅宿の設けありしと雖も、旅人は猶ほ自から米、糶、衾、褥等を携帯し、旅舎にては、只だ薪水を供し、偃臥せしむるに過ぎず。故に當時宿泊料を稱して木錢又は木賃といへり。現時簡易の宿舎を木賃宿といふことも、古代の遺稱と知る可し。

一五五 掃部をカモンと訓むこと

往古、海濱沿海の地を旅行するに、蟹夥しく、晝夜の分ちなく、家の内を這ひ回りて、いといぶせきが爲め、貴人などの旅行に際しては、命じて之を掃はしむ。此者と呼びて蟹守と云ひしが、後ち更めて姓となし、掃守連といふ。後世の掃部は、此カニモリより轉じたるものなるべしと也。

蟹と蟹守

一五六 珍しき姓

世間には、随分珍奇なる苗字をなせる人あり。次の如きも、先づ變りたる部類なるべし。

日日(たちもり)。

大角集(おづめ)。

十二神(ぢちふるい)。

一五五 掃部をカモンと訓むこと 一五六 珍しき姓

一五七 意義ある女の姓名 一五八 馬の尻殿下

酒々井(さゝいぬ)。

牛糞(ごえ)。

七、五、三(しめかけ)。

八道(ひさし)。

六人部(むとべ)。

八月朔日(はつげつ) 宣(のたま)はつのみや。

三方一所(くつわた)。

陶歸所(すえ)。

四月朔日(しがつ) わたぬき。

栗花落(つゆり)。

私市(ささいち)。

神三郡(かみくに)。

東海林(しょうじ)。

日出山(ひじや)。

上別府(ひら)。

口分田(くもて)。

七寸五分(しちすんご) はしわた。

十八女(じゅうはちむすめ) わかいる。

二十五里(いひぢ)。

言語道斷(ごんご) 断(こと) ぐる。

一五七 意義ある女の姓名

試みに左記女子の姓名を熟讀せば、自ら其中に含まれし一類の意義を了解するならん。

岡 品子。

白井 福。

南日 松。

徳富玉枝。

茂手木 高。

高井 花。

花岡 萬。

甘利 増。

伴 鯉。

廣津 種子。

一五八 馬の尻殿下

命名に關する朝鮮の迷信

朝鮮にては、古來愛兒を呼ぶに、下賤なる名を以てすれば長壽なりとの迷信あり。大院君なども李垓公を寵愛の餘り、常に「馬の尻」と呼びしと云ふ。是は朝鮮某官吏の實話也。

一五九 洒落れた雅號

中島棕隱

銅駝餘霞樓

砂雞軒
茂竹庵
東福庵

中島棕隱は、京都の有名なる詩人にして、當時(文化時代)の文人墨客中、最も洒脱を以て聞えしほどありて、物の名づけ方など、人の意表に出でしもの多きが中に、嘗て二條橋畔に酒樓を築き、之を銅駝餘霞樓と名づけて、同人を驚倒せしは、有名なる佳話也。或時、人々雅號の命名を棕隱に請ひしに、一諾直ちに筆とりて、つぎ／＼に砂雞軒、茂竹庵、東福庵と書して與へたるが、是れ甲は下戸の人、乙は餅を好まざる人、丙は豆腐嫌ひの人にてありし爲めなりと云ふ。眞に當意即妙の命名と謂ふべし。

一六〇 烈公の諧謔

烈公は、世間より只だ謹嚴端正を守り給ふの君とのみ思はれけるに、却て一

一五九 洒落れた雅號 一六〇 烈公の諧謔

南無阿彌

加治啓内
生壁比内

將軍の勘氣
を蒙りし裏
面の理由

高松三位の
娘

一六一 烈公の艶聞

面酒脱の所ありて、往々滑稽の戲をなしたり。嘗て臣下に酷しき法華信者ありて常に他宗の者と争論する由を聞かれ、一日彼を召して改名を命じ、南無阿彌と賜ふ。流石に法華信者も君命もだし難く、難有く御受けをなし、夫よりは宗論をも弗つと止めたりとぞ。其他、同じ家中加治と名のる士に、啓内と命し、又生壁といふに、比内と召されたるなど、孰れも名高き話なりしとか。

一六一 烈公の艶聞

幕吏某の著に係る或書に據れば、烈公が勘氣を蒙られし理由の裏面には、二代將軍家の養母峯壽院入興の時、附添ひ來りし宮女と關係せし事も、伏在せりと云ふ。

此宮女(高松三位の娘唐橋)は、名高き美女にして、十一代將軍齊も心を寄せ、種々申し入れしも聽かざりしが、其後小石川館にて私かに烈公と通じ、懐孕までなし、一時京都に在りしも、齊昭特に呼戻して、茨城に留め置き、追鳥狩訓練等に假託し、いづも國籠りを事とせりと。

吉三郎と豪
觀の關係

お七は菊石
面の娘

一六二 八百屋お七

八百屋お七の放火は、吉三に再會したさの餘りとあれど、或人の穿鑿に據れば、事實は左の通りであつたと云ふ。

浪人の子吉三郎は、駒込圓林寺(吉祥寺に非ず)の小姓で、住職豪觀は、申す迄もなく、此小姓の念者であつた。ところがお七は、焼出されて此寺に寄寓してゐる間に、いつしか吉三と熱烈な戀に落ちたので、豪觀嫉妬の餘り、音信も出入りも固く禁止し、而して二人の戀中を覗きとめて仕舞つた。そこでお七は深く豪觀を怨み、圓林寺に放火したのであると。
尙ほお七は菊石面の娘で、世間で持て囃されるやうな美人でなかつた、と云ふ説もある。

一六三 潜航艇の出發點

吾人人類は、自から稱して萬物の靈長なりと云ふも、然も其活動する範圍は、他の多くの獸類と同じく、僅かに山野と水面とを徐行するに止まりしが、最近

一六二 八百屋お七 一六三 潜航艇の出發點

歌類より魚
鳥類へ

メナシカタ
マとダイグ
イグベル

藤田某のウ
ツロ舟

ノルデンフ
エルト氏の
潜航艇

三億七千萬
年

一六三 潜航艇の出發點

に至り、少しく其範圍を擴め、他の魚類、鳥類を真似て、水中及び空中を動く様になり始めぬ。

抑も造化の祕を奪ふといふ事は、流石に自稱萬物の靈長にとりても、決して容易なる業にあらず、況してや人生五十年の短日月を以てしては、何一つ一生に爲し得べき道理なし。去れば、今次の世界大戦亂に當て、海洋中に暴威を振へる敵國潜航艇の如きも、其出發點を温れば、實に數百年前の昔に溯らざるべからず。即ち日本古代のメナシカタマや、歷山帝のダイウイングベルは謂はずもがな、潜航艇として眞面目なる萌芽を現はし、は、西曆千六百二十年(元和六年)和蘭醫コルネリユス・ファン・ドレベル其人に依れる事、今は大方世人の認むる所也。

然るに我邦にても、今より四五十年前に、泉州岸和田の人藤田某が、ウツロ舟といふものを創意せし事あり。委しき事は分からざれど、其構造は木造にて船側を二重張りになし、中央に伸縮自在の煙突の如きものを立て、内部空氣の流通を計りしものにて、其目的は、敵の注意を避け、接近し又は遁逃するに在るも、必要の場合には、或程度まで沈み居る事もなし得べしと聞けり。實用物と

して造られしや否やは、知るに由なきも、兎に角明治維新後早々、斯かる試みありしと云ふは、面白き話也。

終りに予が生來始めて實見せる、潜航艇に就て語らんに、そは明治十八年の九月某日、瑞典國ランヅクローナ沖に放て、發明家ノルデンフェルト氏の招待に依り、同氏の創建に係るシガIFOオム、サブマリオン船の實驗に參列せし時にして、當時今の元帥伊集院氏の外、尚ほ二三の士官も加はりしが、我邦人として潜航艇を實見せし魁は、恐らく此一行中の一人なる可し。

一六四 海洋の年齢

海中の食鹽が、悉く河のみより出づる者と假定するも、今日現存する海中の食鹽全量は、約三億七千萬年を費さざれば、供給する能はず。故に海洋の年齢は、少くも之より若しとは認められずと、學者は云へり。

一六五 併合に非ず復古也

予一日、高崎正風大人の許を訪づれ、くさくさの話に興を深めし事ありしが、

一六四 海洋の年齢 一六五 併合に非ず復古也

其際談次端なくも當時世上の話柄たる韓國併合の事に及ぶや、大人は平常の温厚なるにも似ず、忽ち色を作して、「胡爲ぞ併合といふや、是れ正さしく復古也」と喝破し、以下諄々として左の如く語り出でられたり。

「吾、曩に亡兒の跡を吊はんため、旅順に赴き、其歸途更に韓國に渡りしに、韓人大官等の吾を遇する事殊に厚く、一夕晚餐を共にして懇談に時を移せしが、其折一人の大官、聞く、貴大人は今上天皇の和歌の師傳なりと、果して真か。」と問ひしにより、吾は「陛下は維れ長くも天性の歌聖にましまして、吾徒凡下の得て及ぶべき所に非ず、況や和歌に師傳なしとさへ云ふに於てをや」と答へたり。」「是に於てか私かに思へらく、日來、彼等が、吾を待つ所の酷だ、鄭重なるは、恐らく何人か、吾の御歌所長といふ官職を以て、陛下御歌の師範として之を傳へ、彼等亦之を主上の師傳太傅ならんと解し、斯くも殊遇する者なるべしと。仍て此機會を捉らへて種々の質問を試みしが、就中、吾等が和歌の祖神と仰ぎまつる素盞鳴尊の御事蹟に關して、「日本書記に見えし曾戸茂梨は何地にして、其名は如何なる意義を有するや。」と質せし時の如きは、彼等も亦肅然襟を正うして之に答へたり。而も其答ふる所を綜合すれば、曾戸茂梨の所在は未だ明か

ならざるも、曾戸は韓語にて牛、茂梨は同じく頭を意味する事を確め得たり。是にて想ひ合はざるは、吾れ少時郷里を去て京師に在りし時、祇園の祭神は、歌祖素尊にて坐しますと聞き、一日同社に參詣せし折、社殿の扁額に、牛頭天王と題せるを目撃し、素尊と牛頭と其間何等の關係あるにやと、心に不審を懷かし事也。而も此疑や、今に至るまで釋く由もなかりしに、圖らざりき今夕の對話によつて、忽ち氷解するを得んとは。請ふ、予をして、姑らく素尊の御事蹟に就て語らしめよ。」とて、大人は更に次の如く語り出でぬ。

「熟ら史を按ずるに、初め尊の三人兄弟の御子を率ゐて、新羅に下り給ひし頃は、土民多く穴居し、洲壤未だ全くならず、滿目唯だ荒涼たる地なりしを以て、尊は是に雜種の業を興し、土民を憐み導き給ひ、創めて朝鮮の基を開かせ給ふ。是に由て民悉く悦服せり。既にして尊の去て大八洲國に上。給はんとするや、土民皆な別を惜み、何卒永く駐まりまして、此國を治めしめ給へと、祈りしかど、尊遂に諾し給はず、御子のみを残して東天に還らせ給ふとあり。」「是に由て之を觀れば、朝鮮は素尊當時以來、取りも直さず我國の保護國にして、我國の指導に依て其基礎を起し、我國の力に頼て其國勢を保ちしと云ふ事

「めでたし」と「ヤアトコセ」の意

一六六 めでたしヤアトコセ 一六七 萬歳
明か也。然らば則ち、神代より今日に至る幾千百年其間幾多の興亡を閲みし、幾多の變遷を経來りしにせよ、歸する所彼我の關係は、今日に於て昔に復りしまでの事なれば、正さに復古とこそ言ふ可けれ、何ぞ之を併合と稱せんや。」と、語り終りて意氣昂然たり。

仍て惟ふに、其説の當否は別として、兎にも角にも、此老大人の國を思ふ至誠に至りては、何人も之に感動せざる者はあらざるべし。而も予の如きは、此熱誠なる物語を親しく大人より聽きし程ありて、殊に其感を深うせるまゝ、茲に當時の記憶を辿り、韓國併合に關する大人の一夕談を草すること、斯くの如し。

一六六 めでたしヤアトコセ

慶賀の意を表するメデタシは愛甚しの意、又伊勢音頭のヤアトコセは、「いやとこしへ」の意なりと、或書に見えたるが、如何にや。

一六七 萬歳

維新前の昔と變り、今日は、庶民屢々龍顏を拜し奉るの光榮に浴するのみか、

明治大帝の御代

顯宗天皇の御代

皇極天皇の御代

今日行はる萬歳の濫觴

時と場合に因ては、陛下に對し奉り、萬歳を合唱する事さへあり。

然るに、宮中に於かせられては、明治大帝の御代に在て、何等か御祝事の御宴の際、御陪食の一同が故伊藤公爵の發聲にて、陛下の萬歳を合唱し奉りし事、只だ一度ありしとのみ洩れ承りぬ。

按じ奉るに、陛下に對する萬歳奉唱の事は、昔顯宗天皇御登極の時、曲水の宴を開かせられ、月卿雲客を召させ給ひしに、一同萬歳を唱へ奉りしを始めとすとあれど、こも亦陪宴の臣下のみに止まりし事にして、未だ以て庶民の聲とは云ふ可らず。降て皇極天皇の元年に諸國大旱にて深く宸襟を惱ませられ、諸寺に詔して雨を禱らせ給ふに、忽ち效驗ありしかば、萬民蘇生の思ひをなし、咸々歡喜して言ひ合はさねど、口々に陛下の御仁徳を稱へ萬歳を祝し奉りけるとなん。されば、是ぞ則ち萬民奉祝の聲にして、眞に今日行はる、萬歳の濫觴とや申し奉るべきものか。

一六八 文獻に現れざる孝明天皇

—松浦老女物語—

一六八 文獻に現れざる孝明天皇

内裏の再建
と御遷幸

還幸にして、従来は公卿のみ供奉せしも、此時は將軍を首め、諸大名等も之に扈
從せしにより、御行列は例になく立派にて、行宮より今出川通を室町へ、室町を
三條、三條を堺町、堺町を北へ、堺町御門へ通御せられしが、這は御列の長かりし
故に、態と迂回せしものなりと云ふ。

一六九 眞の武士道

宗良親王の御詠に

君か爲め世の爲め何か惜しからん捨てゝかひある命なりせば

とあり。

夫れ人臣は、其身を殺して君に益あれば、則ち之を爲す。一死鴻毛、石心鐵腸、
斷じて移さざるが眞の武士道也。

一七〇 大西郷の眞面目

命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ、といふ人ほど、始末に困る人はな
きが、此始末に困る人ならでは、艱難を共にし、國家の大事は成し得られぬ也と

乃木氏の歌

は、我が大西郷の眞面目。然り、吾人は乃木氏の

武士は玉も黄金も何かせん命にかへて名こそ惜しけれ

よりも、南州流の

君か爲め國の爲めには、益良雄の名をも命も捨てさらめやは
の、一層切實なるを覺えずんばあらず。嗚にや、上士は名を忘れ、中士は名を立
て、下士は名を竊むとさへ云ふに非ずや。

一七一 楠公と大石良雄

或人曰く、「楠公と大石とは、恰も反對の人也。」と。意は、楠公は一身に天子の
勅を奉ぜり、敵に殺されては君命を輕ざるなり、故に自殺して、天下に生死は我
に在りと云ふ事を示したり。大石は自殺せずして命を待てる、是は生死は官
に在りと云ふ事を天下に示すなりと。

一七二 好利者と好名者

好利者、逸出於道義之外、其害顯而淺。

一七一 楠公と大石良雄 一七二 好利者と好名者

楠公と大石
の生死觀

山鹿流の押太鼓

一七三 義士討入に陣太鼓なし
好名者、竄入於道義之中、其害隱而深。

赤穂義士討入りの時、山鹿流の押太鼓を打ち鳴らし云々と講談又は傳説類には見えなれど、或人の穿鑿に據れば、太鼓の事絶えてなし。試に當時の事情より推すも、太鼓なきこそ至當なれ。深夜突如押太鼓の聲を耳にせば、敵持つ身の誰かは、厥起して結束せざるべき。注意周到なる大石良雄にして、我より求めて、いかでか敵人の夢を駭かす程の愚を敢てせんや。

一七四 喜劍といふは茅野三平の法號

高輪泉岳寺畔四十七基の墓碑の一に、刃道喜劍信士とあるは、村上喜劍の法名なりと云ふ者あれど、或考證家の話に據れば、是は全く茅野三平の爲めに建てし者に相違なしとの事也。大石良雄對村上喜劍の傳説は、史實の否認するにも拘らず、或者は未だ全く之を棄てず、或は薩人に非ず、細川藩大川源兵衛又は用人渡邊庄太夫なりとも云ふが、如何にや。

村上喜劍

大川源兵衛
と渡邊庄太夫

赤穂義士浪
人後の生計
振り
前原伊助

小野寺十内

瑞泉院の内
助

一七五 義士成功の裏面

大石を首め赤穂義士が、浪人後の生計振りに就ては、世間にては最と派手やかにありしかの様に傳ふれど、事實は之れに反し、彼等一同の節儉なりし事、寧ろ驚くべきものありと云ふ。今一二の例を擧ぐれば、前原伊助は十石取りの輕輩なるが、浪人中、良雄より金錢の補助を受けしは、單に一回にして、而も其の額僅々金貳分に過ぎず、夫とても持病を治する爲め、人參を求むる料なりしとか。小野寺十内の如きも、命を拜し東上する時に貰ひし金、僅に三兩貳分なりしと云ふ。又愈々討入りと成つて、一同へ分配せし金は、各自壹分と貳百文のみなりしとなり。一黨の經濟的苦心も、是にて略ぼ察するを得べし。

尙ほ一面に於て、内匠頭後室瑞泉院が、暗々裡に大石以下の人心を統轄して居られし事は、内藏助の提供せし諸帳簿、領收證書類、及び其他一切の報告によりて、毎に要領を得られ、且つ其の化粧料を以て諸準備費に充てられし事實に徴しても、明か也。夫人の如きは、所謂模範的日本婦女として推稱するに足れり。要するに彼といひ、是といひ、孰れも美談中の美談にして、義士成功の基礎

一七五 義士成功の裏面

眞に茲に存せりと謂つべきか。

左は復仇後、夫人の詠まれし歌なりといふ。

世の憂き事とも歎かれし折から家臣

事ありて多くほろひうせしかは

後れしと思ふ浮世になからへてなき數々の跡をとふかな

一七六 赤埴源藏酒を嗜まず

赤埴源藏は、世傳と反對に、全く下戸なりしと云ふ。源藏討入の前日、阿部備中侯の邸(今の日比谷公)内に嫁し居る妹の家を訪づれ、夫れとなく今生の別れを告げんとせし折、妹の父、氣慨ある者にて、亡君の仇をさへ得討たぬ輩にして、武士の姿を粧ふなど、僭上沙汰の限りなりと痛罵せしも、依々として差控へ居ければ、流石に氣の毒に思ひ、酒など出して饗しけるを、源藏少しもならぬ口ながら、今日を限りと思ひ、家内中を相手に満を引き、不言不語の裡に訣別の意を叙して辭し去りしに、翌朝に至り、滿都仇討の新聞を喧傳するに會ひ、一同搜はと思ひ當りしと云ふが、こは、蓋し實情ならん。さるにても、今日、義士遺物とし

て、保存さるゝ徳利などこそ、實に怪しけれ。

一七七 吉良家の運命

吉良義央の後裔は、今日如何なりしや、知る人更になく、又之を尋ぬる者もなし。一説に、明治維新前、一家既に没落し、當時の主某は、妻子と共に北海道に移住し、彼の地の獵師の群に投じ、僅かに糊口の道を得つゝありしが、一日熊に襲はれ、夫婦共非業の死を遂げ、幼少の俤一人残されしを、江戸にても最早徳川瓦解の折に際したれば、誰とて扶助し呉るゝ者もなく、終に、其儘になりし由。上杉家などの知らぬ筈もなしと思へど、如何にや。

一七八 曾我兄弟讐討の真相

曾我兄弟の事蹟は、古來武家子弟の龜鑑として、立派なる物語の様にも傳ふれど、溯て仇討の原因を温れば、寧ろ不倫なる家庭紊亂の結果に外ならざるが如し。事長けれど、或書に見えし所の概略を、左に摘記すべし。

兄弟の家は、工藤氏に出づ。工藤氏は初め公卿にして、其祖先は、藤原長者の

工藤氏の由

狩野氏

家次後妻の女と通ず

家次の不倫復讐の遠因を作す

河津氏

祐成・時致の父

流を汲む藤原の爲憲にして、木工頭たり。是れ工藤の名ある所以也。爲憲五代の孫維職は、伊豆押領使として東下し、一躍して豆駿二州の豪族となる。六代維次は狩野の庄に住し、狩野氏を名のり、近郷に並びなき大勢力家と稱せらる。但し狩野の庄とは、今の太田以南、狩野川の流域より、天城山に亘る廣大の土地にして、一時は後白河帝の御料地たりし事あり。

維次の一子家次、其夫人一子祐家を、残して死せるにより、後妻を迎ふ。後妻には先夫の女一人あり、携へて再嫁す。家次之れと通じ、一男を擧ぐ、祐次と呼び、寵愛殊に甚だしく、遂に之を以て嗣子と定め、長子(即ち先妻の出)祐家には、河津の一郷を興へて分家せしむ。家次が斯かゝる不倫の振舞こそ、頓て兄弟鬪討の悲劇を演ずるの遠因を作し、一面には又、北條氏をして非望を遂げしむるの媒助ともなりしなれ。

斯くて理不盡にも分家せられし祐家は、河津氏を名のり、一子を擧ぐ、祐親是れ也。祐親は河津の次郎と呼ばれ、一子祐泰を生む。是れ則ち祐成・時致兄弟の父にして、悲劇の長本家次は、是等同胞の爲めには、實に高祖父に當る人なりし也。

不倫兒の子は祐經

祐親、祐經の本領を押し

祐親の無情

祐經、遂に狙撃す

さて一方家次の生ませし不倫兒祐次は、正統の長兄を排し、本姓を冒して工藤武者祐次と名のり、伊豆の伊東總家と稱せられ、其一子祐經を生みて、一家益々繁榮せるに反し、分家河津祐家の方は、爾來微々として振はず、從て憤怨歎む時なく、祐家の長子祐親の如きは、内心祐次を憎むこと酷しく、事あれかしと思ふ所に、祐次一日出獵の歸るさより、風邪の氣味にて、夫れが原となり、終に起たず。臨終の時、祐親を枕頭に請じ、一子祐經の將來につき、何くれと委嘱し、四十三歳を一期として此世を去りぬ。河津は伊東武者の遺言に従ひ、祐經十五歳に達せし時、元服せしめ、己が女を妻せ、共に上洛して、小松殿の見參に入れ、武者所に出仕せしめ、一薦を経て、廿五歳の頃までも在京せり。

然るに、河津は此隙に乗じ、祐經の本領を悉く押領して、自家の知行となし、かば祐經怒て訴訟に及ぶと雖も、奉行所は疾くにも河津に買収せられ、一人として訴狀を顧みる者無し。而も祐親の貪慾なる、却て祐經の出訴を悪みて、婚嫁せし女を無理にも取戻し、之を強て土肥實平の嫡男遠平に再嫁せしめたり。祐經怨恨一と方ならず、腹心の郎黨大見小藤太・八幡三郎等を使喚し、祐親を狙はしむ。適々河津父子兩人の赤澤山に狩りするを探知し、其歸路を要す。祐

一七八 曾我兄弟討討の眞相

親好運にして箭先を免れしも、嫡子祐泰即ち兄弟の父は、終に茲にて一命を墜せり。是れぞ則ち讐討の行はれし近因にして、實に言語道斷の話と謂ふべし。爾來工藤家は再び前の如く榮え、殊に頼朝の恩顧を蒙ること深かりしかば、其聲望隆々として他に並ぶ者なきに至れり。時に北條時政遠謀あり、然も人未だ之を窺知せず。或は言ふ、兄弟復仇の念を強うせしは、一には時政の助言ありしに是れ因ると。蓋し當時一將軍の寵に誇り、其威望殆ど北條氏を凌駕せしを以て、彼等の爲めには、正に一敵國たりしには相違なかりしならん。復讐の理由斯くの如く、幕下を騒がせしこと彼の如くなりしにも拘らず、曾我兄弟の名聲赫々たりしは、偏に北條氏の回護與つて力ありし者の如し。されば祐成時政の兩人は、時政一家のツールとなりて、當路の荆棘を拂ひ、以て北條氏出世の道を開きしに等しく、時政因て亦兄弟の爲め、天下に向ひ力めて親孝行の美名を宣揚せしめしやも、亦未だ知る可らざる也。以上曾我兄弟の爲めには、多少氣の毒の感なき能はずと雖も、舊誌を温ねて茲に姑らく疑を存すと云ふ。

一七九 憎きもの

古俗に、馬方今謂ふ所の馬力人足の類、船頭、御乳の人といふ事あるが、支那などにも世間何者最堪憎、虱蚤蚊蠅鼠賊僧、舟脚車夫竝晚母、爆炭濕柴水油灯、と態々詩にて憎きもの、數々を擧げたるがあり。詩といへば、我邦にても、仲の悪しき例として、左の如き歌あり。犬と猿嫁と姑に、石屋醫者、隱居當住、扱は同役

一八〇 獨

凡そ漢字にて、獸類の義より人事に轉用されたる、其例少からず。羊はうまき物と云ふ所よりして、善美、祥などの如く、總てよき事に従ひ、幸群の二字も、羊の群集し幸生するより、人に轉用せり。又馬より人に轉用せし字は、驕、驚、駭、騷の類、蓋し尠からず。其他は、猶、豫、獨、狂、犯、獲、辰、類、獻、家、物、の字等、孰れも同例也。然るに「五侯鯖」に、獨は獸の名、猿に似て大に、猿は群をなし、獨は獨なりとあり。

古人曰く

一八一 官士頂門の一針 一八二 三十六 一八三 塞翁馬
去れば獨のカイゼルは猿の親分にて、近き將來には遠き離れ小島へ往きて、獨
棲する事となるや疑なし。呵々。

一八一 官士頂門の一針

古人曰く「執勤就勞而無怨は、官士の職分也。之を厭ひて安便を要め、苟も勞
に服し事を免れんとする者は、君を欺きて閑を偷む賊と云ふべきのみ。或は
勞役を自ら功とし、名利を貪るは、傭僱の賊民と伍を争へる小人也。何ぞ官士
といふべきや。」と。是れ正しく現時官途公職に列する者の、頂門の一針たり。

一八二 三十六

三十六歳になる男二人ありけり。一人は運好く、一人は甚だ不運也。不運
の男、如何なれば斯く運拙きにやと歎くを、好運の男、吾は祿々三十六なるを、其
許は死苦三十六なればといひて笑ひしとなり。

一八三 塞翁馬

三十六とシク
三十六

淮南子

淮南子に

塞上北叟失馬、人弔之。翁曰、誰知不爲禍、數日其馬歸、人賀之。曰、誰知不爲福、其
子乘、果墜折臂、人皆弔之。又曰、何詎不爲福、一年胡夷大入、丁壯者戰死十人、此
子獨以廢故、父子相保。
とあり。人間萬事塞翁馬、此句真に處世の一要諦ならずんばあらず。

一八四 かしく

女の文の終にかしくと書くは、かしくにてあなかしこの略なるは、謂ふまで
もなし。之れに就き、古來種々の説もあれど、古く可畏の字をかしくと訓せる
を見れば、あなかしこは、甚可畏と云ふ位の事にて、書札の終に、恐惶謹言とかく
程の意なるべし。因に足利時代の文書より、此かしくを見始めたる由、或書に
出たり。但しあなかしこを、穴賢など書くは、固よりあて字也。

一八五 忽諸

「忽諸」の二字は、之をいのかせと訓むべきを、ゆるかせと誤るもの多し。いゆ

一八四 かしく 一八五 忽諸

イルカセと
ユルカセ

かしくは可
畏に於て恐
惶の意

匹の稱呼は馬に限る

後撰集の詞書

惡辰虎而冠する者

一八六 一匹 一八七 否應

一字の誤なりとて、讀書子はいるかせにす可らず。

一八六 一匹

牛羊犬豚の類をも、一樣に皆な一匹。二匹と數ふるは、正しからず。匹とは馬に限りて云ふ事にて、牛は幾頭、鹿は幾首也。但し匹の字は、もと支那の尺度にして、布帛廣二尺二寸爲幅、長四丈爲匹とあり。又、馬影四丈亦借用曰匹なり。蓋し馬の姿勢を形容する所より出しならん。

一八七 否應

俗にい[○]や[○]あ[○]う[○]なし[○]になど云ふ事は、後撰集の詞書に「あやのまもりける女を、いなともあともいひはなたて」とあるによる。

一八八 狼に衣きせたる

此語、單に袴丈の長きに失するを笑ふに用ゆれども、實は惡辰虎而冠者といふが如く、人の惡性に喩へし言葉也。

一八九 偕老同穴

偕[○]老[○]とは共に生き、共に死するを云ふ。詩に曰ふ、與[○]子[○]偕[○]老[○]是[○]れ[○]也[○]。女子の道は、一たび身を以て夫に事する時は、同じく生き、同じく死ぬべし。老は生死の界なる故に、偕老といへば、生死を偕にする義也。然るに同[○]穴[○]の方は、同じく詩に穀[○]則[○]異[○]室[○]、死[○]則[○]同[○]穴[○]とありて、是は男女淫奔の志遂げず、生る時は奔行て室家を同じくせずとも、死なば必ず合葬せられて壙を同じうせんと、かたらふ意也。されば前の偕老は貞女の道にして、後の同穴は誨淫の具たり、之を連ねて夫婦間の事に當つるは如何にやと、昔の學者はいへり。

一九〇 工夫

工夫とは、人に備はれ、日々賃を取りて働く匹夫の事なれども、學者が終日心を養ひ、切切として道を修め、勤むるにも、此工夫の字を借用す。然れども、今俗に、思慮を運らし考究するには、當らずといふ。

偕老の意義

同穴の意義

工夫の意義

一八九 偕老同穴 一九〇 工夫

一九一 御前 一九二 露拂 一九三 檀那、旦那

一九一 御前

天子所在曰御前とあり。今は高位高官は固より成り上りの富者にすら御前と呼ばする者多し。僧上の極みと謂ふべし。

一九二 露拂

昔禁裡に蹴鞠の御會ある時、賀茂人參りて出御前に先づ蹴て懸りの露を落す。之を露拂と云ひしとかや。今の相撲取の横綱が土俵入りに露拂といふを先立とす。こも亦僧上の嫌ひあり。

一九三 檀那、旦那

檀那(旦那)とは梵語 Dana-pati の略。印度にて、僧徒は信徒を以て檀越(財施の主)とし、信徒は僧徒を以て檀越(法施の主)とし、此相互檀那主義を佛教の美點とせるが、後に轉じて、總べて主君主人を旦那と稱するに至れり。此稱昔はいまはしとして好まざる人もありしが、今は全く通俗の言葉となりぬ。

御前の借稱

昔の蹴鞠の御會と今の横綱土俵入り

檀互檀那主義は佛教の美點

如兔角龜毛常無

一九四 兔角

如兔角龜毛常無といひて、何も無き事の譬喩なりといへば、之をとやせんか。くやせんといふ所に用ゆるは是ならず。古書にはともかくも、取捨又は左右の字を嵌用せり。

一九五 尾籠

びろろと訓み見苦しき事又は無禮の事と解す。然るに、是は元とをこ即ち癡にして尾籠と書きしを音讀せしに因ると、古書に見えたり。或は然らん。

一九六 龜負

龜負は大龜の名、又力業をする壯なる貌をも云ふ。石碑の臺石に其形を作るなど、之れが爲めか。吾等がひいきに當て嵌めたるも、自から力ある人の負擔又は援護といふ義に外ならざる也。

讀をこの音

大龜の名、又は力業をする壯なる貌

一九四 兔角 一九五 尾籠 一九六 龜負

一九七 御方

味方若くは
身方と書く
は非也

敵に對するみかたを、味方若くは身方など書けど、古學者は御方と書せり。
從ふ可し。

一九八 明智左馬助と敵國軍人

靈白玉と明
善左馬助

昔靈白玉は靈公の門前を通過する毎に、晝夜の區別なく、又人の居ると居らざるとに拘らず、必ず車を下り、敬禮して過ぎしと云ふが、我國の明智左馬助は、光秀の小姓として召仕はれし頃にも、其椽側の障子の外を通るにさへ、恰も目通りを行くが如く、恭しく手をつきて過ぎしとなり。

獨逸の海軍
士官と水兵

予、明治十七年歐洲に遊び、初めて獨逸軍港キールを觀し時、市街にて海軍士官らしき人の一賣店に入り、其脊を路頭に向け居たるが、反對側を水兵共の參參伍々往來する者皆な彼の士官の後姿を認むるや、急に姿勢を正し、步調を整へ、舉手注目する狀、現に其面前を進む場合と、少しも異ならざるを目撃せり。是に於て予は、此謹嚴なる軍國の士風に感じ、直ちに之を本國當局者へ送るべ

某政客の歐
洲戰訓

白耳義と日
本

「勝てば官
軍」と國家
は力也の
兩事實

き報告書の一箇條となし、が今日の獨兵も、果して悉く叙上のごとき者のみならんか、却々油斷は出來ざる也。

一九九 力なき國家の運命

此程或政客が、歐洲大戰亂の教訓として、某新聞紙上に述べられし中に曰く、「此回の戰爭にても、勝てば官軍の俚言は、最も露骨に實行されつゝあるが、之と同時に國家は力也との格言も、亦た立派に証明されつゝあり。如何に正義を唱へても、國家にして力なくば、力ある國人の不正義に屈服せざる可らず。看よ、今の白耳義、昨の三國干涉を蒙りたる我國、孰れも好個の適例ならずや。口に文明人道を唱ふる歐人が、眞に人道文明を意とせざるの事實は、最早今次の大亂によりて、遺憾なく吾人の眼前に展開せられたり。のみならず、力なき國家は、如何に悲惨極まる運命に逢着すべきかを立證せられたり。此戰慄すべき事實は、我々日本人の肺肝に銘記して、造次にも顛沛にも、忘る可らざる教訓也。」と。洵に同感の至りにして、是等は戰亂に徴するにも及ばず、從來吾人が常に唱道し來りし所、今日にして此説あるも、尙ほ決して遅しとせず、國家を念

ふ人、正に服膺すべきの文字也。

二〇〇 柳生流の極傳

昔、柳生但馬守の許へ、「明旦仇討に行く者なり、冀くは劔法の秘術を聴くを得ん乎。」とて、推參したる男あり。但馬之を聴き、事已に迫る。吾家の極傳は、未だ嘗て他に示さざる所なれ共、今之を授くべしとて、乃ち教へて曰く、「刀鋒を以て人を斬らんとする者は敗れ、刀盤を以て人を撃つ者は勝つ。吾子、明日敵人に面せば、須く刀盤を以て彼が首を撃碎すべきのみ。」と、客唯々として拜して去る。明旦果して仇人の首を獲たりといふ。

切尖にて切
てらざる元
に切れ

二〇一 故蒼海伯を懷ふ

或人、我國の外交振りを評して曰く、「是れ恰も群衆雜沓の間に立ち、前後左右より壓迫されつゝ、左支右吾、一進一退、自己の意思にも力にもあらずして、止むを得ず幾分づゝか、其歩を進むるが如きのみ。」と。語、少しく酷に失するが如きも亦多少此觀なきにしも非ず。殊に所謂血と鐵の性を享けて、百鍊の効

某氏の我が
外交評

を積める執拗比類なき敵人が、戦闘は自家の専賣業と心得、只管猪突猛進しつゝあるを見ては、少しも油斷出來難し。

戦闘既に然りとせば、戦後名譽ある講和に際しては、果して如何。所謂名譽ある講和とは、利益なる講和を意味するや勿論にして、然も現時の形勢より觀る時は、我國は結局孤立の地位に残こされ、國民は意外なる悲惨の目を見るに終らざるなきやを保せず。是れ今より只管懸念に堪へざる次第也。

夫につけても懷ひ出さるゝは、故蒼海伯時代の事共也。明治初年時の英國公使パークスは、我國人の未だ外交に慣れざるを奇貨とし、常に威嚇的に横暴なる要求を取てせしが、嘗て蒼海伯の外相たりし時、一日例に依て、何事か無理を通さんとせしに、外相頑として之を聴かざりしかば、彼れ憤然立ちて曰く、「夫では仕方ない、私、國旗捲て歸ります、日本戦争する事好む、私、國澤山軍艦もある、兵隊もある、私歸ります。」と、直ちに席を蹴て去らんとし、其態度甚だ不遜を極めたり。是に於て蒼海外相亦勃然色を作して、「戦争する宜しい。が戦争する前私あなたと決闘する宜しい。私歸しません。」と激語し、起立して彼に一腕を呉れたるに、流石のパークスも此勢ひに吞まれ、忽ち折れて、「プ。プ。プ。私

副島蒼海伯
とパークス
公使

二〇一 故蒼海伯を懐ふ 二〇二 戰勝の美酒 二〇三 龍卷の話

蒼海伯又嘗て支那に使せしが一日李鴻章と會談せる際李戯れに問ふて曰く「貴國聖天子萬世一系と稱す而も一定の姓氏あるを聞かず如何」と。伯乃ち聲に應じて「萬世一系なるが故に國と共に恒久何ぞ姓氏のあるを要せん。知らず貴帝國には弊邦の如き古來一貫の國名ありや否や。小官不敏にして未だ之を知悉せず冀くは垂教を吝ひ勿れ敢て問ふ」と對ふ。是に於て李鴻章口塞がり終に答ふること能はざりしと云ふ。蒼海伯の氣宇正に四百餘州を吐吞するの慨あり。借問す今の外交官に此老伯の氣慨ありや否や。

二〇二 戰勝の美酒

ウォエリントの決戦後は、流石の英國にても國民を擧げて大に戰勝の美酒に酔へり。而もウォエリント獨り覺め歎じて曰く「戰敗に亞ぐ不幸は戰勝也」と。此語味ふべし。今次の戰勝國民たる者宜しく服膺すべき也。

二〇三 龍卷の話

本篇は、大正五年一月、若き學生達の望みに應じ、予が某所に於て試みし講話の筆記也。

諸君。只今此席に於て、何か私に御話をせよ、とのことでしたが、實は是れと申す話の種もありませぬから、たゞ今年の干支に因んで、龍卷に就て少しばかり述べて見ようと思ひます。

龍卷は、氣象學で申すと、大氣の變動から起る一つの現象でありまして、英語の Water Spout とか Whirl Wind、乃至は又 Dust Wind や Tornado 杯の部類に屬し、之を小規模にすれば、雹夕立、驟雨など、同じ性質のもですが、併し颶風や颱風とは全然異つたものであります。

そこで私は、此話をする順序として、先づ三段に分けて述べたいと思ひます。即ち第一には其發生する原因、第二には實現する光景、第三には被害の實例——斯う三つに分けることに致します。

第一の發生する原因に就ては、先づ颶風からして説く必要があります。即ち颶風の起る原因は、地球上の大面積——經緯數十度に渉る大空間——に生ずる氣温と濕氣の變化によつて、其邊の大氣をして、其密度や壓力を變ぜねば

ならぬ様な影響を蒙らせる所からして發するので、從て其勢力と範圍とは、猛烈で且つ廣大である道理です。之に反して龍巻の方は、地球上比較的狭い所に起る一時的の氣温や、濕氣の昂騰より受ける氣層内の變動であるから、其範圍も威力も、颶風の様は廣く且つ大きくはない。之をモウ一層詳しく言へば、颶風は非常に廣い面積に涉つて、水平に配列された氣層上に起つた、大氣の不權衡が動機となつて起る者。龍巻は又比較的狭い面積の所にて、垂直に幾重も重なる氣層を貫通して、權衡を失つた大氣の爲めに生ずる現象で、之を言ひ換れば、下層界の氣温と濕氣が一時に昇騰すれば、直ぐ其上の氣層の氣温濕氣は、比較上低き故、イヤでも權衡を失ふ譯である。ところが大氣といふものは、其温度と密度とが水同様に毎に平均したがるので、從つて冷くて濃いものは降らうとし、温くて淡いものは昇らうとして、若し少しでも差のある時は、是非共速く合同して平均を得ようとするから、そこで上層と下層とが衝突して、避くるに道がなくなり、遂に夫れが一種の旋回動と變じて、獨樂の様は回轉するのであります。そこで此旋回動が一度始まると、之を包圍する周邊の蒸發氣は、次第／＼に捲き寄せられ、同時に獨樂の心棒に當る中心の方は、段々空氣が

稀薄になつて參ります、而して此獨樂の旋回する速度が増せば増す程、周圍から捲き寄せられる蒸發氣は、濃厚となつてきますが、之に反して中心の方は、愈々益々稀薄と成つて、トウ／＼真空に成つて終ひます。斯う云ふ風にして、獨樂の中心に真空が出来る、今度は是れが唧筒に化けます、即ち此唧筒を水面の方へ持て行くと、丁度スポイトの様に働いて、下の水を吸ひ揚げます。是でザット龍巻が出来上つた次第です。

次には、第二の龍巻出現の光景を話し致します。是には私が若い頃、帆船に乗つて印度洋を航海した事がありました、其折赤道直下を距る事僅か二三度位の所で、度々此龍巻を目撃しましたから、其實況を申述べる事に致します。で、その時刻はいつも午後二時頃から、五時頃の間と記憶して居ります。無風と添着で苦しんでる最中に、フト見ると、一天俄に漆を流すが如く、今迄鏡の様は銀光りに光つて居た海面も、亦急に變色して、何か事あり氣に見えて來ますと、遂に天の一方からして、一朵の雲が舞ひ下り、此雲は即ち前申した獨樂の作用です。初めは乳房の垂れた様ですが、次第に大きく又黒ずんで來まして、後には非常に大きな唐傘が、天から眞倒さまに降て來る様です。而し

て之と同時に海面は風も無いのに、ザツと波立ち、恰も大鯨が群をなして躍り狂ひでもするかの様です。併し、是は固より海中に何も居るのではなく、前申した獨樂の中心に出来た真空、即ち唧筒の作用で、海水を吸ひ揚げんとする前提なのであります。夫から件んの唐傘が次第に海面に近く降りて来ますと、其邊一帶は何となく濛氣で覆はれて、薄開くなつて来ます。しばらくする間に、例の唐傘が海面に接近して、殆ど之に觸れようとするや否や、夫こそ、千百の長鯨一時に潮を噴くかと思ふ計りに、麗大な水柱が突然と湧出し、看る看る中に、夫れが大根注繩の形に拗れながら、舞ひ躍りつゝ、彼の唐傘に掻き攪はれ、中天へ向つて飛び行くのです。其光景たるや、如何にも蛟龍の雲を得て昇天するかと思はるゝ計りで、龍巻の名蓋し空しからずであります。

然るに彼の黒雲が天から降つて、水柱を攪攪て行くかの様に見えたのは、實は左様ばかりでは無く、空中に起つた旋回動の中心、即ち獨樂の中の真空が、下層の蒸發氣を吸ひ揚げるので、段々濃厚になり、夫が黒雲の姿を現し、又吸ひ揚げ方も強くなるので、終には蒸發氣ばかりでなく、海水までも引き揚げ、水柱をも立てる様になるのです。是が則ち私の航海中目撃した光景で、龍巻は其儘天

の一方へ飛去て仕舞ひ、洋中の事ですから、別に何等の危害も無かつたのであります。併し若し是が船の方へ接近する場合には、小船ならば顛覆もし、大船でも帆を破られ、人畜を害する事疑ひなしです。夫故龍巻が接近して来ると見れば、其水柱を狙て空砲を放ち、真空を破る事が必要です。若し又是が陸上に在つたなら、それこそ山野を荒らし、樹木を抜き去り、家屋を破壊する位は勿論、非常な危害を及ぼすのです。現に明治十年の夏、北米イリノイスのカルメル山中に起つた龍巻の如きは、或大寺院の尖塔を擡つて、十五哩も離れた村落へ落して行つたと云ふ事で、其怪力實に怖るべしであります。其他此龍巻の被害に就ては様々の實例もあるが、今は略して置きます。我國には幸にして未だ斯くの如き實例は見ませぬが、夫でも野菜や魚が降つたり、又は赤砂沙漠の(が)降つたりする事を、時々耳に致しました。是等は何地か甚だ遠からぬ國で起つた龍巻の影響で有らうと考へられます。

龍巻に就ては尙ほ種々の御話もあり、又氣象學の方では、定めて新説もある事と思ひますが、私の聞き覚えを見覚え、ました所は、大暑斯様な事であり、順序ながら尙ほ一つ申し添へます。支那では風に就て、正・二・三・四月を颶とし、五・

六七八月を颯としまし、又英國の海員は、印度洋附近に起る暴風の季節を記憶する爲め、次の様なヴァルスを唱へます。

June—too soon,

July—stand bye,

August—lookout you must,

September—remember,

October—all over.

二〇四 戊辰年首の出来事

是も同じ辰の歳の話柄なるが、慶應四年戊辰の春といへば、鳥羽伏見戦争の起りし年にして、此戦争は維新史上重要な出来事なりし也。其動機如何と云ふに、當時一方には徳川將軍の政權を奪ひ、無位無力赤裸々となす可しと主張し、他方には慶喜の爲め、只管寛大の御處置あらん事を切願して止まざりし折柄、當の將軍自身には如何に思ひ取りしものか、表面新年拜賀の參内に託し、内實は薩人の悪業を訴へ、君側を清めんと目的を以て、正月二日兵二萬を擁し、

鳥羽伏見の役

將軍慶喜の

大阪を進發して京都に向ひしが、之を見て取たる薩長は、スツ慶喜入犯すと、立どころに六千五百の兵を以て、伏見鳥羽の兩道を扼して激撃す。激撃數刻東軍終に大敗せり。惟ふに徳川氏の此舉たる、大に輕卒の勝を免れず、一説には將軍近侍者に其人を得ざりしが爲めとも言へど、一面には薩長宿意あり、飽までも挑發的に出でし者なりともいへば、此一事動機の如何に拘らず、到底免れ能はざりし運命なりしなるべし。

二〇五 お薩の丸焼

薩州邸の焼討

焼討の原因

薩長の宿意といへば、江戸薩州邸の焼討なども、亦其一に數へられし所ならん。此焼討は、鳥羽伏見役の數日前の出来事にして、實に慶應三年十二月廿四日の夜に在り。予の如き當時、該薩邸附近に住居せしも、尙ほ幼稚にして自から見聞する所も多からず、只だ夜半突然劇しき銃砲の響に駭き、枕を蹶て起ち、屋上の火のみに馳け登り、炎々たる火光を望見せし事を記憶するのみ。後にて聞けば、事の起りは、水戸浪人を匿まひしとか、又は薩藩の壯士が江戸市中を横行し、或者はピストル強盜に均しき振舞を敢てせしとか、甚しきは市

中取締役酒井左衛門尉の屯所を襲撃せしとかにて、最早猶豫なり難しとあつて、遂に三田七曲りの薩邸を包圍攻撃するに及びしとぞ、而して之に加はりし幕軍は、莊内、鹿橋、松山、上山の諸藩にして、佛國砲兵大尉ブリーネの方略に従ひしと云ふ。但し其前一夕、薩藩士の重なる者六十餘名は、風を喰て脱出し、芝浦より胡蝶丸とか呼べる藩船に搭じ、海上に浮みし由にて、其中には、後の元帥伊東祐亨なども交りしと聞けり。之を要するに三田薩州邸の焼討を始め、鳥羽伏見の戦争は、大小各藩感情の衝突より遺恨に遺恨を累ね、報復に報復を加へ、終に大勢奈何ともなし難きに至りし者なる可し。古今を通じ東西に亘り、實に恐るべきは人の感情にこそ。時人此焼討を稱して、薩の丸焼といへり。

二〇六 魚河岸の兄イ

既にして鳥羽伏見の敗報、一たび江戸に到るや、時の町奉行小出大和守、其役宅へ日本橋魚市場行事を召喚し、左の如く申渡せり。

此節、上方筋不容易御時節柄に付、此上薩長の徒攻め下り候はば、御當地の者一致防戦可致儀に付、其方共儀は、兼て人氣荒き場所柄に付、萬一の

節同心協力盡忠可致、尤も平時の上は何事に依らず願筋も可相立候間、一同能々申合せ、銘々得道具相携え可申、此段可相心得候。
是れ實に慶應四年正月廿二日の達なるが、官軍の東下を耳にし、周章狼狽措く處を知らず、人もあらうに魚河岸の兄イ分に向て、一方の防戦を托せんとする杯、如何に意氣地の無かりし事か察するに餘りあり、亦一面には此事實に徴して、如何に革新の迅速なりしかを推知するに足るべし。さるにても昇平二百幾十年、三河武士の末路も亦憐むべき哉。

【追記】 最近刊行の雑誌「江戸」を閲るに、右と殆ど同時に江戸市民の心利きたる者共打ち合せ、最寄々々の名主達を動かし、官軍の先鋒に向つて歎願書を差出す事となし、一方は幕府の御徒士にて開成所に出役せし杉山三八と云ふ人に託し、名主連名の歎願書を作りて、板橋口へ出向ひ、他の一方には芝山内に有名なりし養道和尚に頼みて歎願書を作り、品川口へ出頭させたりと云へるが、是は前記町奉行の采配よりも、確かに「利目ありし事ならん。養道和尚とは後ちの神原精二氏の事にして、予が父とも親交ありし人にて種々面白い話あり、後に記す所ある可し。

二〇七 松飾のいろく

新年の筆始に、吉例松飾の事を記さん。但し其意義由来等は省略し、所々國々による異様の飾方を少しく書き集む可し。

江戸城の松飾

松飾は、江戸時代最も盛にして、是は何と謂ふても、徳川・松平の物に相違なし。先づ當時江戸城の松飾に葉の無き竹を用ひしと云ふ事より記さん。是は同家三河に在りし頃出兵に際し直ちに旗竿に利用せし嘉例に基くと云ふ。

諸大名の松飾

總じて同時代大名等の松飾は、家毎に佳例ありて一様ならず、通例は年末より七草迄なれど、十五日迄置く家もあり。筑前福岡侯肥前佐嘉侯及び松浦氏對馬宗氏、南部盛岡侯出羽龜田等皆な然り。只だ鎌倉地方にては、正月四日早朝に門松を取除く、是は僧侶が松飾の下を通過するを忌むが故なりと。

武田・松平二氏の句合

菅話に、甲州武田氏にては、敵手の松平家を咒はんが爲め、松の頭を切り、竹に添へ門飾となし、之に「松枯れて竹たぐひなきあした哉」の一句を附けしところ、松平氏之を聞き、翌春は竹の首を切り、松に添へて「まづ枯れて竹だ首なきあした哉」と返句を記し立てしが、武田氏は頓て亡びにけりとなん。

九鬼家と蘇民將來

九鬼家にては、松飾の中央に木札を釣り、夫に「蘇民將來子孫之門」の文字を書き、土俗此札を奪取し得れば、其歳運吉しとし、争て取りし者なりと聞く。

伊勢山田地

又伊勢山田にては、門松を立てず、廂及び入口に注連繩を張り、其中央に九鬼家の札に似たる禁厭札を吊る、孰れも古の陰陽道方術の遺風なる可し。又同地方にては、今も松の代りに榊の枝を門柱に打ち着けあるを見る。

姫路侯の家

昔、姫路侯の家中に本城氏と云ふがありしが、其家にては、松は常の様に拵へあれど、態と表へ立てず、裏に臥せ置くを嘉例とせり。是はある歳門松を用意せし計りにて戦に出で、勝利を得たるに因みしと云ふ。又同家中に、元とは名波家に仕へたる力丸氏と云ふがあり、其門松は一方のみ立て、横竹もなければ附くる飾もなし。是も拵へかけし中途に出陣し、勝利を得し嘉例なりとぞ。

佐竹家

佐竹家には門松なし、這は何か困厄の後、勝利ありし嘉例なりと云ふ。織田家の家老の末にて、徳川の旗本と成りし岡田家にも門松なし、是も亦舊家の事故、必ず何かの理由ある可しといふ。

安藤家

安藤家の門松は、徳川將軍家の手に依て立てらる。是は家康が安藤と碁を打ち連戦連敗し、今一局をと強ひられしを、安藤「今夕は歳晩の事ゆゑ、歸りて

松飾の用意仕らん。」と辭退せしに、「門松は更に命じて立つれば可し是非に今一局。」と家康より所望ありしにより是非なく重ねて對局せしに今度は家康の方大勝利を得たり。是よりして年々幕吏來りて安藤家の松飾を執り行へりと云ふ。

平戸の松浦家にては、吉例として椎の枝を折て松飾に代ふ。世に椎木松浦といふは、別に由來ある事也。

對馬の宗家は、門内に飾をなし、玄關の方を正面になす、又松の代りに椿を用ゆ。

肥後八代の宮原は、士族の家筋に限り、門松一本を立て、一本は横に倒し置くを例とす。是は天草一揆以來の吉例なる由。

此他昔の大名の中には、松飾に代ふるに人飾を以てせし家もあり。人飾とは松の内は家人を立て並べ、毎日交代せしめたる者をいふ。

攝州西の宮にては、門松を逆さに立つる家あり。是は姪兒命夜中騎馬にて御通りあるに、門松馬の眼を突き、御邪魔になるとて也。

加州金澤近在にては、真中に竹を立て、三方より松を寄せ掛けて之を縛る、體

松浦家

宗家

肥後の宮原

人飾

攝州西の宮

金澤地方

信州地方

裁は却々立派なる由。

信州南安曇郡の或村落にては、大さ十間許の松の枝を拂ひ、五色紙を飾りたる一條の繩を頂より垂下し、村の者一同力を合せて、之を道祖神の祀りある所に建て、自家は注連飾さへせずして新年を迎ふると云ふ。又同國小縣郡武石村は、山間の僻地とて却て古來の風習を守る者多く、正月の門松は山より切出し、家に着けば、松に年をとらすとて、白米を盆に盛り、其松に振りかけ、殘米を鶏に與へ、鳥に年をとらすと云ふ。松の木は大小二本にて、長さ一丈位のと八尺位のとあり、悉く外皮を剥ぎ、大の方は家の座敷のある方、短き分は臺所のある方にし、之を庭又は門に立つる由也。

土佐の北部、伊豫阿波に接したる吉野川沿岸地方にては、門松の代りに檜又は柳を用ゆ。此地方の村民は、自から平家の後裔と稱へ、萬事他村と殊なる所多しと云ふ。

佐渡にては、歳晩に松迎へとて、山に入り若松を切り、ゆづり葉、豆がらと共に門松、神棚等に結び、又家の大黒柱と稱する二本の柱には、最も美しくしき大松を結びつけ、之を大黒松と稱ふ。

佐渡地方

土佐地方

最後に、今吾等の住居する京都にては、他の大都市に於けるが如き、立派なる松飾を見る能はず、僅に根引の小松を無造作に門際に釘着するを例とす。此儀式的裝飾に對し、斯ばかり冷淡なるは、一には眞宗を奉ずる者の多きにも因る可けれど、元來京都禁中には、一切松飾を行はせ給はざりしに由り、此等の風習を見習ひし爲めかとも思はる。又一説には、往年榎村知事の時代に、殖林に害ありとて松を截出す事を嚴禁せしが、此禁令與つて力ありしとも聞けり。さるにても昔は知事公の命令といへば、斯くまで民間に利目ありしものにや、驚く可し。

二〇七 松飾のいろく 二〇八 松飾の將來

二〇八 松飾の將來

右の如く、一方には門松として、年々若松を多く伐出すは、殖林に害あれば、向來門松に制限をなすの必要ありと唱ふる者もあれば、他方には又之れと反對に、松の殖林は畑や丘の斜面に植付けける者にて、年々其間より良木を残して間引かざるべからず、されば丁度其間引いた松が、門松に賣れ行くは一舉兩得にて、林業家より見れば、將來に於ても大に門松を獎勵するの必要ありと説く者

制限説と獎勵説

もあるが、是は如何にも後者の説の方が尤もらし。

二〇九 江戸と武藏の名稱

「江戸」といふ名稱に就ては、古來幾多の考證もあれど、詮ずる所は、アイヌの呼びし「Endo kotan」といふを略せしに外ならず。エンドコタンとは、夷語にて草木の茂る地といふ程の意也。

次に「武藏」の名に就ても、亦諸説あるが、未だ首肯するに足るものなし。按ずるに、此國は往古アイヌの領せし所なれば、這も亦同種族の呼び習はしゝ者なる可し。今試みにアイヌ語を漁り、之と似つかはしき發音の二三を列記せん。先づ Masashe 即ちマサシエとは、擴げたる事。次に Mun-sash のムンは、雜草、サシは低き響にて、草の風に靡く音といふ程の意義となる。又 Mosa モサ、Mose モセ、Muse ムセの三語は、いづれも皆な葎。麻即ちイラクサとて、刺ある雜草の事なるが、之れに ushi ウシ即ち地帯、國、土場所などを意味する語を附け加へて、Mosa-ushi 又は Muse-ushi とし、モサウシ若しくはムセウシ即ちモサシ又はムサシなどと訓めば、イラクサ茂げる地帯といふ意義となる。

二〇九 江戸と武藏の名稱

江戸とはアイヌ語のエンドコタン

武藏の名稱とアイヌ語の關係

マサシエ ムンサシ

モサシ ムサシ

獨木舟の發見とアイヌ先住の確證

斯く擧げ來れば「武藏」の名に似通へる以上のアイヌ語が孰れも草より出で草に入る廣漠たる武藏野の意に副ふを見出すべし。記して以て後らの教を待つ。

二一〇 舊江戸城南の地名

〔追記〕 アイヌの遺蹟が武藏に着々發見されつゝあるは事實なるが、最近には本篇起草後、北多摩郡より發掘されし特殊の獨木舟によつて、益々之を確むるを得たり。仍て其大要を左に追記すべし。

武州北多摩郡東山貯水池は、古の狭山の池の跡なるが、此頃同所附近を掘鑿中、長さ約十七尺、幅三尺の獨木舟を發見したり。木質は櫛にて船底に皮を附着し、木地の現れし所は木理も判然せるが、全體は腐朽し居れり。鳥居氏の説に據れば、右は既に三千年以上を經過せしものにて、是に由て武藏の先住民が、疑ひもなくアイヌなりしとの確證を得たりとの事也。

二一〇 舊江戸城南の地名

古るめかしけれど、事の序に舊江戸城南方の町地名に就て、少しく記さん。天正十八年八月朔日の家康入府以來、漸次城池を擴め、慶長年間には、更に大

増上寺の移轉

漁村といひ

ひびや町とひびや稻荷

竹柴の里

大森の海苔

芝口御門と芝口

擴張を斷行し附近に散在せし民屋町家をも擧げて他に移し、外濠の邊即ち漁村内にありし三縁山増上寺も、此時代に今の地に移したるもの、由也。茲に漁村といふは、即ちひびやを立て、魚を獲る土俗の棲みし所にて、彼等も同時に全部落を擧げて、今の芝口邊に移住せしめられし者と見ゆ。去れば、芝口の前身はひびや屋町にして、今尙ほ日蔭町内にひびや稻荷の神社あるは、則ち當年の遺蹟なりと知るべし。ひびやを日比谷と書き改めしは、後ちの事也。今日日比谷公園は、昔の漁村の名に因みて命名せられし者なる可し。

今の新橋附近より東南一帯の地は、悉く海濱にして、舊名を竹柴の里と稱へたり。竹と柴とは前掲ひびやといふ物と、些か關係せずやとも思はる。何となれば此邊に住みし人々は、遠淺又は潮入の淺瀬に、枝付の粗朶、又は竹を並べ立て魚の入り來るを待て捕る事を業とせし故にて、今日も尙ほ大森沖にては、海苔採集の爲め盛んに行はるゝ事、人の知る所也。然るに此竹柴の名も、何時の頃よりしてか、竹を取り去り、柴とばかりになり、夫も變じて後には芝となれり。降つて寶永年間に、此方面の固めにとて、新に城門を築き、之れに芝口御門の名を附せられしが、後ちに此邊一帯の地名を芝口と呼び習はされしにより、變

二一〇 舊江戸城南の地名

新橋
露月町と宇
田川町

櫻田村と櫻
川

金洲崎と金
曾木
赤埴とかは
とけ町

二二一 金杉と赤羽

きの日比谷町の名も、何時とはなしに稱へずなれり。此門享保の頃火災に罹りしが、其以來再築せず、橋のみ残りしを新橋と稱へ今に存す。露月町は、元のひび屋にありし老月村を移し、もの、宇田川町の名は、上杉朝興の臣宇田川和泉守の子喜兵衛が、没落して名主となりしに因みしとか。慶長以前の事ならんが、今の虎の門邊を中心とし、南は愛宕山麓より、北は櫻田門あたりまでは、一帯に低地又は水田にして、諸所の畔に沿ひ櫻樹多く植ゑありしかば、俗に櫻田村と呼ばれしと見ゆ、從て其邊の小川をも、之に因みて櫻川など名づけしものならん。

二二二 金杉と赤羽

芝の金杉は、往昔の金洲崎にして、略して金曾木とも書きたり。赤羽は、赤埴の轉、今の飯倉三丁目邊の勾配緩なる坂路を、予が幼年の頃までもかはらけ町と呼びしが、這は其昔多くの土器を製する家ありし故とか。かはらけの色の赤埴に通へること、又一本に土器町を瓦町に作ることに、孰れも多少縁あり。維新後まで赤羽橋の角に、瓦屋とて大なる茶店ありしなど、瓦屋又

は土器屋の名残にもや。

二二三 三田と飯倉

三田は、元と御田に作る。昔伊勢大廟の神田ありしに因る、此神田の稻を收めし地、即ち飯倉にして、今の芝大神宮も、以前は飯倉神明宮と稱せし也。

二二四 網の舊跡

三田に網坂あり、網の塚、網の産湯の井など云ふあり、以て渡邊綱の舊跡なりと傳ふれど、是は俗説のみ。舊記を按ずるに、此地元と三田家の領にして、其家譜に、「三田三河守其子駿河守綱、住武州三田」などあり、又代々綱の字を以て名とせしにより、後人之を渡邊綱と誤りし也。此他、三田八幡境内に網の碑あれど、時代相違せるを以て、同じく三田一黨に屬する者と見る方至當なるべし。尙ほ諸説を綜合するに、渡邊綱由緒の地としては、武州足立郡箕田村あり。這は今の鴻ノ巣と熊谷の間なる八幡社の境域にして、畢竟三田と箕田の混同せし者ならんとの事也。

二二五 三田と飯倉 二二三 網の舊跡

伊勢大廟の
神田

三田家

渡邊綱由緒
の地

二一四 麻布

此地古昔多く麻を生じ、因て布を織り、紙を漉きしより麻生^〇の名を得たり、又一に阿佐布とも書す。古書を按ずるに、天慶年中平將門の亂に、源經基武藏國麻布^〇に在て、將門に従はず云云、又長元元年平忠常朝敵たり、河内守源賴信征夷大將軍に補せられ、先づ武藏國麻生^〇に到て坂東の軍兵を集む云云などあるは、孰れも此地の事なる可し。

二一五 麻布十番と馬乗袴

今の芝北新門前町と、新網町一丁目の中通りを麻布十番^〇と稱す、いと古き字。也是は昔元祿十一年將軍家新たに白金御殿を築く爲め、運漕の便を計り、金杉川口より澁谷迄河浚ひあり、其土工人夫を一番より十番に分ちしが、其折十番組の榜示杭久しく其處に残存せしより、誰れ謂ふとなく、之を地の字として呼ば來りし也。

降つて承應年間、幕府此所に調馬所を置き、十番馬場^〇と稱せしが、維新頃まで

麻生

白金御殿の
新築と土工
人夫

十番馬場

聖り方と行
人方

も多數の伯樂住居せり。從て此附近に馬乗袴専門の仕立屋あり、其制式他と異なり、蹴回し廣く且つ袴腰の下、左右に蟬ありて形ちよく、殊に馬上乗り心地佳しとて珍重され、其結果今に至るまで、十番馬乗袴^〇の名を存せり。

二一六 聖坂と行人坂

芝の聖坂^〇と、目黒の行人坂^〇とは、相對的につけし名にして、其由來は昔高野山に聖り方と行人方との二派あり、互ひに軋轢甚しく、一方に於て善行の爲め坂路を開けば、他の方にも劣らじと坂路に手を着くると云ふが如く、常に相競争せしが、此兩坂を開きしも、全く兩者競争の賜ものなりしと云ふ、可笑き事蹟ならずや。

二一七 二本榎と一里塚

是も亦芝の二本榎と云ふ地、昔は高輪村の内にして、上行寺門前に現存する二株の老榎に因み、町名となれり。東海道の街道が芝田町海岸に通ぜざりし古へは、高輪臺町一帶は海道の筋にして、高輪即ち高繩手なること疑なく、當時

往古の海道
筋

二一六 聖坂と行人坂 二一七 二本榎と一里塚

【追記】市外
瀧野川町西
ケ原農事試
験場の四方
日光街の方
の掘り出し
の二本の上
に矢張り一
本の根を日
探りしに日
本橋より丁
度二里目に
當ると云ふ

餘の木と榎

支那の樂師
と伊皿子

二一八 伊皿子

の旅人は、白金臺より二本榎品川臺に出で、大井・荒蘭今の新井を経て矢口の渡に至る。北方の丘上を通行せしもの也。而して前掲二本榎は即ち元の一里塚の跡なりしと云ふ。但し此一里塚は單に此處のみならず、下谷方面にも近頃其遺跡として榎樹の古株を發見されしと也。上欄追記参照。

因に云ふ、海道の兩側に松を植うる事は、古來の掟の様なりしが、一里塚は二代將軍の時に始めて定められしものにて、當初其標に何の樹を用ゆべきや未定なりし處奉行大久保石見守長安より、「松にては並木と紛れ候はんか。」と伺ひ出でしに對し、將軍は實にもと思ひ、簡單に「然らば餘の木を植ゑよ。」とありしが、石見守當時六十餘りの老人にて耳遠かりしかば之を榎の木と聞き誤り、直ちに命じて榎樹を植ゑさせたりとあり。面白き話と謂ふべし。

二一八 伊皿子

徳川秀忠の時、支那より三人の樂師を聘せしが、其中の伊皿子と云へる者、歸化して山本勘兵衛と稱す。幕府之に邸宅を賜ふ、則ち今の伊皿子町是れ也。承應年間歿す、關東十一箇寺の本山長應寺に葬れり。然るに星霜茲に二百有

伊皿子の子

能役者の歿
落と金剛一
家の残存

金剛唯一翁

二一九 明治・大正能樂の搖籃

餘歲、墓碑の主は只だ廣東人とのみ傳へられしが、近年に至り、市區改正の爲め、該墓地を荏原郡平塚村に移轉せしむる事となり、住職を始め其筋の人々等過去帳を調査し、はじめて前記の事蹟を明確にするを得たり。

又聞く、歸化人勘兵衛の子孫、今尙ほ生存する者二人、一は北海道に、他は牛込區市谷田町吳服商あまざけ屋に同居し、忌辰には必ず展墓香華を供する由なるが尙ほ其筋にても相當保護を與へ、名跡の一に加へんとすと云ふ。

猿樂の能と云ふ者は、如何なる因縁にや、古來其運命を幕府と共にするを定例とせるかの如く、徳川氏崩壞の時も、足利氏瓦解の時と同様に、所謂御能役者は眞に目も當てられぬ程の打撃を蒙れり。然るに當時の紛亂中に立つて傳來の正式舞臺を擁し、毅然として江戸市中に踏止まりて一坐を纏め居りし者之を我が飯倉の金剛太夫一家のみとす。

されば此舞臺こそは、維新後の清孝も、九郎も、六平太も、喜勢太郎の新作も、新の親父の金五郎も、將又流行兒の伴馬が熊本にて師事せし中村平三老人さへ

二一九 明治・大正能樂の搖籃

も皆來つて唯一翁の指導を受け、各々稽古に勵みし所なれば、之を明治大正時代に於ける能樂の搖籃とも謂つ可く、今日苟くも斯道に携はるの輩は、彼の飯倉丘上の往時を忘れざると共に、故金剛唯一翁の功勞を思はずして可ならんや。

今や能樂隆昌の秋に當り、金剛一派が却て他流の勢に壓され甚だ不振の狀態なるを聞き、轉た今昔の感に堪へず、記して以て能樂界の諸士に懇ふ。

三三〇 紳士能

近頃の如く、能の熱が年を逐うて熾烈となり行く様は、寔に未曾有の事也。従て紳士富豪の人達にして、斯道に執心の餘り、吾れから進んで本業の藝者中に交り、舞臺上の役者となる者尠からず。門外漢の眼には、只々御苦勞千萬といふの外なし。去れど、此は是れ各自好ける道に就きて、個人娛樂に資するのみなれば、餘り讚めた業にても無き代り、又敢て咎むるにも及ばざるが、然も之を外にして、一考を要すべき問題あり。蓋は他ならず、所謂公開紳士能是れ也。惟ふに春夏秋冬、其折々の好季節に當りては、如何なる人にも行樂を思は

ざる者はなかるべし。さりながら現時に於ける國民生活の狀態を顧み、世界大戰の進轉を察する時は、何人と雖も、諸物價空前の昂騰が、國民の生活を一日と脅しつゝある事と、有史以來の大戦亂が、上下百般の事物に甚大の影響を與へつゝある事とを看取するなるべし。斯の時に當り如何に紳士能が苦勞なき人達に依て催さるゝとはいへ、貴重なる時間を徒費し、金銀を撒きちらし、自から金色燦爛たる奇装を凝らし、妍を競ひ華を衒ひ、心身を憊らしつゝ、盡日公衆の前に歌舞する杯は、紳士として當に考慮すべき事と思はる。

三三一 女流と能

紳士能に亞で嫌ふべきは女流の能也。前述の如く、近來は能熱も狂熱と變じ、之に冒されたる者共は、種々譚語地味たることを吐き、門外漢を駭かすこと

三二 女流と能

少からず。例へば舞臺上の女性には、必ず婦女をして之れに扮せしむ可し、と云ふが如きは是れ也。

彼の和泉能を觀ずや、素面に紅粉を粧ひ、弱く細き音聲もて、天人や女武者を見せんとするが其下品にして不調和なること、眞に唾棄するに値ひせり。畢竟、女人は謡にも能にも適せず、強ひて其適所を求めば、座敷内にて小鼓位を鳴らし、以て良人の謡曲の御相手する位が關の山ならんか。

予は斷言す、多數の男子は決して婦女の謡曲に満足せじ、否、寧ろ之を聽くを欲せざるなりと。況んや亦其演能に於てをや。但し十歳前後の少女ならば、唯だ可憐なるものとして、見るも聽くも敢て不可なし。或學者は、「閒雅貞淑なる可き一人前の婦女に適應せりとは認め難し。」と切言せるが、予も亦至極同感也。

然るに所謂現代式婦女の虛榮心に富むや、其夫人たると令嬢たるを問はず、孰れも眞心少き師匠の甘言に乗せられ、自己の未熟を覺らざるは勿論、「熊野」を男子と理解する位の程度を以て、普通男子よりも一層鐵面皮に、多人數集會の席上に其技を演じ、或は病者靜養の温泉宿に於てさへ、晝夜を分たず、富士講の

御焼上げに等しき奇聲を振絞り、以て隣房の他客を煩はすなど、其狂態寧ろ氣の毒といふの外なし。勿論此種の男女には、概して藝術研究趣味向上などいふ觀念なく、只だ偏へに浮薄なる世潮に牽かれ、淺墓なる虛榮心に囚はれし結果、斯くは叙上の如き所業を臆面もなく敢てするのみ、嘆ずべき哉。

されば、夫人令嬢達にして、若しも斯道に遊ばんとならば、所謂能謡曲の眞價を辨まへ、其品位を高むる事に心掛け、理性に富める師を選び、指導を受けられん事こそ緊要なれ。去れど予は飽までも斷言す。能謡曲は共に婦女子には適應せず、從て彼等をして漫りに其道に深入りせしむるを欲せざる也と。

三三 謡曲「熊野」に現れたる都の名所

謡といへば、直ぐに出る熊野のロンギにつらねたる名所は、洛東を遊歩すれば、ツイ鼻の先に並び居れるも、初めての人には氣もつかずに行き過ぎて仕舞ふ者多し。仍て今案内者に代り、左に一と通り肥して見ん。

【四條五條の橋】此二大橋は、何人も見逃まじきが、五條の方は、其昔松原通りに架せしものにて、今の位置は、六條坊門通りと云ひし也。天正十九年、秀吉の

移築に係る。

河原おもて

【河原おもて】今の河原町下手、即ち鴨川西岸に於ける五條橋畔一帯の地は、河原左大臣源融の別業のありし跡にて、東本願寺の所有地たる枳殻邸なども、其一部分なりと聞く。此邊を指して河原おもてと云ひしなる可し。

車大路

【車大路】繩手車道の名、今尙ほ存せり。繩手は加茂川堤の礫にて、車道は之れに沿ふ道路也。今の大和大路通りなどいふは、其一部分なるべし。

六波羅の地蔵堂

【六波羅の地蔵堂】松原橋を東へ渡り、大和大路通りの四ツ辻を過ぐれば、其右側に六波羅密寺あり。本堂は東向、其中央に十一面観音、左脇に地蔵尊を安置す。観音も同坐あり、是れ也。尙ほ茲にたらちねを守り玉へやの一句に就て物語あり。昔貧女、老母に死別れ、甚く歎き哀しみ居けるに、一人の老僧來り助け、葬儀萬端を殘らず營まければ、這は日頃信仰せし此寺の地蔵尊の權りに現れて斯くせし由に傳ふ。故に此文句、本尊の観音より、地蔵に向て祈願する意也。

愛宕の寺

【愛宕の寺】六波羅密寺の向側にして、松原警察署の東隣なる等覺山愛宕寺俗に念佛寺と云ふ是れ也。昔此邊一帯を愛宕の里と稱へしが、其名今は只だ

六道の辻

此寺のみに存せり中興の開山千觀上人、不退念佛者にて一生佛號を絶たず、因て人呼んで念佛上人といひ、寺を念佛寺と稱せり。

【六道の辻】今來し道を尙ほ東に進み、左側に二ツ目の小路の行き當りに在る、珍皇寺本堂の前庭を指して斯く云ふ。昔此邊は墓地にて、有名なる慶俊僧都鑄造の古鐘ありし所なるも、今は新鑄のものに代れり。往時は盆前七月九日に、迎鐘として此梵鐘を衝き鳴らし、精靈を迎えしと云ふ。又閻魔堂あり、小野篁作閻王像を安置す、篁夢中冥府に通ひし所なりと傳ふ。冥途に通ふの文句あるは是が爲也。

鳥部山

【鳥部山】六道の辻より東南に方る邊に、往昔茶毘所あり、涅槃堂と稱せし由。鳥部野は西大谷の東北隅より通ずる間道にて、是亦一面墓地なりしが、最近之れを切開き、五條坂より清水の泰産坂へ直通の大道路となしぬ。

北斗堂

【北斗堂】六道の辻の東、凡そ二町程の地に、昔北辰を祭りし小堂あり、之を北斗堂と呼びし由にて、高き柱を建て、常夜燈の灯籠を吊り、淀川を上下する舟人の目標となしと也。北斗の星の曇りなきとは、是れなる可し。

經書堂

【經書堂】清水坂中腹、三年坂上の來光院を云ふ。往古參詣の群集、道俗、小石

子安の塔

車寄と馬留

播磨瀧しか
まのかち路

遠州池田庚
宿

三三三 諸門「熊野」に現はれたる都の名所 二三三 熊野御前の墓
を集め、一石一字法華經を書きしにより、經書の名を残せり。みのりの花も其
縁故なる可し。

【子安の塔】近頃まで清水坂の頂上、南の角にありし、小き美麗なる三重塔也。
今は新高雄の谷を越えて清閑寺の山崖に移さる。坂上田村麿の女、春子、嵯峨
天皇の女御、葛井親王を産せける時、建立すとの由緒あり。

【車寄馬留】經書堂の東なる眞福寺といふ大日堂のある邊なりと傳ふ。

【播磨瀧しかまのかち路】此所に播磨の國名を出すは、頗る突然の様なるが、
播州に飾磨郡あり、裾の染物を産す、一方清水寺々中に、鹿間塚あり、共にシカマ
の音通ずるより、例の縁語としてつゞけたるのみ。下り居のころもより衣を
引出しはるといひ掛け、次に歩行と裾とを取寄せしなど、孰れも謠歌の常套た
り。裾は椎色也。

二三三 熊野御前の墓

「熊野」の出でし序に、彼女と其母の墓に就て、少しく記すべし。

遠州池田の宿は、古へ日永の里と稱し、濱松より東北に二里餘、中泉驛より西

北へ一里許の所に在り、元と東海道天龍の渡場にして繁華の地たり。此地の
梵刹攝取山行興寺は、二世他阿上人が熊野菩提の爲め設けし道場にして、墓所
は本堂の西側に在り、其碑面に

熊野のは

珠月院貞玉法女

建久九年戊午五月三日

母のは

善生院池榮比丘尼

建久元年庚戌四月三日

と鐫刻しある由にて、今尙ほ近郷の婦女、此に參詣するもの多しと云ふ。

二二四 おどろん

謠本を誦んで、疑問の起り易きものを、つぎつぎに記し見ん。

鞍馬天狗の剛力が、いたい氣したるものありと云ひて舞ふ、小曲の末の方に、
おどろん蹴鞠小弓と結ぶ所あり。此おどろんとは、如何なるものかと云ふに
是は今も俗に呼ぶ與次郎兵衛人形の事にて、指頭や鼻の尖にのせ、バランスの
工合にて危ふげに立つを、おどれ、おんどれ、おんどれ、おんどれと囃すより、何時しか

二三三 熊野御前の墓 二二四 おどろん

二三三 馬より下りて沓を脱ぎ 二三六 狩くら
おどろんく。と云ふが如くなりしとぞ。

二二五 馬より下りて沓を脱ぎ

此一句「紅葉狩」に在り。下馬して沓を穿くならば解り居れど、態々脱ぐとは如何と不審する者あり。是れは或書にも「御供衆馬^上にて沓^をぬ^ぎ足^半はき下馬^すべし云云」などあり。足半はあしなかと訓む草履の一種にて常の草履を半より切りたる様に作れるものはありく中に泥を後へ跳ね返すを嫌ふ爲めとあり。又くつといふは今様の夫とは全く異り、爪がけの如き者にて、乗馬の時に限り着けしと見ゆ。支那人の履物の中にも屐あり、藁にて矢張爪かけの様に作れる者の由、恐らくは此類ならん歟、尙ほ考ふ可し。

二二六 狩くら

「小袖會我」などにある狩^くらは、狩^{カウラ}競の略也。是は鎌倉時代の言語にて、富士野又は那須野の狩の如き演武に擬したるものを、斯くは云ひしとぞ。

二二七 綿かみ

「夜打會我」の切りに、わたかみ^{かみ}。搦んで云とあるが、其わたかみは、元來武器を着くるに、鎧^{よろい}ずれ又は脇下の隙を防ぐ爲め、綿を挿み、之を綿噛みと稱へしを、後に鎧の名所となり、肩上に當つて綿の入りたる所を、斯く名づけぬ。即ち綿、繒又は甲襟など書せり。

二二八 簾の梅

梶原源太景季が簾に一枝の梅花を挿さみ、生田口の亂軍中に突進せしは、或は風流の物好きによるものかとの説もあれど、故實家の話を聽くに、簾に挿す矢數は、通例二十四にして、其内一つは、矢からみの緒にて、鎧^{よろい}にからみ着る故、二十三射拂ひ、あと一つ残らねば、悉^{ことごと}びら崩るゝなり云云と。然らば、梶原が簾の梅は、全く風流のみの事にては非ず、矢を皆な射拂ひたれば、止むを得ず、梅花一枝を以て、悉^{ことごと}びらをかためたるならんか。昔は激戦の中にて、此位の餘裕はありしものと見ゆ。

十男より上の子の命名

因に記す、此時の梅は八重紅梅にて、今の兵庫縣三ノ宮驛の北方、生田の森に存在するもの、則ち是也と傳ふれど、幾數代を経たるにや知る可らず。

二二九 那須與一と餘五將軍

與一^〇と稱ぶは、十男より餘りたる子の名也。那須與一は、資高が十一男なるが故に、與一とは云ふ也。又『紅葉狩』に出づる餘五將軍維茂は、上總介兼忠の長男なれ共、曾祖伯父貞盛が甥又は甥の子供等を取纏め、悉く養子にしけるに、維茂も其一人にて中にも年少く、十五郎にあたりければ、世人呼んで餘五君と云ひしとぞ。謠曲には直接關係もなければ、序ながら茲に記す。

二三〇 宗近と稻荷

三條小鍛冶宗近が、稻荷山を信仰せしは、敢て彼の御神を以て鍛冶工の守護神として崇敬せし者に非ず。稻荷は元と農神にて、金工とは何の關係なし。宗近が刀劍を鍛ふるに當り、燒刃用として必要缺く可からざるは、彼の山より出づる埴土也。故に彼は必要ある毎に、そを探るため密々に、屢々往來しける

稻荷の神は金工と無關係
燒刃用の埴土

二二九 那須與一と餘五將軍 二三〇 宗近と稻荷

荒神と山の主

百間田の姥石

より、傳ては宗近こそ、此御神の加護の下に名劍を鍛ちけるよとの俗説を生ぜしならん。去れば、稻荷の禰祭、火祭杯は、全く理由なき事也。

二三一 山姥と天狗

近代學者の説を聽くに、山姥も天狗も、皆な山の精と稱する部類に屬すとあり。即ち先住民のいち早く歸順せし者は、國津神と稱せられ、頑強に抵抗せし者は、荒神^{アラノカミ}又は荒人神^{アラヒトカミ}など、呼びて追ひ退け、彼等が山中に入れば、山の主又は山の精として敬遠し、後には之を山姥、天狗なども云ひし也。

姥神即ち山姥に關する傳説は、信州相州に少からず、殊に足柄山などは最も有名也。又壹岐國には、百間田^{ヒヤクマノタ}の姥石あり。こは、昔高麗よりスマンカクセイと云ふ女人來り、此石の下に隠れ棲みしより、姥石と名づく^〇と傳ふ。或は是等が、百魔山姥の種子にはあらざるや。

二三二 能に現れたる天狗の姿

今より十數年前、龍動にて、一夕友人に誘はれ、其頃最も盛名を博し、オリン

二三一 山姥と天狗 二三二 能に現れたる天狗の姿

オリンピア
演武場

演武のさま

特殊扮装の
一團

天狗然たる
土耳其古代
の騎兵

二三二 能に現れたる天狗の姿

ピヤ演武場を見物せし事あり。此演武は世界の有らゆる國々に於ける古今
歴代の軍装を調査して、悉く之を模擬し、實際に其武を演ずる大仕掛の興行な
れば、其建物の如きも、我が兩國の國技館を十以上も集めし位の大建造物にし
て、軍兵千人近くも寄せ集め、羅馬時代の戦車もあれば、カバラソンの馬隊もあ
り、宛然アト、ギャラリーの名畫より抜け出て來りし古代人物に、面のあたり
接するの感ありたり。其他、打見る一方には、元山の搖ぎ出でしかと疑ふばか
りの駱駝隊あれば、天馬空を駛るが如く、殺到し來る龍騎兵あるなど、其千差萬
別の軍装、一々應接するに違あらず。

斯かる所に、油然として黒雲の湧出でたる如く現れたる一團の人馬あり。
其行装を視るに、全然他と趣を異にし、身には金色燦爛たる甲を着流し、頭は長
髪の上に小桶大の圓錐帽を戴き、其人悉く赭顔、鬚髯にして、眼光炯々、殊に目立
て隆鼻なるを認む。更に奇々怪々なるは、双肩の後方に大鷲の羽翼の如き者
を負ひ、總員馬上に活躍する有様にして、勇壯の中にも一種凄愴の氣味あり、人
をして彼の雲を起し風に乘じ、鞍馬の山谷を震動して押出せる荒天狗の群な
らざるかを疑はしめたり。仍て之を傍人に質せしに、焉ぞ知らん、こは是れ土

土耳其人の
漂流者と天
狗の關係

長範は盜賊
の長本に非
ず

耳其古代の騎兵に擬したる一隊ならんとは。是に於て予は「去るにても、其
行装の餘りに我國の錦繪又は能に現はるゝ天狗の姿に酷似せる事よ。」と思
ひ、當夜の觀覽中最も深き印象を得て歸寓したり。
仍て惟ふに此「天狗」なるものは、我國に於て何人が如何なる動機に因て、接
出せし意匠なるかは知らねど、萬々一にも、其昔我國に漂流せる土耳其人の容
貌風采を看取し、以て所謂「天狗」なる理想的人物を作り出せしには非ざる歟。
但し這は固より予が臆説に止まりて、全く夢の如き話なれども、前記演武場に
於て、初めて土耳其古代の騎兵を觀し時の感想として、茲に其次第を記し置く
事とせり。

二三三 熊坂長範

或古き書に、謠曲に出でたる熊坂長範は、信州の一名族にして、決して世に傳
ふるが如き、盜賊の長本に非ざる旨を記載しありたり。其書によれば、長範は
保元の役左馬頭義朝に従ひ、根井大彌、太行親等と共に、待賢門を進撃せる二十
七騎の一人にて、彼の牛若が吉次、信高に伴はれ、江州鏡の宿に於て惡徒を討ち

二三二 能に現れたる天狗の姿 二三三 熊坂長範

二三三 熊坂長範 二三四 錦木
し事は義経記にも出でたれど、其時の強盗は、實は羽州の人由利太郎と、北越の人藤澤入道等にして長範に非ず、只だ彼等が熊坂の名を詐り、無頼の徒を集めしに過ぎず。保元平治後、源氏滅び平氏起るに際し、長範の一黨は不遇の境遇に陥りしも、其威名尙ほ四邊に轟きしかば、群盜其名を假て劫掠を擅にせる事、是れ固より有り得べき事柄也。此等の事實に徴するも、義朝の遺臣たる長範が、何條牛若を襲ひて、其手に殺さるゝ事やあると。果して然らんには、熊坂なども、謠曲作者の御蔭にて、飛んだ濡衣を着せられし者といふ可し。

二三四 錦木

能に「錦木」の曲あれども、奥羽地方には、古來嘗て左様なるものも無く、又斯かる風習あるを聞かず。然るに、昔蝦夷人の多く住みし國々に就て之を觀るに、其地方に散在せる巫女は、「オシラサマ」と稱する一尺程の木片を持てるが、是は恐らく彼のアイヌの祭具、イナオといふ木の削りかけと、同一系統のものなるべし。今も秋田、山形、岩手等の諸地方に住める巫女の持つ木片には、多くは男女二神の形を刻み、絹綿又は細く截りたる布片を以て之を包み、祈願、口寄

せ、咒咀等に用ゐる居れり。

惟ふに錦木とは、昔時、上國の人士がアイヌ部落を巡視せし際、適々夷女の持てる珍らしき木片を踏て、獨斷的に懸想文の一種ならんと想像し、之を種子に戀物語をさへ作り出で、尙ほ一層都雅に聞えしめん爲め、錦木などと命名せしには非ざるか。アイヌの男女間には、断じて懸想文に似たる風習はなく、彼の木片は單に神を祭り祈願する爲めに用ゆるのみ。又錦塚といふ者も、此祭具の古くなりしを集めて埋めし所をば、後人の斯く呼び習はしゝにやあらん。今日も青森縣淺蟲温泉と野内驛との中間なる、山麓の民屋前に、錦塚と稱する者あれど、うけがたし。

二三五 ウトウヤスカタ

少しく面倒なる話なるが、是は流儀により、烏頭又は善知鳥と書して、之をウトウと訓ませ、陸奥外の濱獵夫に關する傳説を引き、一齣の悲劇に仕組みたる能の標題なるが、偕て如何にして之をウトウと訓ませたるか、問題也。但し其傳説たるや、青森市安方町善知鳥神社の縁記、中納言烏頭安方に關する所と

二三五 ウトウヤスカタ
同一にして固より附會の妄談に過ぎず。

一説に、善知鳥は短翼類の水禽にて海雀の類、北海道沿岸に産し、冬期は暖地の海岸にも見はる。大さは鳩位にて、橙黄色に黒色を雜ぜたる大なる嘴を有し、嘴の上部鼻孔の間に角状の突起部あり、秋落ちて春復た生ず。アイヌ語にて之を *Otuo*。即ちオトイエと呼ぶより或はウトウと轉じたる者ならんか、去れど善知の二字を充て訓ませたる理由、定かならず。憶ふに這は愛情深き親鳥と雛との傳説により、附會せしものなる可し云々と。

然るに、ウトウヤスカタといふ固有名詞の生じたるは、全然此鳥とは無關係にして、別個に一の理由ありて存す。そは、前記安方町に齋れる神社の原名より出でたる事也。即ち此社は元來アイヌ族の安方浦に齋きし神にして、夷語にては之を "Onushi-ya-Shokaha"。即ちオタウシ・ヤシヨカタと云ふ。オタウシは砂場の意にて、ヤシヨカタは陸上の水神の意なれば、是は當さに砂場の陸上水神と譯して然るべし。されば此夷語のオタウシ・ヤシヨカタよりして、ウトウヤスカタの出でし事疑ふべくもあらず。アイヌ語研究者の一説として掲げ置く。

二三六 『翁』の謠

『翁』の謠といふ者は、断片的にして一貫せる意義を有せず、甚しく不得要領なるが、其不得要領の所が、即ち此謠の神聖なる所と言はゞ、夫れ迄なれど、實は其文句中には滑稽を通り過ぎて、奇怪なる個所さへあり。

例へば

翁、總角や、トンドヤ。地、ひろはかりや、トンドヤ。翁、ハア坐して居たれ共。
地、まえらうれんげりや、トンドヤ。

の如きは、加茂真淵の説に據れば、這は催馬樂の總角にある

あけまきや、トンドヤ、ひろばかりや、トンドヤ、放りて寝たれども、まろび合ひにけり、トウ〜かより合ひにけり、トウ〜。

より引用したるものなりと云ふ。然るに今此句を、現代の俗言に直すときは、男の子と女の子が、一疊許り離れて寝てゐたが、併し、いつの間にか引ッ付き合ッて寝て仕舞つた。

といふが如き、甚だ奇怪なる意味となる。是では能の神聖も、餘り當にはなら

二三七 幕府時代の能役者評

大谷木醇堂著「燈前一睡夢」の一節に曰く、

「一體能役者は、世の俳優と同様に、長吏彈左衛門の配下に屬し、彼の柏筵才牛のいひし如く、全く錦着て坐敷の上の乞食に相違なし。元來此猿樂は、鎌倉幕府の制定には、長吏の支配なりしが、徳川氏となり、町奉行の配下にもなり、又觀世實生の如くに、將軍の師範とも成り、御用を勤むる時は、參政方の直支配同様の扱を受くる事もあり、定めありて定めなき、一種ちうぶらりん、おもしろき境界を渉る、羨しき身分にこそあれ云云。」

能役者全盛の徳川時代にてさへ、具眼の士は既に斯くの如く極言せり。隆盛に誇る今日の能樂師等、以て如何となす。

二三八 能の變遷と歌舞伎との關係(座談)

一夕、門生某來り、質すに能の變遷と歌舞伎との關係を以てす。仍て平生の所感

を陳じ、忌憚なく之に應ふる所ありたり。本篇は則ち其當時に於ける談話の梗概を彼が筆録せるもの也。

流行物と云へば、茲十數年來、能樂ほど世間に持て囃されたものはあるまい。今日では、縉紳富豪の徒は固より降つて會社員乃至腰辨の輩に至る迄、所謂猫も杓子も、之を習はない者はない。否、習はざるまでも、之に關して多少の知識、多少の話柄を持つて居らぬ者は、恐らくなからう。斯くして此「能樂」と云ふものは、今日の社交上、實に缺く可らざる唯一の要具となつて仕舞つた。

が併し、予を以て之を觀れば、能共者は、固より悪いものではないが、ざりとて、世人が自己本來の業務を放棄して、之に熱中しつゝあるほど、爾く價值ある偉いものとは認められぬ。殊に之に携はる能役者の如きは、能樂が世人の嗜好に投じて、大流行を極めつゝあるを以て、能樂ほど偉いものは、他に之れなしと思惟し、孰れも大天狗になり濟まして、大威張りに威張り居るが、是は寔に片腹痛い事でもある。彼等は、今日こそ能役者として、世人から多大の尊敬を受けてゐるものゝ、其源を繹ねると、彼の川原乞食と賤められた芝居役者と、全く同根なのである。のみならず、今日世人の専ら弄ぶ謠曲の如きも、之を文學上

赤裸々の能

猿樂

「能樂」と稱へし由來

戯曲の發達と滑稽味

より觀れば、國文漢文を捏ちた趣味ある一種の文章であつて、濫りに批難すべきものではないが、然も其由來を究めると、今人が仰山に又熱狂的に云ひ囃すほど、爾く權威あるものでも何でも無い。以下予をして少しく「赤裸々の能」に就て語らしめよ。

抑も能樂は、元と猿樂と云つて、中世以後、徳川時代から明治の初年迄は、單に之を能と云ひ來つたので、今でも尙ほ或一部には、其稱呼で通つて居る。然るに此能も、徳川幕府の瓦解と同時に、一旦全滅したが、明治の御代となり、紅葉館に其舞臺を造つた頃、誰やらが之に「能樂堂」の文字を題してから、改めて「能樂」と稱へ始め、爾來今日の如き盛況を見るに至つたのである。

我朝上古の俳優風俗、歌舞が如何なるものでありしかは、未だ詳に知ることは出來ぬが、學說に據ると、凡そ世界にありとあらゆる戯曲の起原發達は、先づ以て滑稽的のものから始まると云へば、我朝上古の風俗歌舞の如きも、亦恐らく同じやうに、滑稽趣味を以て起つたものであらう。

神話にのこる天の岩戸の宇受女の舞が、如何に可笑かりしか、將又海の幸、山の幸の争ひの時、兄尊が負けて、積鼻をかき、足を舉げて踊つた様の如何に滑稽

猿樂の元はサルガウ

サルガウは今のニハカ茶番の類

散更と猿樂

猿樂家の觀たる猿樂

なりしかは、上古史を繙きし人々のよく知れる所であるが、斯かる戯れ事をば、古くは「サルガウ」と云ふたのである。されば人の能く引用する源氏乙女の巻に「サルガウがましく云々」とあり、又宇治拾遺の夜神樂の所に「家綱に今宵珍らしからんサルガウ仕れ云々」とあるのが、即ちそれである。

サルガウは、俗に謂ふザレゴト、即ち滑稽談話の意にして、今のニハカ茶番などの類に當つてゐる。而してそれが又素人にも出来る位の程度のものであつたが、後には今の能の狂言位までに進み、終には黒人の一藝とする程に進歩した。ところが、當時支那朝鮮から、佛法と共に輸入した種々の雜藝中に「散樂」又は「散更」と云ふものがあつたが、音の似寄つた爲めでもあらうか、彼此混同して、サルガウ、即ち猿樂と云ふ名稱となつたのだとの説がある。

一説に猿樂とは、其時代の歌舞社會を獨占して居た、猿樂家や伶人などの眼から觀て、其所作なり舞曲なりが、無下に卑しく、演戲としては似而非なるもの、即ち猿の人真似であると貶稱した名で、例へば今の能樂師が、狂言方を一段も二段も卑んで取扱ふやうなものだ、と云ふ事である。

然るに又一方の能樂師仲間では、猿樂は元と申樂と稱へたもので、それは推

古帝の御宇、奏の川勝が神樂を和らげ作り出したるを以て、神字の偏を除いて申樂とし、後ち又申字の上下を省いて田樂としたものだといはれるが、是は彼等が何とかして、猿樂を神聖なものにしようとしたの附會説で、固より取るに足らぬものである。殊に彼等が力説せる田字の由来などは、甚だ滑稽極まる附會説で、其謂ふ所が既に業に猿樂的で、十分の可笑味がある。

猿樂の名義穿鑿は、先づ此位に止めて、次は沿革の本题に入るとしよう。

借、日本の文明の殆ど總てが、西方から東漸した事は、今更ら言ふを須るず、從て彼の歌舞音曲の如きも、矢張り其例を免かれなかつた。即ち奈良朝時代には、種々雑多の音樂が、佛法に伴つて支那朝鮮から渡來したが、此等の音樂は、仁明醍醐村上等の御宇を経て、次第に整頓され、之と同時に、少しづつ日本化されて來た。今日純大和式だなどと言はれる御神樂にしても、其源は矢張り是からである。降て一條帝の御宇に至るや、帝は其多くの曲中から、御親ら神樂東遊の數曲を選び、て、祭事や内侍所に奏せしめ給ひ、又催馬樂風俗歌の中からも、宴樂用の數曲を採らしめ給ふたので、是で平安京の御遊管絃の樂は、略ぼ定まつた譯である。

是より先き、聖德太子の伎樂から出た、大和杜屋郷の樂戸と云ふのがあつた。而して此樂戸の中に秦氏があり、秦氏に氏安と云ふ者があつた。然るに此氏安が唐樂の雜藝散更に巧みなりとて、村上帝に召されたと云ふことであるが、何時の間にやら、此散更を猿樂に結びつけて仕舞ひ、氏安を以て猿樂の開祖だなどと云ひ、是からして後代大和猿樂師圓滿井座初代金春は、氏安二十九代の後裔であると言ひ傳へたが、是は固より例の傳説に過ぎない。

斯くて朝廷の方には、雅樂所があつて、朝要の事は總て之を奉仕し、又諸寺社の方は、寺家と樂戸で之を世業として營む事となつた。但し此等は、略ぼ近代の巫子若くは神樂師に類したもので、孰れも雅樂を以て、神佛に奉仕した者である。

以上の如く、朝廷乃至社寺に於て奏する、神樂、法樂、宴樂の管弦、雅樂等は、其曲といひ調といひ、固より清雅崇高のものには相違なかつたが、それでも人心を樂ませる音樂としては、縦令上世とはいへ、餘りに高尚に過ぎた爲め、諸人の感興を牽くべくもなく、殊には、元來が異國の調であつたので、自然と本土衆民の耳に適せざりしと見え、上流には兎も角も、中流以下には、全く顧みられなかつ

たのである。

のみならず、高貴の方々でさへも、此種のものでは嫌らず思ふたものか、私に田夫野人の遊興に目を着け、機會さへあれば、寧ろ卑俗なりと貶されたさるが、うがましき者共を召寄せて見たり、或は田野に出て、農家の男女が打交りて行ふ田植祭をさへいと興ある事のやうに見物したといふ位である。従て田樂の舞といふのは、此等の事蹟から起つたものだと言ふのが、蓋し實説らしい。田樂が、元と田家新年の祭事から出た事は、既に前述の如くである。然るに當時佛法全盛の餘波を受けた爲め、後には田樂法師といふ僧形の者の專業となり、巧みに手品、輕業の曲藝を雜へ、又風俗歌舞の所作をさへ仕組む様になつた。

田樂の起原

田樂法師

新猿樂

田樂の出現と前後して、新猿樂と云ふものが出来たが、是は極く簡易で、素人にも出来る茶番に似たサルガウの變化したので、素人茶番が何時しか黒人の本業となり、それに根本の滑稽以外に、田樂と同じく人情世話物、風俗歌舞等を加味した上、諸國へ押し擴めて興行するやうになつたのである。是が恰も平安朝の末の方で、雅樂の段々に衰へんとする頃であつた。

雅樂の衰微と田樂新猿樂の隆盛

「能」と云ふ稱呼の由來

能樂の樂字は蛇足也

雅樂が次第に廢れ行く一方には、朝野の人氣を迎合して起つた彼の街氣満満たる田樂や新猿樂は、年一年と隆盛を加へ、殊に田樂法師の機敏さは、單に民間を風靡するのみか、嘗ては樂戸の獨占せる神社佛閣にまで侵入し、法樂と唱へて、信徒の善男善女を誘引する道具となし、奈良叡山、伊勢住吉又は法成寺等に在りては、特に田樂法師や咒師の能者を養成する事を、餘儀なくさせられた位であつた。

序でながら、茲で一寸「能」といふ事に就て、一言して置かう。世間では此能を以て、彼の猿樂の異名のやうに思ふ者が少くない。が、此能は、元と能者、藝、能、堪、能などの能の謂ひで、樂や曲の總名ではない。ところが、田樂や猿樂に就て、其藝術に堪能の者や、乃至は其高尚優美の點やらを稱して、人々が田樂の能と言ひ若くは猿樂の能と言ふたのが元で、終には一般に只だ「能」とのみ言ひ放つ様になつたのである。従て能樂の樂の字は、實は蛇足に過ぎぬのである。中には又「能藝」と稱するがよし、杯の説も耳にするが、是もいらぬ事で、矢張り單に「能」の一字だけで十分である。或人は、此能を外國語に譯さんとして、「No. Da noe」又は「No. Act」など試みたが、孰れも妥當でなう。是は矢張り何處まで

田樂の兩樂
は元と傀儡
の群

延年の舞

二三八 能の變遷と歌舞伎との關係
も No.1 No.1 である、呵々。

上記のやうな次第で、田樂新猿樂は、殆ど同時代の産物であるのみか、此二者は他の風俗歌舞伎等のそれと同じく、元は傀儡の部類に属したものである。尤も、時代によりて、一盛一衰はあつたが、それでも当初は、田樂の方が上下を通じて最も勢力を有し、猿樂の如きは、僅に田樂の後塵を拜して起つたかの觀があつた。殊に社寺乗取りに先鞭を着けられた杯は、如何に當時の勢力に懸隔ありしかを、證するに餘りあらう。

斯んな工合で、兎に角、田樂と猿樂の二者が、並び起つたにも拘らず、當時尙ほ佛法が全盛であつた爲め、後白河法皇の勅命とあつて山門の遊僧共は、別に「延年佳例の舞」と云ふものを組立て、之を盛んに行つた。此舞は三十間四方もある、廣い芝生を舞臺とし、周圍に甲冑を帶した警護の武士を並列させ、綺麗な狩衣を着飾つた美童を中心にして、色々の装束した法師共が打交りて演舞するので、遊樂としては、寧ろ莊嚴を極めたものであつた。のみならず、それが又

遊君・白拍
手・幸若・男
舞の全盛

昔時の猿樂
師は非人乞
食の群なり
してはなかり

下衆猿樂と
侍猿樂

元來雅樂の變態であつた爲め、優美の點に於ても此上ないので、後世猿樂の舞の型なども、是から出た所が少くないといふ事である。

後鳥羽院の御代、上皇院政の間は、武門横暴を極め、上下放縱度なしと云ふ有様であつたので、斯かる時代のならひとして、到る處に遊君・白拍手・幸若・男舞などの如き、淫靡のもののみが全盛を極め、他は恰も月の前の灯火同様の姿であつたが、それでも流石に高貴の家々だけは、遊樂として時々南都の僧侶に例の延年の舞を演じさせた事はあつた。

降つて順徳院の御宇となるや、上にはいたく猿樂を厭はせ給ひ、庭上にさへ參る事ならぬ旨、堅く禁止させ給ふと、古書に明記してある。又或他書には「猿樂傀儡等も、亦た悲田院の部類と云へど穢惡(不淨)の事に與からざれば、世人火を隔てざるにや云々」と見えてゐる。此悲田院の部類とは、非人乞食の謂である。してみれば、今の能樂師の先祖たる猿樂師等も、昔時は辛うじて穢多扱ひを免かれた程の境遇に在つた事は、是れだけでも既に明かである。

此外、明月記などには、「下衆猿樂を召さるゝ先々、此事なし、仍只侍猿樂を可召云々」とある。下衆猿樂とは黒人の猿樂師、侍猿樂とは素人の猿樂師の事であ

猿樂の衰微
と田樂の隆昌

一忠

觀世の先祖
田樂を研究す

猿樂師の末
路

二三八 能の變遷と歌舞伎との關係

るが、是に由ても本業の猿樂師は、朝廷の御用は勤めなかつたものと見える。此處までは猿樂もかつくに田樂と雁行して、世間遊樂の一に數へられて來たが、北條執權時代となつてからは、其名頓に聞えずなりゆくと共に、幸若世に出で、田樂最も隆盛を極むるに至つた。殊に高時の斯樂に對する熱狂は、人の能く知る所で、其浪費夥しく、果ては諸大名に課して費用を徴するなどした爲め、終には是が原因となつて、身を亡ぼしたと傳へられる程であつた。

田樂は斯くの如き勢を以て、建武の頃迄流行したが、其根據地たる近江の國には、本座・新座といふが設けられ斯道の上手と稱せられた一忠が其棟梁であつた。然るに其當時大和の人で、自ら結崎次郎清次と名のる者がやつて來て、この一忠に師事し、悉く田樂の能藝を修得した。是れが即ち後來足利將軍の寵を得た世阿彌の父觀阿彌で、今の觀世の先祖と稱する者であつた。

前記數十年間に、猿樂の衰微甚しく、彼の徒の多くは、寺社山門に隠れ、法樂の田樂法師又は樂戸の末流と結び、中には種々の歌舞音曲を練習して、再興の地步を作るに汲々たるものもあつた。前の清次の如きも其一人であつた。寛喜から北條氏の末にかけ、室町將軍の初め迄は、田樂のみ行はれて、世に猿

山王權現の
加護と稱す

田樂の氣勢
一頓挫

喝食と稱す
る美童

樂といふものは殆どなかつたが、南北朝の貞和五年、京都四條架橋勸進の田樂能の時、突然日吉山王權現の示現ぢやと聲明しつゝ、猿面を被つて飛出し、一場の猿樂を演じた者があつた。此不意の出來事があつた以來、如何なる譯か知らぬが、さしも旺盛を極めつゝあつた田樂も、氣勢頓に挫け、復た昔日の觀を呈せざるに至つた。之に反して一方の猿樂は、山王の加護に依りてか、漸次名聲を回復し、茲に再興の氣運に向つたのである。但し山王の示現と云ひ加護と云ふも、是れ固より山門衆徒の後援を意味したもので、時人も私に其事實を認めては居るが、さて勢に恐れて敢て咎むる者もなかつたのであらう。

夫にしても厭ふべきは、其頃の諸寺院山門の風儀である。即ち當時の寺院山門では、内に多數の美童を蓄へ、表面は喝食と稱し、髪を鬘ね脂粉を加へ、宛然たる婦女子の似く粧はせ、而して裏面に於て最も忌むべきの所業を恣にした。其中には、無論淪落した猿樂師の子弟などもあつたので、山王の御加護がありし事や、又は世間が敢て怪まなかつた理由も、略ぼ察するに難くない。

斯うした寺門の惡風は、忽ちにして世上一般に傳染し、上下の士民は、孰れも此美童を愛顧する様になつた。時の將軍義滿の如きも、固より其道の好者で

義滿幼童藤
若に悉満す

清次父子の
努力

作曲の基礎

二三八 能の變遷と歌舞伎との關係

あつた所から、夙に猿樂觀世清次父子の姣美を愛し、遂に之を襲幸したのである。殊に義滿が清次の子藤若通稱は世阿彌、左衛門大夫元清と云ふに目をつけたのは、永和四年今熊野の猿樂で藤若が甫めて十二歳位の折であつた。それ以來義滿の寵愛一と方ならず、押小路の内大臣の如きは、義滿と世阿彌との關係を大に擯斥したと云ふ位である。序に云ふが、此世阿彌は、義滿歿後、事に座して佐渡に配流された。

清次父子の兩優は、性質が伶俐の上に、多少の文才もあつたらしい。それは、從來散逸した幾多の謠ひものを修正して、謠曲としたり、或は鼓や笛の音調を整へ、若くは舞の手振りを改めて優美にしたりして、只管力を伎の向上に致したといふに徴しても、之を推量する事が出来よう。

斯う云ふ次第であつた爲め、義滿は愈々滿悦で又益々沈溺した。而も一方には、侍臣を始め公卿僧侶乃至俳諧師等文藻のある輩が皆な將軍の意を迎へ消閑の餘だとか、慰みに出来たとか云ふては、謠ひの文章を作つて清次等に與へたものが、つもりく、て數百番と成つた。今日公然觀阿彌の作とか、世阿彌の作とか云ひ傳へる謠曲の中にも、此類のものが土臺となつて出来たのが、定

能の大成

徳川時代の
能

御能と御能
役者

めて多くあらうと思はれる。

次で義政の代となつては、萬事が例の東山式であるから、謠曲位で満足の出來よう筈がない。従て其結果、歌・語・樂・舞・所作の五者を組合せて、一番の能藝を編成させ、尙ほ其上に一層之を美化する爲め、金襴緞子・綾・錦を以て、壯麗人目を眩ます底の衣装を着飾らせたので、猿樂の能も茲に全く大成し、遂に武家の式樂と定めらるゝに至つたのである。されば此時代こそ、眞に今日盛に行はるる能の發祥點とでも、言ふべきであつたらう。

室町時代から江戸幕府迄の經過は、之を省略するとして、偕て徳川氏三百年の天下に就て、斯界の形勢を觀るに、此時代は正しく能藝充實の時代であつた。即ち彼れの家は、先づ貧弱より富強に進み、粗笨より精細に移ると同時に、次第に質素簡單が虚飾繁禮に變じ、足利の流を汲んだ式樂の能なども、漸々重要視さるゝ様になり、終には武士たるものゝ一藝と認められ、儀式的宴會には、御能と稱して無くて叶はぬ一の機關となり、果ては俳優風情が御能役者太夫などと呼ばれ、俸祿を戴き士分の待遇を受くるのみか、其職をも世襲とするに至つた。

三三八 能の變遷と歌舞伎との關係

然るに、最初に述べた通り、幕府瓦解と共に此能も全く衰退し、役者も太夫も悉く四方に散亂し、中には先祖の巢窟に歸り新參とまでなつた者もあつたやうだ。さり乍ら、明治聖代の餘光により、幾程もなく氣勢を挽回し、昔に勝る今日の隆盛を見るに至つたのは、是れ偏に近代文化の賜物ではあるが、抑も亦た足利・徳川兩時代に涉れる培養の效果、與つて力ありと謂はねばならぬ。以上、予は予の記憶をたどつて、臆氣ながらも能の變遷に就て、略述したのであるが、尙ほ最後に一言したいのは、今いふ能樂を業とする者と、現代の歌舞伎役者との關係である。

今の能樂師、即ち以前の能役者は、嘗て幕府や大名に仕へたと云ふ所から、兎角に尊大の氣風が失せず、局外者からは、同一階級の俳優と外思はれぬ歌舞伎役者をば、全く土芥の似くに視賤す様であるが、是は以ての外の不料筋である。熟く考へても見よ、今の所謂歌舞伎狂言とても、元は巫女舞から出たとあれば、其人達は賤民には相違なきも、強ち穢多仲間ではなかつたので、前述の通り必ずや能役者の先祖等とも、群を同じうしたに違ひない。否、單に群を同じうしたのみか、其先祖同士は、或は親類であつたかも知れない。

加之、其演じ來つた藝術を比較しても、昔の芝居は今の能狂言に近く、古の猿樂は必ずしも今の如く嚴格でなかつた事は、叙上の通りである。古圖書の示す所によるも、舞臺などさへ兩者共大同小異であつたし、又昔芝居狂言は、矢張り一段切の趣向で、幕もなければ道具立もなく、贅さへも被らずに演じたもので、是は殆ど能其者と全く似通つて居る。

然らば、何故是が歌舞伎の能として、田樂や猿樂と同様に扱はれなかつたかと云ふに、元來此伎は、兩樂の内に常に含蓄されて居たので、否、寧ろ兩樂が歌舞伎の傘下に在つたので、固より分離されべき性質のものでなかつた。即ち兩樂を流布させるに必要であつた風俗歌舞や所作と云ふものが、夫れであつたのだが、時勢の變遷からして、丁度足利時代に、猿樂の心髓たるサルガウの一分子が沈澱して能と分離され、新に狂言と云ふ一派の者となつたと同様に、田樂や猿樂に珍重がられて來た歌舞伎が、自然の淘汰で孤立して仕舞つたと見るの外はない。

然うして見ると、歌舞伎も能も元は一つで、謂はゞ同根同出の藝術であつたに相違ない。のみならず、北山殿の眼光が、當時の猿樂の俳優に注がれず、却

三三八 能の變遷と歌舞伎との關係

兩者地位の
顛倒

僥倖なりし
先祖の餘榮

歌舞伎役者
を蔑視する
勿れ

唯一翁五代
目菊五郎に
千筋の傳を
允す

三三八 能の變遷と歌舞伎との關係

て歌舞伎役者の方に向つたとしたら、其結果は果して何うであつたらうか。
若し然うであつたら、今の歌舞伎なるものは、それこそ能樂以上高尚にして
權威あるものとなり、猿樂の方は、其儘昔の歌舞伎にも及ばぬ程の貧弱な藝道
で、或は終つたかも知れない。之を要するに、能の今日あるは、固より能樂師自
身が偉かつた譯でも何でもなく、又彼等が舊能役者であつたが爲めでもな
く、其真正の根元は、物好きな狂將軍が出た爲めに、一時を僥倖し得た先祖の美
童の御蔭に在りと云ふ事を忘れてはならぬ。

とはいへ、世の中には、随分同根同出の間柄も、自然淘汰の結果からして、互に
相反するものも尠くないから、敢て獨り能役者等ばかりを咎める事も出来
まいが、さりとては、又互に藝術家同士であり乍ら、今更歌舞伎役者を河原者
などと呼んで、全く別人種でもあるかの様に、貶し面や黒幕の蔭から、竊に彼
等を蔑視するなどは、寔に以て面白からぬ事共である。

そこへ行くと、稀代の名人金剛唯一翁などは、實に開けた者であつた。翁は
嘗て五代目菊五郎に、土蜘蛛千筋の傳を允したと云ふ廉で、當時能界より幾多
の批難攻撃を受けた事があるが、今よりして之を觀れば、翁の如きは、克く己を

知り、又克く時勢を解した人であつた、と謂はねばならぬ。尙ほ翁の傳記や逸
事を語れば、いくらでもあるが、最早夜もいたく更けし事とて、夫は他日に譲る
事にし、今は只だ能及び歌舞伎を本業とする人々の爲め、敢て茲に一言を述べ
置くに止めよう。

二三九 茶の湯の始めと其末路

近時、我が上流社會に於て、遊樂の一として流行する者、能を措ては茶の湯な
る可し。茶道の起原に就ては、種々の傳説もあれど、詮ずる所、鎌倉時代の末葉
に在り。

或考古家の説に據れば、室町の初めまでは、茶の會、酒宴など併稱せられ、茶會
は一種の遊興にして、未だ儀禮とはなり居らず、從て點茶の作法、テマへ器具、式
場、及び設備等を賞翫するに非ずして、要は茶味を識別するに外ならざりき。
故に當時其熟達せる人を呼びて茶飲みと稱し、連歌師などと同様に扱はれし
者也。而して茶會の享樂方法は、香道と其性質を同うし、後世の茶會に點茶の
技巧を重んずるは、寧ろ花道に近しとやいはん。

茶飲み

茶道の起原

茶飲みと茶
数奇

東山殿の茶
道

戦國時代に
於ける茶道
の利用

墮落せる今
日の茶道

二三九 茶の湯の始めと其末路

右の如き茶會は、果して何れの時代まで行はれしや、確かならねど、諸説を綜合すれば、室町の中世に至り、所謂茶道の愛好者は二派に分れ、一は茶飲の徒の如く、茶味の識別を以て本位とする者、一は茶數奇として、一步を後世の茶の湯に向て轉じたる者となれり。然るに後ちに至り、茶會廢れ、茶の湯のみ盛行せるが、其原因は、趣味の變遷及び將軍始め諸公家の威權振はず、從て茶事の娛樂にも、經費の嵩まらざる方法を採りし爲めならん。今日行はるゝが如き茶道は、文明・明應の頃には、未だ一般に用ゐられず、其世上に流布し始めしは、永正年中よりの事にして、確實に普及せしは大永以降也。故に義政死後約二十年にして、始めて、今の茶道興隆の期到れりと云ふべく、從て東山殿は、世に傳ふるが如く、茶道の氣運を作れる人にあらずと。

按ずるに、茶の湯の最も盛んなりしは、今より約三四百年前の戦國時代に於て、政治上又は軍略上にも之を利用し、大に國務の補助ともなりしを以て、時の爲政者にとりては、有要機關の一として、珍重せられたり。然るに今世に至ては、斯道も單に一種の遊戯に化し去り、富豪乃至逸民の徒が、財寶と時間とを浪費して、道具の共進會を行ふと一般、他に何等採るべき點なきに至りぬ。斯く

支那への傳
來

我邦への傳
來

天然産の茶
樹

墮落せる現代の茶の湯の如きは、進取敢爲の國民性に相應しからざるは勿論、寧ろ無益にして有害なるものと謂ふべし。

二四〇 茶の傳播

支那の傳説に據れば、茶は隋代に印度の僧菩提達磨が渡來の時、持ち傳へたりとも云へど、詳かならず。唐代には、隴石の言により、正さに飲用されし事明かなるが、尙ほ徳宗の九年、始めて茶に税すと云ふに至り、普く用ゐられしを知るべし。我邦にては、恰も右と同時代なる桓武天皇延暦年間、傳教大師が唐土より持來りしを嚆矢とすと傳へらる、即ち今より凡そ千百餘年前の事也。

其後、土御門天皇の御宇に、建仁寺の開祖榮光も、宋より茶の種子を携へ歸り、夫より筑前の脊振山、博多の聖福寺、又は山城の梅尾宇治等に栽培し、廣く國內に分布すと傳ふ。然れども、古來茶の樹は、日向の深山などにも、自然的に繁殖しつゝあれば、強ち僧侶の遺業とのみ謂ふ可らず、既に北緯三十九度の奥羽にすら、自然的に之れありと聞けり。そは兎も角も、我邦に茶の廣く實用に供せらるゝに至りしは、今を距ること約七百年前の事と知る可し。

英國に於ける製茶

ハバは厦門地方の方言

茶の贈物の變遷

天中記

東京市民の消費額

二四〇 茶の傳播 二四一 銘茶を飲めば何故眠れぬか

英國などにも近來茶の需要益々盛んになりつゝあるが、其源産地としては、最初僅に支那及び日本のみなりしが、近年は印度の領土内に茶樹を移植し、盛んに培養に努めたる結果、今は世界中最多額の製茶國となれり。因に記す、英語の Tea は、元と厦門地方の方言より採りし言葉なりと云ふ。

序ながら附記して置きたきは、茶の贈物が、昔と今と全然其場合を異にせる一事也。即ち今は、不幸のありし時の返禮に、必ず黒水引をかけて茶を贈るを例とせるが、往昔は、婚姻の時聘物を贈るに際し、必ず茶を添へしものにて、而も此慣例は、餘程古くより行はれしと云ふ。但し是はいつ頃より始まりしや、定かならざるも、元は支那より傳はりしものゝ如く、天中記に「凡種茶必下子、移植則不復生、故聘婦必以茶爲禮、義固有所取也。」とあるを見れば、恐らく此邊より出でし慣禮なるべし。

因に記す、現時一ヶ年間に、東京市民のみの口に入る茶の價格は、平均百七十餘萬圓を下らずと云ふ。

二四一 銘茶を飲めば何故眠れぬか

茶の新芽に含む成分は、テイン及びアミノ酸にして、前者は一種の神經興奮劑、後者は又一種の味と刺激力とを有す。故に多量の銘茶を喫すれば、勢ひ不眠症を起す可し。又茶の滋味あるは單仁の爲め、香氣あるは揮發油の爲めに、して、格納上容器を選みて密閉するを要するも、亦皆な是に因れり。

二四二 家寶の行方と大不敬罪

茶の湯の流行に伴れ、古書畫骨董類の賣れ行きと其價の暴騰、古今未曾有とありて、何人の入智恵せしものか、近來名族舊家にして、先祖傳來の家寶名什を庫中の邪魔物として惜氣もなく賣拂ひ、金に換ふる事を得意とする傾向あり。然るに又一方には、俄分限の俗人共が、一時の虛榮に因はれ、若くは美田を購ふと同じ意思にて、由緒にも眞贋にも頓着せず、只だ價格本位にて頻りに買ひ又は賣り坏しつゝあり。彼等は斯くして、終に再び得難き天下の重寶珍器をも、徒らに轉々散佚せしめて省みず、而も剩すところは、多少の黃白と識者の嘲笑とのみ。

そは兎も角も、茲に最も忌むべく、惡むべきは、此間に乘じて事を作す奸商等

茶の新芽に含む成分

書畫骨董の大流行

重寶珍器の散佚

二四一 茶を飲むと何故眠れぬか 二四二 家寶の行方と大不敬罪

也。彼等は嘗に前記の賣買に依て暴利を食るのみか、中には不逞の賤徒を嗾かし、申すもいと憚りある事ながら、畏れ多くも山陵を瀆し奉り、密かに貴き器物を私しせんとする者さへありしは、洵に恐懼に堪へざる次第にて、是れ固より免すべからざる大不敬罪に相違なきも、抑も亦近時我が上流社會の一部が専ら奢靡驕僭を事とし、慢りに美術骨董茶の湯等の娛樂に淫するの罪たらずんばあらず。彼等今にして猛省せずんば、夫れ 天畏を奈何にせん。

二四三 骨董の字義

或先生に骨董の字義を質せしに、其先生は「字義不明なるも、舊くは古董に作り、東坡より骨董となりしが、朱文公は、旧董とせり。佛家などにて種々の食品を混じたるを骨董、羹、ゴモク、メシを骨董飯といふ、即ちがらくたの意なり」といへり。

二四四 石燈籠

石燈籠を庭に建つる事、古代になし。一見風雅の様なれ共、元是れ寺社の物

大不敬罪
上流社會を
戒む

骨董の語は
東坡に始ま
る

寺社の物

千利休と清
正

にして、他人の志ありて佛神に奉りしを横領するの故、決して善事とは謂ひ難し。或書に、「千利休は、船岡山山麓の二條院御墓の九輪を毀ちて、己れの塔となし、又一部分を手洗鉢に用ゐ、又清正は、花山僧正の石塔を以て、茶亭の燈籠となしたり。何れも好事に溺れし罪惡なり。皆な其終を全うせざりしは、冥罰とや云ふべき云云」と記るされたり。記して以て世の茶人達の反省を促す。

二四五 三齋公善行

細川越中守忠興、豊前小倉の城主たりし時、領内の大饑饉を救はんとて、親譲りの茶器珍什いと多かりしを、悉皆京へ廻し賣拂はんとせしに、餘りに立派なる名器のみなれば、人々後難を虞れ手を出す者も無し。忠興止むを得ず時の所司代板倉周防守の保證を得て、安心して引取らしめ、直様其金を以て大阪にて米穀を調べ、残らず領内へ分配し、急を救ひしといふ。されば三齋公のは、無論今日流行の入札とか、賣立とかいふものとは、大に其趣を異にせり。

二四六 義人大鹽後素

二四四 石燈籠 二四五 三齋公善行 二四六 義人大鹽後素

家寶を賣却
して饑饉を
救ふ

大鹽後素が天保度の饑饉に際し、萬卷の蔵書を鬻ぎて救民の資に供せしは、誰知らぬ者なき事蹟にして、彼の如きは、眞の義人なりと謂つべし。

後素、一夕先輩某を訪ひ、晚餐を共にす。談、適々飢民救済に事に及ぶや、頻りに跡部城州鴻池某等の名を指摘し、其無能無氣力の陋態を罵倒せしが、辭し去るの後、侍者私かに家翁に告げて曰く、「あの人は、全く狂氣です。カナガシラの焼肴を、頭から骨ごと、残さず食べて仕舞ひました。」と。蓋し會食中、當路の失政、富豪の無能を憤りし結果、知らず、頭も骨も併せ食ひし也。此一事にても、如何に後素が窮民の救済に心を致せしかを、推量し得べし。

二四七 豊年續きが怖しい

大魔神、農民共を苦めんとて、小魔を指揮して悉く彼等の貯蓄せる米穀類を失はしめしに、百姓は水を飲み、饑を忍んで過ごせり。大魔神之を見て更に計畫を改め、自から人間に化け、農家に雇はれ、耕作上種々利益ある事を考案して採用させ、二ケ年間も引續き非常なる大收穫を實現せしめしかば、土民は驕つて頻りに酒を飲み、沈湎の結果、一村落を擧げて破産せり。大魔神乃ち小魔に

示して曰く、「必要以上を與ふるは、破滅に導く一法也。」と。

是れはこれ有名なるトルストイ伯小話の一節なるが、我國近來の様に、年々歳々豊年のみ打續くは、或は此大魔神の爲せる業には非ざる耶。昔者、安井息軒先生の言に曰く、「國の盛衰は、政に在りて地にあらず、豊年連年の揚句に米騒動あり。」と。流石は先生、*何ぞハト一社、*日驚く可し。

二四八 實業界果して覺醒したるか

本稿は、大正六年春、大阪の某席に舊知の人々と會同せし時、予の放言せし所なるが、些か思ふ所あり、更めて茲に其大要を誌す。

世界、大戦亂の繼續するにつけ、種々不測の出來事が突發するので、日本國民も、一般に漸く目が覺めて來たとみえ、昨今頻りに戰争が理化的に成つたとか、日本の短所は、理化學方面に在りとかいふ嘆聲を、耳にする様になつて來た。然り、帝國の弱點は、從來其方面に在つた爲め、現在の敵國のみならず、吾等の善友と頼む聯合國や米國すらも、つひ二三年前までは、我國に此の弱點あるに乗じて、常に思ふ存分の暴利を貪りつゝ、あつたのは、事實である。

二四八 實業界果して覺醒したるか
西諺に「二連の鎖の強さは其最も弱き一環の力に等し」とあるが、我邦の現状は實に其通りである。列國に比べて最も弱き我が理化學的方面の力が、即ち我帝國の眞の力であるといふ事を、願はくば深く心に銘記してもらひたう。

日本人の目が覺めたとか開いたとか云ふものゝ、予を以て之を觀れば、まだそれが全體とは思はれぬし、又徹底した覺め方とも信ぜられぬ。實は近頃、外國から種々軍需品の註文を申込み、金儲の口は急に出來たが、奈何せん、蔭かぬ種は生へぬの道理で、何種の工業でも、能率微弱生産不足とあつて折角寶の山に入りながら、空しく指を啜へて引き下る底の有様となり、茲に始めて我工業のナッテ居らんに、氣が着き、儲け損ねた悔しさを沁々と感じたなどは、甚だ以て氣の利かぬ次第ではないか。

回顧すれば、今より約二三十年前の頃であるが、吾等は盛んに兵器獨立を唱道したり、或は装甲飯の製鋼業を絶叫したりして、多少世間の注意を惹いた事も有つた。當年の吾等如何に愚なりしとはいへ、單に軍備のみを急にして、一國の獨立が保てる者とは、元より信じてゐなかつた。それが斯く製鋼業の開

始を絶叫し、兵器の獨立を唱道した所以のものは、只僅かに焦眉の急に備へ、且つ責任を重んじて、自己の掌どる軍需上の所謂理化學的方面に邁進せんが爲めのみであつた。若し當時民間に於ても、政府同様に國民的理化學方面の途が、開拓されて居たならば、今日は何うであつたらうか。今更、既往に就て言ふのではないが、從來世間一般の事業が、動もすれば國家といふ觀念を離れ、國家經濟も國力増進も、總べて自己の都合好き方に牽き付け、又は曲解し、多くは、近視的の小利にのみ醒眼し、其名は立派な實業家でも、する事爲す事が我利的に陥らざるは稀である。従て、昨今需要激増の時機に臨んで、周章狼狽の陋態を演ずるのは、蓋し自業自得と謂つてよからう。此有様では、日獨開戦後這般の商工業戦争には、幾分金を儲けし向きもあらんが、全體より見れば、如何に最良目に見ても、吾等は敗者たるを免れない。

去れど、幸にも無明の夢が醒め、是より發憤して眞個の實業に没頭する者あらば、未だ決して後れたとは云はない、否、是れこそ日獨開戦以來、眞に價値ある獲物と謂つてよからう。斯くて愈々確實に覺醒した上は、一朝の投機熱と共に冷却しないで、十二分の潜熱を蓄へ、飽迄根柢を堅實にし、而して後日に來

二四八 實業界果して醒覺したるか 二四九 東京人と大阪人
るべき平和戰場裡に於て、雪辱的大勝利を獲得しなければならぬ。

鉛と鋼鐵とが幾千人の生命を損ふ隙に、
金と銀とは、幾萬人の靈魂を害す。

* * * * *

二四九 東京人と大阪人

此頃新刊の書に、現代東西の人情を面白く比較せる一節あり。仍て左に之を抄録す。

東京人の長所は主義方針にあり、大阪人の長所は臨機應變なり。
東京人の短所は形式にあり、大阪人の短所は現金主義なり。
東京人は理想の民なり、大阪人は實行の民なり。
東京人の眼は高遠の處に注ぎ、大阪人の脚は卑近の點に立つ。

東京人は政治家に適し、大阪人は實業家に適す。

東京人は學者に傾き、大阪人は技師に傾く。

東京人政界に入れば演説家たるべく、大阪人は妥協家たるべし。

東京人は名聞を好み、大阪人は實利に殉す。

東京の手代は流行を趁ふて新式の洋服を好み、美髯を貯ふるも、大阪の手代は前垂掛にて鬚髯無きを上とす。

二五〇 然らば名古屋人は

曰く、名古屋市所在地愛知縣と云へば、信長、秀吉、家康三雄出現の地を包含す。而かも秀吉は大阪人の持物の如く、家康は江戸の地主の如く、勇武の清正さへ恰も熊本生へ抜きの人の様に思はれ、肝心の本縣下は、是等大人物の感化には、殆ど與り居らざるやの感なくんばあらず。世上一般に見る所の本縣人は、伶俐にして勘定高く、表は放誕剛愎の如くに見ゆれど、内實は狭量利己一點張のもの多し、是故に往々巧妙にして街氣滿々たる偽物を出せども、近頃は更に大英の英雄らしき人物出で來らず、先祖の三雄に對しても洵に氣の毒の至りな

二四九 東京人と大阪人 二五〇 然らば名古屋人は

金の競争は
拜會主義の
象徴か

富の私有と
亡國

我邦は如何

二五〇 然らば名古屋人は 二五一 亡國の玉子
り。殊には熱田の宮に在します、神劍草薙の靈氣、今日果して何の邊にか磅礴
たる。人は徒らに金の競争を仰視し、遂に拜會主義の浸蝕に遭ふ、豈嘆ぜざる
を得べけんや。

二五一 亡國の玉子

昔、波斯は、其人口の百分の一が、其全國の土地を私有するに至て滅び、埃及は
其人口の百分の二が、其富の百分の九十七を私有するに至て滅び、バビロンは、
其人口の百分の二が、其全國の富の總てを私有するに至て滅び、羅馬は、又其富
の全體を僅かに千八百人の少數者の私有と爲るに至て滅びたりと云ふ。

我邦にては、富豪と稱する者極めて尠けれ共、今後の成り行を察するに、世間
羨望の的たる三井三菱已下の大福長者連、愈々益々膨脹して、近々亡國の玉子
位になりはせずや。亡國の玉子は、國家の將來の爲め、決して嘉すべきものに
あらず。

金儲の割合

日蓮宗の隆
盛と我が軍
人界

天野信景の
日蓮宗觀

金儲の割合は、肴三層倍、花八層倍、藥九層倍、
百姓百層倍、坊主丸儲、按摩、摺取り也。

二五二 鹽尻と日蓮

宗旨に、流行と云ふ言葉を用ゆるは、些か不穩當の嫌あるも、事實は自から其
隆替を示せり。近年は他宗の不振なるに係らず、日蓮宗獨り持て囃され、殊に
軍人界に在りては、右手に指揮刀を揮ると共に、左腕に妙法の珠數をかくる輩
續出すると聞けり。斯かる現象は、事の當否を別問題として、兎にも角にも、一
種の流行と云ふの外なけん。

「鹽尻」の著者天野信景は、極端なる日蓮嫌ひと見え、彼の宗徒を呼ぶに邪教を
以てし、其宗旨を難ずる所最も深刻を極めたり。即ち日蓮が言を天變地妖と

龍の口の奇蹟と道鏡

外敵襲來とに託し、法華弘通の利己主義を計りしも、北條氏の爲めに看破され、流論の刑に處せられしは、固より自業自得に過ぎざるも、然も此一事は、自稱豫言者の日蓮より、時頼の方遂に鑑識の明あるを證して餘りあり。又龍の口の御難など稱する奇蹟を傳ふれど、我邦にては、古來僧侶を斬刑に處したる例なく、神器を覬覦せる道鏡をすら、纔に流論に止めし程なれば、日蓮位の者を斬に處せざりしは、當然の事のみ、と論斷せしが如き、當時餘人に在りては、決して眞似の出來ざりし所なるべし。さるにても、之に對する今日の日蓮信者の名説、聞かまほし。

二五三 信長は日蓮信者に非ず

信長、一向宗をいたく嫌ひ玉ひ、又父子終焉の地が、期せずして本能寺妙覺寺など云ふ法華寺なりしかば、日蓮信者の様に附會する輩あれど違へり。そは安土總見寺名古屋總見寺、皆な淨土宗にして、京都大徳寺々中總見院のみ禪家なり。而して信忠の菩提所、京都四條寺町なる大雲院も、同く淨土宗とす。臣下にしても、重なる者には、一人の法華なし、乃ち柴田丹羽、惟任、高山、池田等、悉く

本能寺と妙覺寺

總見寺と大雲院

二五二 隆元と日蓮 二五三 信長は日蓮信者に非ず

禪宗なりき、と或書に見えたり。

二五四 秀吉の眷族と村雲尼公

又或書に秀吉は固より濶達圓滿の大豪傑なれば、佛家に對しても何等か是れと定められず、唯諸宗の僧の中に智徳勝れしをば、いづれも歸敬ありしと見ゆ。去れど其眷族女流には、往々日蓮信者ありしが如し。即ち淀君の日瞬に歸依し、秀次の母の瑞龍寺尼公と稱せられしが如きは、其例也。之れより推す時は、瑞龍寺とは今日の村雲御所の事にして、村雲尼公は、即ち取も直さず、關白秀次の母の後を繼承せられし、法孫にて在ます也。

淀君と瑞龍寺尼公

二五五 日枝・日吉・比叡

古き書の中に、日枝又は日吉と書するは、もと假字なれば、ヒエと訓むを可とす。それをヒヨシと訛りてよみしより、分れて日吉を神とし、比叡を山の名とせり。住吉の吉も、日吉の吉と同じく、エにして、スミノエと訓むべき也。これもいつよりか、スミノシと訛りし由、見えたり。

ヒエとヒヨ
スミノシと
スミノエ

二五四 秀吉の眷族と村雲尼公 二五五 日枝・日吉・比叡

比叡は冷也

冷涼清の
意義

二五六 冷涼清 二五七 日本製の熟語
又曰く、ヒエといふ事は、此山霜雪ふかく、形も稍や富士に似たれば、都富士ともいへり。寒く冷ゆるより、やがて冷—ヒエとは呼びなしけんかと。

二五六 冷・涼・清

冷涼清の三字、ともにすいしと訓むも、實はそれく其意を異にす。冷は清くして寒けし、氷などのすいしき體也。涼は輕寒と註して、晚夏初秋、一片の清風を得たるすいしき也。清は物をすいしくするをいふ體にて、冬温而夏清の如き是れ也。

二五七 日本製の熟語

近頃現れたる某雜誌に據れば、左の數種の熟語は、日本にてこそ常に用ふる所なれど、漢字の本國たる支那にては、差聞へある由につき、若き人の爲にと、婆心もて茲に略記す。

卵 子
鶏の玉子の事を卵子と書くが、支那にて卵子といへば、陰囊の事也。普通玉子の事は、蛋と書す。

幹事と用事

勉 強

當鋪、當主、當死

自 辨

打 水

煖 房

社長と主筆

姓氏と雅號

某々會幹事の幹事は、古くよりある支那の熟語なれども、之を正解すれば、房事となる。用事も亦幹事と同意味、但し、要事と書けば差支なし。

勉強なども使ひかた宜しからず、無理強ひに、意に従はす、事馬など虐使するは其例也。

當鋪とは質店の事、當主とは質屋の主人、公當死とは質物の流れを云ふ。自辨とは隨意勝手の意也。會費自辨など書けば、會費は出しても出さなくてもよいと云ふ事。

打水とは水を撒くにあらずして、汲むことを云ふ。
煖房とは轉宅引越の事。

社長とは村長又は芝居の親方の事。主筆と云へば、新聞記者の事也。

右の如き次第なれば、日本人名又は雅號などの中にも、往々可笑しき文字あり。例へば、抱月又は包月といへば、流連の事、有名なる信水居士の信水は、月經の事、又穴戸とは、肛門、肥塚とは、生殖器、崇拜時代の古墳を意味するが如しと。

二五八 太秦と秦の訓

二五七 日本製の熟語 二五八 太秦と秦の訓

明石染人君
の説

秦始皇帝の
子孫

猶太語の羅
旬解

秦の訓

二五八 太秦と秦の訓 二五九 太秦附近の地名考

初めて京都に遊び、太秦村を過ぎて嵐山を訪ひし折、そのウヰマサテム訓に不審を懐きしが、其不審いまに晴れずありしに、此頃明石染人君の説に據つて、之を明かにするを得たり。即ち應神天皇の御代に、濃厚なる猶太的系統と思想とを有する、秦始皇帝六世孫融通王、即ち弓月王の率ゐし一族が、百濟より歸化し來り、山城國に地を賜はり居住せし史實に基き、地を太秦と名づけしと云ふ。然らば、又何故に之をウヰマサト訓するかと云ふに、是は元來外國音にして、實際に猶太語を羅旬によりて解意する時は、ウヰとは創造、誕生のことにて、マサとは同族の集合のこと、故にウヰマサとは、即ち秦氏一族の移住に因て營まれし新居留地の意義なりと、序に秦をハタと訓するは、機織の業を營む者の意にして、吳織(クレハトリ)・漢織(アヤハトリ)・又は服部(ハトリ)も同意義とあり。

成程斯く聞いて見れば、從來の桂川の渦づまく様、又は貢物の堆づ高い事などの説よりは、餘程確かなる様な心地す。尙ほ後の考證を待つ。

二五九 太秦附近の地名考

前出太秦附近の地名考を、明石君の先考のものせられしがあり。其中より左の數條を抄録す。

帷子辻

安塔橋

宇多村と常盤村

松尾神社

梅の宮

嵐山

嵯峨

太秦の西に四ツ辻あり、帷子辻と呼ぶ。元と古墳のある地にて、カタブラー即ち永眠の義なり。

辻の西に安塔橋あり、俗に傳教大師の安塔されし所とあれど、こも亦アンドレ。即ち大工にして、多くは工匠の居住地ならん。

北に宇多村あり、ジュダ民族の集合穢多と同意義なり。尙ほ北方にある常盤村は、常盤御前の出でし地なりともいへど、矢張トツキユ。即ち貨幣の出入にて、或は財務部を置かれし所なるべし。

松尾神社はマツツアアスにて、神聖酒神の意、大山咋神と市杵嶋姫の二柱を祀る、酒造の祖神にして、代々の神官秦氏なり。

梅の宮はムイメ。即ち最高の勢力、聖酒にして、松尾と同様。嵐山又荒子山はアラスにて、舟免狀を持て渡航すの意。蓋し、桂川舟番所の跡か。

嵯峨はサガリにして、字義其儘の高し也。

伊佐羅井

眞原岡

二五九 太秦附近の地名考 二六〇 葛の葉の正體

廣隆寺の境内に古き井戸あり、伊佐羅井と呼ぶ。こはイ。ス。ラ。エ。ル。民族の井といふ意にや。

尙ほ太秦の北方に古名を眞原岡といふ地あり、是れマ。ハ。ラ。ジ。ヤ。に於て大王又は聖酒の王なり、元と無名の古墳八陵ありしが、恐らくは融通王、秦酒公の陵にあらずやとの説もあり。此地幾多の考證もありつれど、左まではと思ひ止みぬ。

二六〇 葛の葉の正體

近頃或人の説に、葛の葉の正體は狐にあらず、恐らく賤民若くは歸化人にてありしならんとあり。

今の南海鐵道浪速線、東天下茶屋より東南一丁、阿部野街道の東側に、安倍晴明誕生地と記されし碑あり。是が果して事實なるや否やは不明なるも、山城の太秦に限らず、攝河泉の各地方には、奈良朝より王朝にかけ、韓漢の歸化人夥しく居住し、家原文珠の所在地に生れし行基菩薩の如きも、此等歸化人の孫にて、其他鷹匠の元祖たる百濟の酒君も、亦同じく此邊に居住せりと云ふ。但し

安倍晴明の誕生地

行基菩薩も歸化人の子

天孫人種と歸化人との關係

安倍保名と葛の葉

葛の葉の姿を隠せし理由

定家の七墳

此等歸化人に對して、天孫人種を以て自尊しつゝある我が皇別神別の家系は、儼然として婚を通ぜざりき。

安倍保名は、微なりしとはいへ、固より家系正しき家に生れ、後年阿部野に塾居中、葛の葉を納れて、一子晴明を擧げしが、葛の葉は何故か、忽ち姿を隠したり。然らば彼女は、何故姿を隠せしやと云ふに、彼女は此邊に多數居住せる別人種か、さもなくば當時の所謂賤民にして、上國の紳士とは、公に縁組の出來ざる家柄の身なれば、未始終共に居りては、却て吾が子の出世の妨とならんと思ひ、恩愛の羈を我と絶ち切り、心強くも元の階級の棲家に還りしものならんと。一説として茲に記し置く。

二六一 爲家不臣

今年(大正六年)は定家卿六百五十回忌に相當する由なるが、昔より定家の七墳とて、二尊院の下、厭離庵、淨寂光寺、般若院、安樂律院寺の内の某寺及び高野山の七個所に、其名はあれども、未だいづれも確實なる憑據なしと云ふ。就中、厭離庵に在る者は、爲家の墓にして定家卿のにては非ずと聞けり。

二六〇 葛の葉の正體 二六一 爲家不臣

冷泉中將爲家の事に關し、『鹽尻』には、「凡そ承久の亂君臣道なきより起りて、淺ましき事多かり。爲家は歌人にて、今の世まで尊び、其筆跡反古の片端までもてあそび、壁上にかけて、うるはしき人の様に思ひ侍る。君の思召立し軍に、仕まつる事もなく、せめて遠島の御ともに参りてあれかし。夫をも又逃げかくれて、女房法師にも劣りたる有様いと口惜。君を見る事、路人の如くせし人の筆跡、何の興ありて寶とせん。窓にも帖し、甕をも覆ひてん。殊に武林の家にもてはやし侍らんは、いと似氣なく口惜」とあり。信景翁の叱咤、ゆゑなきに非ず。同じく歌人なれど、此程物故せし黒田清綱先生の勤王絶倫の人に比すれば、霄壤の差ありと云ふ可し。次に少しく先生の事蹟を記さん。

二六二 奠都と黒田清綱

奠都五十年祭につき、昨今種々の事共を耳にせるが、其當時江戸を東京と改むるまでならば、問題も簡單なりしなれど、或は遷都となる時は、事甚だ重大なりとて、議論百出、御東幸決行までには、幾多の上書建白あり、大勢よりも廟議を動かす丈けさへに、却々骨の折れし業なりしと聞く。

遷都論の先驅者は、既に徳川時代にもありたり。即ち加茂真淵を首めとし、佐藤信淵、高橋作也等皆な其人なりし也。降て明治初年には、伊地知正治の浪華遷都論あり、更に前島密の東遷論もありしと云へど、其第一に、皇居は宜しく速に江戸に移し、先づ以て關東の人心を治むべしとの議を提唱せしは、此頃物故せられし黒田清綱なりしと云ふ。之れと同時に、尙ほ館林の岡谷繁實、阪地に在て頻りに東遷論を唱へ、大木民平、江藤新平之れと共鳴し、水戸の北島秀朝も同論にて、三條公も亦之れに傾けり。

然るに、一面朝廷には岩倉公の在るありて、議論却々六ヶ敷かりしが、結局遷都といふ事は容易ならず、假令御東幸ありとも、そは純然たる御巡幸にして、遷都の意義なし、故に御駐蹕中に便宜上太政官を東京に移し、京都には留守官を置くこと云ふが如き告示を發表し、遂に車駕神器を奉じて京都を出させ給へり。當初餘り突飛なる説の如く、怪なれし清綱の提議も、茲に至りて、實行せられしこそ、不思議なれ。

黒田先生は舊薩摩藩士にして、夙に勤王の志篤く、加ふるに精悍ならびなく、武士道の權化とさへ謳はれ、彼の筑前太宰府に於て、幕吏小林甚九郎を論退し

七卿の命の親

御製及御歌の存見被仰付

先生の和歌

二六二 箕都と黒田清綱

て、君命を全うせし時の如き、實に壯絶を極めたるものにして、當時三條公以下の七卿も、先生を以て命の親なりと爲し、は、固より至當の事と云ふ可し。先生は又明治の歌人にして、長くも先帝陛下の御遺志を奉じ、今上陛下の御製、并に皇后陛下の御歌拜見を仰付らるゝの光榮を負はれたり。之を要するに、先生の勤王と歌道に貢献せられし事蹟に關しては、一朝一夕の談に盡くすべからず、今は只其一二の概要をしるすのみ。序に先生の遺風兩三首を左に掲ぐ。

戊辰の役東征の途、隊士皆な富士山の

見えぬを遺憾とせし時、よみし歌

雲の上に位さためて富士の嶺の見えぬや高き心なるらん

明治二年夏、阿波と淡路との間に小戦あり、

鎮撫使として下りける時によめる

はた々神なるとの沖に轟きて夕立すまし紀路の遠山

船眺望と云ふ題にて

漕出て遠つ江の灘行けは雲の波間に富士の山見ゆ

蒼海伯の和歌押韻論

正風先生の恐縮

露國の大革命

二六三 古今集の御手直し

副島蒼海伯の詩に於ける、其蒼古老勁の格調は、六朝を超えて直ちに漢魏に迫り、當年詩壇の耆宿として重きを致せり。然るに伯は漢詩以外、國風の歌にも造詣淺からず、常に『歌は和漢ともに謳ふべきものなれば、押韻最も肝要なるに、歌人が往々茲に意を注がず、只だ作意の末端にのみ腐心しつゝあるは、遺憾也。』との意見を懐きつゝありしが、一日高崎正風先生を過ぎ、此説を述べ、且つ其一例として、

筑波やま端やま茂やましけれと思入るにはさはらさりけり

の古歌を擧げ、『初二四句共にア韻なれば、五句も宜しく、さはらさりしな』とすべきなり。』とありければ、流石の正風先生も、『イヤどらも、古今集の御手直しは、恐縮ですな。』と笑はれしとぞ。

二六四 ロマノフ家崩落

今回露國に起りたる革命は、其猛烈にして而も急速なりし事、真に迅雷耳を

二六三 古今集の御手直し 二六四 ロマノフ家崩落

蔽ふに違あらざるの概あり。帝室萬能の國、警察司法制度最峻嚴の國も、人民の意志に反せる暴壓政治の下には、餓ゑたる勞働者、醉ひたる兵卒の群によりて、僅々三四日を出でずして、斯かる大革命行はれ、其結果三百年來のロマノフ家も、忽ち九天より、奈落の底に蹴落されぬ。

動機の自他如何さへも、未だ明かならざれば、人心反撥力の恐るべきは、此一事を以て證するに餘あり。此次ぎは孰れの國が、同じき運命の手に噴ふきまれんとするにや。一國を統御し、或は其輔弼の任に在るもの、須らく今次の大革命に鑑み、能く民意の趨嚮を察し、以て世界の變局に處する途を誤らざらんことを要す。

二六五 露西亞人の祖先

四五世紀頃、ウクライナのプリペット流域に沿ふ、ボレシヤといふ土地に於て、スラブ民族として現はれしが、露西亞人の祖先也。スラブ民族の原始状態は、實に感むべき者にして、不斷に四方より強敵に襲はれ、冬は森林又は雪中に隠れ、夏は沼邊の沮洳地に遁れ、急迫さるゝ場合には、蘆を折て口に唾へ、數時間

スラブ民族の現出と状態を感むべき原始

或歴史家の批評

乃至半日間も、水中に潜匿するを常とせり。

されば或歴史家の如きは、露國及露人を評して、「元來、露人は臆病にして、其文化程度も附け焼刃に過ぎず、即ち内部未熟にして、外部だけ文明の形成を粧ひし者なれば、名は一個の獨立國なるも、實は國として自分自身に必要な條件を充たすこと能はず、多く外國の補給を仰ぎつゝある者也。」と斷ぜり。露國が世界大戦亂中に、今日の如き悲惨なる有様を暴露するに至りしも、敢て理由なきに非ず。

二六六 日露文明の比較

或學者又曰く、吾等の嘗て露國を見し目には、帝室萬能、貴族全盛とのみに映ぜしが、其貴族は、全く我國の大名華族と異なり、寧ろ舊公卿堂上方に類似し、疾くより宮廷に入り込み、地方及び土民に近接せず、從て勢力を扶植する事、又は教育を施す程の時代を作らず、其結果土地人民等に十分の知識も富源も與ふるに遑なく、遂に其領土を離るゝの止むなきに至りし也。

之に反して、我邦中世時代には、各地に豪族起り、それ〴〵其莊園に割據して

露國の貴族

日本の大名

我國勢の發
展と華族制

露西亞と猶
太人

日本に於け
る猶太式人
種の分布

國音の類似

二六六 日露文明の比較 二六七 穢多か猶太か

大名と號し、以て士民を開發せり。徳川三百年の治は、一面皇室に對する態度に批難の點ありしと雖も、而も他の一面に於ては、其内容を充實し、文明の素地を作りし大功を認めざる可らず。今日我が國勢發展の徑路順調にして且つ確實なるは、露國の附け焼刃的なるに比し、固より霄壤の差あり。現代の華族制度にこそ、種々の議論もある様なれど、舊大名方の國家に貢獻せられし功績も、亦決して忘る能はざる者あれば之を一概に棄つるは不可也と。

二六七 穢多か猶太か

露西亞といへば、國土の廣大なるは、今にても世界第一なるが之と共に包含する民族の種類多き事も、亦他に比ひなし。就中、其色彩の最も鮮明なるは猶太系にして、其淵叢とも云ふべきは波蘭也。

然るに我邦に於ても、比較的人烟密ならざる奥羽各地にさへ、此波蘭人に酷似せる容貌の人種あるを見るのみか、關西殊に京都より山陰方面には、猶太式にて隆鼻長面の骨相を具へたる男女多し。既に太秦の所にて述べたる如く、由來「穢多」と「猶太」とは其音稍や運く、何等かの關係ある者の如くに記し置ける

東京の中心
にもあり

猶太主義の
瀾漫

殊勝なる男
乞食

二六八 乞食の心に恥ぢよ

が此等系統の混在は、無論之れある可し。殊に古來國中到る處に、猶太的性格の人間が夥しく繁殖しつゝあるには、驚かざるを得ず。京都・山陰は別として、東京の中心たる日本橋の附近さへ、今は繁華の地なれ共、其昔は鼻首場もあり、牢獄もあり、本町四丁目邊は不淨地と稱し、山王明神の神輿は、之を避けて渡さざりしほど也。又室町より本草屋町、即ち今の三井ビルヂングの在る地點は、其町名の如く、元は穢多共が牛馬の皮を剥ぎて鬻ぎし所也。即ち此邊數多の富商が簷を並べて盛んに豪華を競ひ居れる一帯の地は、正しく往時の穢多村にて、猶太民族の性格を具へたる、賤民の巢窟たりしに外ならず。斯く考へ來ると、今の立派なる建築にも、道路にも、何とやら穢多的の臭氣なきにしもあらず。否、な此等の穢多臭氣、固より嫌惡すべきものなれ共、之よりも尙ほ一層鼻つまみなるは、利己一點張りにて、表裡反覆窮なき猶太主義の瀾漫にこそ。

昔、大阪四ツ橋にて、金子五拾兩を拾ひし乞食あり、包紙に宇津屋とありければ、其主を尋ね行き渡しけり。主人謝禮にとて、若干を分ち與へんとすれど、受

二六七 穢多か猶太か 二六八 乞食の心に恥ぢよ

殊勝なる女
乞食

現代の富豪
は乞食に劣
れり

二六八 乞食の心に恥ぢよ 二六九 學用品無管理販賣

けず強ひて渡しければ、次の如き詩歌を書き金と共に棄て、去りぬ。

橋上路邊一二錢。往來終日幾千人。死生富貴任天命。昨日錦茵今草薺。

寶そと思へは袖につゝひなりひろへは重き障りなりけり

之れと好一對の話は、有名なる京都の老女半谷龜が事也。龜女三條室町にて金包を拾ひ、落し主に還し、に、金壹兩に米添へてとらせんとすれど、手にも觸れず、たゞ

物もたぬ袂はかるし夕納涼

の一句を残して去れり。

現代の富豪が、金錢を收集する状態を視るに、多くは全く此等乞食の所業と反對にて、他人の過つて取落したるは論なく、甚しきは隙きあれば持ちたるものをさへ、我が物にせんとす。恐るべき世の中なる哉。

富は之を有する人の物にあらず、之を樂しむ人の物也。

二六九 學用品無管理販賣

高崎正風大人が

高崎正風大
人の歌

大阪西野田
職工學校

無償讀書室
物と無償所有

紅むの濃染の梅を見ても、知れ開らくる儘に薄くなる世を

と歎かれし如く、げに世の様は、良きにも進めど、亦多く惡きに傾き易く、人情紙よりも薄くなりゆけるは、争ひ難き事實也。

去りながら、人煙尙ほ稀れる山間の僻地に入れば、稍や古俗の今日に存する所もあり。例へば道の傍らに篋を出し、柿又は柑子類を容れ、或は木の枝に草鞋など吊下げ、下に竹筒を立て、之れに附木に丸きものゝ形三つ四つし、人の取り替へ行くに任せ置くなどの類にて、見るからに、心地よき事の限り也。之を聞く、大阪の西野田職工學校にては、大正元年已降、校内に學用品無管理販賣の店を出し、將來模範職工として社會に立つべき、學生の氣風を向上させる爲めに、那邊まで學生の自省が實現され得るやを試みつゝありしが、爾來今日に至る月々の總勘定には、大抵キチンと決算着きしと云ふ。中國の或大都會や、九州の名高き學校市にて、中學生等が、各書肆の店先を無償讀書室としたり、又は小學生徒が、諸文具店の賣品を無斷所有物とする時節柄、前記無管理販賣法の如きは、誠に意義ある好個の企圖と謂ふべし。敢て學校先生方の考慮を促す。

二六九 學用品無管理販賣

二七〇 靛と先斗町

ウツボと秀吉の戯言

大阪に靛^〇即ちウツボといふ町あり昔より鱸魚を商ふ所なるが昔市人の言葉に「ヤス、く」と云ふを秀吉聞き咎め「矢筒々々」とはウツボを賣るにやと戯れしより斯くは呼び習はしけるとなん。

ポントと宣教師サンボンテ

又京都四條畷の先斗町をポントと訓むことは此處に信長の建立せし南蠻寺ありて宣教師サンボンテの住居せし故斯くは名づけし者ならんと或人の言ひき。

二七一 螢の矛盾

年來廣島岡山山梨等の諸縣下を始め佐賀靜岡茨城乃至鞆の下なる東京府下に一種の奇しき地方病發生し之が爲め土着人は最も恐怖を懷きつゝあるが聞く所によれば該病は其後他の地方にも發生し追々傳播の虞ありと云ふ。

然るに近年某博士研究の結果に據れば這は即ち日本住血吸蟲病と云へる

日本住血吸蟲病と螢の關係

ものにて其病原蟲セルカリヤの中間宿主が宮入貝なる事及びその宮入貝を撲滅するには之を好んで捕食する螢を愛護増殖せしむるを最も必要とする事に歸着したり。是に由て某地方の如きは率先して縣令を發し以て螢の捕獲を嚴禁し又某縣下の如きは特に技師に命じて螢の人爲的繁殖法を實施せしめたりと聞けるが此等は孰れも農村保護國民衛生上最も然かあるべき施設なれば此際官民一致して大に勵行するを要す。

然るに東京附近及び京都に於ける有數の螢産地にては全く右の施設に反し土地の神主又は僧侶等年々夏期に入る毎に率先して愚民を使喚し一時に數十萬の螢を捕獲せしめ之を美麗なる螢籠に納め或筋に向ひ例年の通りと唱へ献上し大に忠勤振りを街ふ者あり。既に某々名域の如きは之がため近年著く螢の發生を害し殆ど滅亡に至らんとすといふ實に嘆すべき次第ならずや。兒等が納涼を兼ね螢を追ふて遊ぶ元より妨げなし。家にまします老親の爲め其四五匹乃至十數匹を持ち還り之を庭池の汀に放つことも亦佳ならん。然も大舉して其巢窟を覆へし以て蟲族の滅亡をも顧みざるに至りては默視すること能はず。況んや又知識階級たる僧侶神官の輩が學說に耳を

東京及京都に於ける螢の捕獲

藉さず、何事か只だ己れの爲めにせんとするの妄舉たるに於てをや。螢矛盾の説を作る。

二七二 螢の光

人類と夜の
利用

人類ありて以來、暗夜を照らす燈明は、先づ第一に螢の光にてありし事疑ひなし。人類は他の動物と異なり、夜に入るも直ちに眠る者に非ず、其何時間かを利用して、生涯の何分かを延長せん事を力むる者也。暗中摸索遂に功なく、月・星・電光・火山の噴煙も、此要望を充たし得ず、雪を集めし孫康は措て論せず、螢を以て燈火に代へしは、決して車胤の發明せるものに非ず。何となれば、原始時代に於て人類は既に、コホアの殻若くは瓢の皮に、無數の小孔を穿ちて籠様のものとなし、之に螢を入れて其漏れ出づる光を利用してたれば也。

螢光には熱
を伴はず

凡そ光には熱を伴ふものにして、其例は電氣にも瓦斯にも之を見るを得べく、殊に石油燈の如きは、百中の九十八・九迄が熱なるも、螢の光に至りては、反對に百が百ながら光にて、熱となる部分は絶無也。往時は螢の光を目して、燐ならんと思惟せしも、其實は蟲身の内部に生ぜる一種の脂肪が、呼吸作用に依て

無熱燈の要
素

出で来る酸素に遇ひ、酸化して光を放つものにして、其明滅あるは、呼吸の節に合ふに外ならず。右の如くなるが故に、其の蟲身内の脂肪の如きものを收集して、之に酸化法を行はば、或は無熱燈の要素を作し得ざるにも限らざる可し。要するに、此螢のみならず、海上の不知火、又は光波・光魚類に就き、幾多の研究と實驗とを重ねたらんには、何日かは之を實現する時機あるべきを信ず。世の學者、實驗家等の努力を望む。

二七三 蟻の聲

泰西學者の
實驗

西洋の或學者、印度に旅行中、過つて蟻の巢に觸れ、之を破りしに、忽ち數千萬の小動物出現し、眞黒になりて其邊を彷徨せり。依て仔細に其状態を検するに、個々の蟻皆な腹部を振動させて、一齊に響を發せるが、其響たるや、恰も赤熱の炭火を取つて水中に投じたる時の如きものなりしとぞ。

日本學者の
研究

又日本の或學者の調査に據れば、多くの白蟻の種屬中には、一種の音聲を發する者あるが、現今其音聲を利用し、地下を横行する白蟻の所在を確める白蟻聽索器と云ふ機械を發明せし由也。惟ふに、地中の微音を聽取すると云ふ事は、

管に白蟻のみに限らず、尙其他にも種々有用也。従て學者に對しては、一層研究の餘地あるものゝ如し。

二七四 光 蘚

一と歳銷夏の爲め信州の山川を跋涉し、岩村田の地を過ぎ、學界に有名なる千疊敷洞穴の光蘚を一覽せり。洞は、僅に二十枚敷位、高さ三四尺、入口は網戸を以て塞ぎ、進入を許さず。這は見學者等が、濫りに光蘚を採り去るを防ぐ爲めなりとか。其日は快晴、時は午前十時なりしも、洞口の方位の關係上、洞内薄暮の如く、日光甚だ弱く、僅に光蘚の所在を認むるを得しのみ。蘚は、總べて下底にのみ生じ、天井には更になし。元來光蘚は、好んで陰鬱なる洞底等に生育し、其幼嫩絲の似く、細胞は強く光線を反射する特性を有するが故に、斯くは窟内にて燐色を發するなりとぞ。光蘚は、今より約三百年前、愛蘭土の南部にて發見されしを始めとし、我邦にては明治四十三年、此洞内にて發見されしを嚆矢とす。

此光蘚は、岩村田以外、追分にても見たり。こは僅に廢址殘壁の石垣の間隙

信州岩村田の光蘚

光蘚發見の時代

其他の地方

に存するものにて、量は微なれ共、物質は毫も遜色なし。此他最近に、武州比企郡西吉見村百穴にて、發見されしと聞けり。兎に角天下の珍植物たるに相違なし。

二七五 植物の咳嗽

植物が咳嗽するとは、耳馴れぬ話なるが、這は近頃、或植物學者の世に報告せし咳嗽菽荳、即ちセキヤマメに關する事也。

元來此植物は、熱帶地方の濕氣多き所に産し、特性として極端に塵埃を嫌ふ。若し其葉面に塵の積もる時は、内部に一種の瓦斯を發生し、壓力十分となれば、爆發して之を拂ひ落とす、其音恰も動物が氣管の窒息を防がんとて、咳嗽するに異ならず。殊に最も奇とすべきは、此植物が咳嗽する瞬間に、葉面上自から紅色を呈し、人間が咳嗽に苦しむ時、顔色の變ると同様なるが如く、夫も少時にして復た常の色となる事是れ也。此等は實に珍中の珍にして、本邦の植物園内には、固より未だ移植されざる者なるべきが、一度は實見したきもの也。

二七六 味感を具備する鳥

二七五 植物の咳嗽 二七六 味感を具備する鳥

咳嗽菽荳
其特性

諸鳥の中に、味感を有するは、獨り鴉あるのみ。此鳥の嘴は、最も大に且つ強く、其舌は厚く、多肉にして柔かく、基部最も能く發達し、動かすこと自在也。加之、氣管の下部は、三對の筋肉より成立す。概して物音の真似に巧みなる鳥として、九官鳥、懸巢等の如く、咽喉部の構造甚だ精工也。原産地にては、棕櫚芭蕉、椰子などの實を食とすれ共、飼はるれば雜食にて、麵包、煎肉、砂糖等を好む。若し弱き酒を與ふれば、人間の如く酩酊し、舉動活潑に不規則となり、且つ甚しく饒舌となる。

二七六 味感を具備する鳥 二七七 糧食品を蓄ふべし

神ならぬ身は、我が日本帝國が近き將來に於て、糧食缺乏難に陥るべしとの豫言は出來ざるも、然も斷じて之なしとの保證も、亦出來ず。それにつけても心得べきは鷹倉の事也。

明治天皇御治世より今日に至るまで、國難大戦幾回に及べど、吾等が最も不思議に感ずるは、茲四十年が程、多くは豊年のみ打續き、不作と云ふ語を耳にせざりし事也。而も近年、米價或は甚しく下落し、民爲めに安からず、當局糧々の

二七七 糧食品を蓄ふべし

試みは、却て枝葉にのみ走り、肝心の價額は毫も調整されず。されば斯かる時節を利用して、大に荒備と貯糧を兼ねたる施設あらんには、現在及將來を益する事決して尠少ならざる可し。
近頃聞く所に據れば、近江國甲賀郡善水寺本尊の腹中より出し、約一千年を經たる物なるにも拘はらず、去年之を採りて試みに苗代田に蒔きしに、程經て美事に發芽せりと云ふ、その命數驚く可し。古來糧は荒備の用に供さるるといへば、更に新科學の工夫を加へ、國家百年の用に備へられん事、深く希望する所也。

【追記】豊年續きの擧句米騒動あり、糧食缺乏の聲を聞く事實に豫想外にて、寧ろ驚くに堪へたり。怖るべし。

二七八 光圀卿の兵糧

昔、水戸光圀卿の工夫にて製せられし兵糧あり。そは糯米を蒸し、舂きて團子となし、更に押崩して徑二寸弱、厚三分位の扁平なる餅とせるものにて、其中心に孔を穿ち、繩を通すの用に供す。斯くして出來上りたるものを、日光に

二七七 糧食品を蓄ふべし 二七八 光圀卿の兵糧

其特色と分量

二七八 光野の兵糧 二七九 軍需品氷豆腐 二八〇 水餅
曝らして乾燥し、後ち風通し良き倉庫内に貯蓄する也。
此餅の特色は、火食の煩なく、口に啣めば柔くなり、快く腹中に納る。飴に似て飢餓を防ぎ、交戦中も口中に入れ置くべく、誤て鶉呑にするも差岡なく、一人一日五枚を以て適量とすと云へり。

氷豆腐と其特長

二七九 軍需品氷豆腐
信州名産の氷豆腐も、亦た軍需に適す。此豆腐、日露戦役に多く用ゐられしが、現に軍役に従ひし人の話によれば、初めは料理せねば喰へぬかの様に思ひしも、實際戦線に立ち糧食乏き場合に、行動しながらビスケット同様、ポツリ／＼とやるに可し。又携帯には軽く、腹は張り、滋養分もあり、美味とは言ひ難きも、生死の境に出入する者には、甚だ便利なりし由也。紀州産の高野豆腐も、殆ど同様に、只だ少しく粗なるのみ。固より軍用に適す。

紀州産の高野豆腐

其製法と特長

二八〇 水餅
水餅も、貯藏品として最も可也。其法、粳米の粥の中へ同量の糯米を入れ、少

氷菜の製法と特色

しく煮沸し、飯となして之を搗き、然る後指程の大きさに切り、寒氣に曝らす。多孔質にして乾燥するも堅くならず、且つ久しきを経て決して黴を生ぜず、是れ此餅の特長也。

二八一 氷菜

魚類なき山間僻地にて、秋季に菜又は大根葉を採集し、之を繩に編み、雨露を避けて陰乾にし、冬に入り寒氣の厳しくなるを待ち、細く切りて煮沸し、水を絞りと炭圍大にまろめ、寒天に曝して凍らす、之を氷菜と云ふ。

此團塊を汁に投じ煮食するに、幾分油にても用ゐたらん様の味を有し、汁にも味つき喰ひよし。總じて田舎の禪寺、又は儉約なる農家などにて、多く實用しつゝあり。是も亦た腐らぬが特色なる可し。

二八二 蕨と薇

蕨は、英語にて Bracken と呼び、支那人は之を拳頭菜と呼ぶ、蓋し嫩芽を形容したる語也。此嫩芽は、早春の薬物として、食通を悦ばし、ひれども、秋を待ち根を

蕨の食用

二八一 氷菜 二八二 蕨と薇

掘り、澱粉に製するを可とす。凡そ澱粉中蕨より採りたる者は、其質最も細く、葛粉同様廣く食用に供せらる。蕨は、本邦到る處に産すれ共、其最も豊富なるは、京都附近の諸山にして、南部津輕秋田庄内等の物は、特に太く且つ軟かなりといふ。

蕨は、英語にて *Osmunda* と云ひ、蕨に似て非なるもの也。是は生にて喰ふよりも、春日嫩芽を摘み、日蔭に干し貯へ置き、後日の食用となすを可とす。又蕨と同じく、秋より冬にかけて其根を掘り、澱粉に製して食用とす。

蕨と薇の區識は、薇の方は、俗に時計のメブリングを「ぜんまい」と稱する程にて、其嫩葉はくるくると捲き、蕨の所謂拳頭菜と異なり、且つ薇の嫩葉に生ずる金毛は、蕨の夫れよりも著く密生せり。

要するに此兩種共、古來荒備用蓄品材料として適良なることは、茲に言ふ迄もなし。

二八三 甘 藷

或信ずべき人の報告に據るに、大正三年度鹿兒島縣に於ける甘藷の總産出

額は、無慮一億二千五百萬貫餘にして、此價額實に六百二十餘萬圓を計上し、其消費方面は、食用の外、燒酎澱粉團子菓子原料等にて、大部分は食糧用に供せらるると云ふ。

此薩摩芋なども、薄く切りて乾し置けば、荒備上無類の良材料なること、廣く世人にも知られ居れば、一時の利に趨り、多量のアルコール又は澱粉のみを製するを止め、少しは有事の際に備ふる心掛けも、ありたきもの也。

二八四 甘藷を喰はせ大手術に代ふ

明治三十五六年の事なりしが、當時予は吳に居りたり、其頃八歳許りの隣家の兒、一日學校より歸り來り、幼弟と共に嬉戯せる中、誤つて三寸餘の石筆を嚙下せり。母氏大に駭き、直に醫師を迎へ、其診斷を求めしに、只安靜を要す、腹膜炎を起す虞あり、若し起せば、切開術を施すより、他に策なしといふ。當時夫君は折悪しく洋行中の事として、萬一不在の折、愛兒に不祥事あらんか、死すとも妾の申譯立ち難しと、母氏泣いて子に衷情を訴ふ。予は之を聽くと共に、端なく或一事を想ひ浮べたり。仍て大に母子を慰め、予に「手段あり切開術など斷

二八三 甘藷 二八四 甘藷を喰はせ大手術に代ふ

甘藷療法提
言の動機

カット
エルフ
ール

小兒持親
遊へ

二八四 甘藷を喰はせ大手術に代ふ
じて要なし。只だ先づ幼兒を安臥せしめよ。而して早くふかし芋を調へ之の
みを喰はせ芋以外一切の食物を供せざれ。斯く爲れば、晩くして明後日、早
れば明日中に石筆は必ず便下すべし。と請合ひたり。去れど母氏を始め一坐
の人々、殆ど予が言に信を措くものなく、只後れて來りし軍醫某一人のみ、此甘
藷療法に賛同す。仍て家人は半信半疑の爲體にて、予の説通りを實行せしに、
果せるかな、次の日の夜に入り予が言の如く、恙なく石筆を排出するを得たり。
其後軍醫某予に質すに、曩きの處方の出所を以てす。仍て予は嘗て埃國新
聞の記事中に

鼠賊等が寶玉、貴金屬、時計、金貨等を掠奪するや、場合によりて携帯を不便
とする時は、此等贖品を悉く嚙下し、走つて山間僻陬の地に隠れ、小康安靜を
保つと共に、頻に馬鈴薯を食するの外、亦他を求めず、斯くて數日を経ば、腹中
の貨寶再び彼等の手中に歸す、之を稱してカットエルフ、エルフ、グールと云ふ
云云。

とありしを記憶せるのみと答へたり。世に幼兒もてる親御達は、此甘藷の特
效を心得置かるるも、亦一得ならんか。

冷飯の方消
化よし

奥様方に忠
告

【附記】本篇起稿後、玩具の時計鎖を、仰臥して口中に入れ居りしに、誤ちて嚙
下せる小兒、竝に五厘銅貨を、同じく誤ちて嚙下せる小兒に對して、此
甘藷療法を試みしに、孰れも美事に奏效せる旨、知人より聞きたれば、
婆心ながら茲に書き添へつ。

二八五 食客には熱飯を與へよ

何人も、冷飯より焚き立ての飯を好めども、衛生上より見る時は、温飯は消化
あしく、老幼乃至病者などには、冷飯の方却てよろし。そは、米は炊ぐ温度に依
りて、其消化菌を失へども、冷ゆるに隨ひ、元の如くに増殖する故なりと。換言
すれば、冷飯は消化し易き故に、早く空腹を感ずといふ事也。

されば、大食の食客に困しめらるゝ奥様方に忠告す、彼等には可成焚き立て
の熱飯を供し、御自身方は冷飯を攝り給へ、經濟上にも衛生上にも、是程よろし
きものはあらずと、去る衛生學者は申しき。

二八六 過食と過飲

二八五 食客には熱飯を與へよ 二八六 過食と過飲

二八六 過食と過飲 二八七 會席御料理
西洋の諺に『過食は双よりも多くの人を殺す。』とあり。成る程世間に餓死せりといふ者は最も稀有なれども過食して死せし話は隨處に之れあり。又渴して死にしといふ事は嘗て聞かざれども飲み過ぎて死ぬる人は數知れぬ程多し。

二八七 會席御料理

現時坊間に會席御料理と標榜して手輕き酒食を供する家あり。然るに會席料理といへば儀式的の者にして却々さる手輕きものにてはなし。按ずるに此手輕き方の會席料理は懷石より轉じたる者ならんか。

懷石とは禪家にて用ゆる温石の事にて寒中壯者は難行に耐ふれども老幼の輩は艱苦甚しく疾患に罹り易し。故に許されて懷中に温石を用ゆ懷石則ち是れ也。然るに此寒氣のみか朝食二食にては飢餓にも耐へずとて後には少量の間食をさへ用ゆるに至り之よりして間食をも懷石と異名せり而して間食の懷石が再轉して齋飯の事となり尙ほ三轉して簡易精進料理即ち普茶料理にも通用さるゝに至りし者なる可し。故に今日の手輕御料理といふ

べき所に何人か洒落れて懷石と同音の會席を冠らせし者ならん。

食物は持廻るに從て減少し言語は持廻る毎に増大す。

二八八 豐臣姓の勅許

秀吉、信長の吊合戦に勝ち、やがて紫野大徳寺に大法會を修し、終に先君の後を襲ぎ尊き身となりしも、元と賤しき出なれば姓氏なし。仍て藤原氏をや望みなんとて、此由近衛殿まで申出でしかば、そはいと易き事とて、其計ひありしに、九條禪定殿下(植通)之を聞召して、『攝家はいづれも隔てなしといへど、長者は當家の事なれば、近衛家の言ふ儘にはなるべらず。』とありしを、秀吉聞きて、物知りの申さるゝ事なれば、必定仔細あるべしとて、乃ち前田徳善院玄以に命じ、近衛殿と九條殿とを大徳寺に請じて相論を聽くに、嫡庶の事、傳來の重器など引出され、互ひに争ひてはてしもなかりき。是に於て秀吉心に思へらく、左様の耳遠き六ヶしき藤原の蔓葉ならんよりは、寧ろ今迄になき新しき氏になりて、吾こそ其祖第一と仰がれんものをとて、乃ち菊亭大臣と相議して上奏

二八九 從道侯の名 二九〇 薩摩琵琶と西班牙の土俗
の上終に豊臣朝臣といふ新姓勅許あるに至りし由古書に見えたり。

二八九 從道侯の名

慎吾と呼ばれ、小西郷と稱せられし西郷從道侯の本名は、隆道也。然るに侯の初めて陸軍に出仕する時、實名を書き上ぐる爲め、役人より問はれしに、リッダウといふべきを、薩音にてジッダウと答へしにより、其役人は獨り合點して之を從道と記しつけ、遂に終生公けの名となりしと云ふ。因に、從道の從をヨリと訓む人あれど、こはッダウなりと、侯自から正されし所を耳にしたり。

二九〇 薩摩琵琶と西班牙の土俗

薩摩琵琶は、其調悲壯也。故によく慷慨悲歌の士をして、其心耳を傾けしむるに足る。昔は海南の烈士も、好んで之を弄び、以て氣を遣り悶を拂ふの具となしたり。

今より約二十年前、予が歐州に在りし際、一夕巴里博覽會場に入りて、端なく西班牙人部落の實況を觀し事あり。其設備さながら小演劇場の仕掛の似く、

西郷從道侯の本名

薩摩琵琶

巴里博覽會

西班牙人部落の光景

寂びたる一村落を背景にし、其處へ純粹の西班牙風俗に装ひたる一人の若者、手に樂器を携へて出て來り、左顧右眄、人を索むるが如き仕打よろしく、頓て數十人の村男村女現れ來り、件の若者を取圍み、樂器を指して頻に一曲を所望し、果ては若者が辭退するを聽かず、強ひて椅子に坐せしめ、之を中心として、衆皆な地上に環坐す。若者はやをら右脚を曲げて左膝上に置き、靜かに彈奏を始めけるが、總べて是れ西班牙の土俗を其儘に演出するものと知る可し。

彼れ先づ琵琶を擁して彈ずること少時、嘈々切々、草蟲の露に咽び、急霰の軒を打つが如く、而も何となく耳に覺えある心地して、亦必ずしも他郷の聲ならず。兎角して切々の撥音、緩に歌むや、美吟忽ち演者の喉を衝いて發せしが、其調恰も薩南の唱に異ならず。是に於てか心竊かに怪しみ、初めは我が耳を疑ふ程なりしも、而も一節を唱へ了れば、即ち又琵琶に復し、琵琶歌めば即ち復た謠ふさま、他の絲竹に和して唱ふ者と、全然其趣を異にすれば、轉た故國の薩摩琵琶を想ふ折しも、突如杜鵑の月邊を掠めて、裂帛の聲を耳にす、正に是れ兵兒の切聲に髣髴たり。

憶ふ昔、西葡の、人を海難漂流に託し、屢々我が西垣を窺ひ、終に通商和親の

二九〇 薩摩琵琶と西班牙の土俗

薩摩琵琶は西人の傳へしものか

薩南他兒の琵琶其他

端緒を開くに至りしが、今の琵琶并に唱歌の如きも、同じく何かの縁によりて、彼より薩人に傳へられしにはあらざりしや。頃日さる所に招かれし席上、久しぶりにて小教盛の一閱を聴しが、甚だおもしろく感ぜしと同時に、當年の古き感興を喚び起したる爲め、聊か記憶を辿りて此記を作る。

二九一 琵琶

琵琶一に聲婆とも書す。印度樂器の名にして、梵語之を Vipaici と云ひ、又省略して Vina と書す。

雅樂の琵琶は印度より支那、支那より日本に渡りし者故、大體印度の物と見て可ならんが、前出薩摩琵琶は、其形體音調共に雅樂用の者と異なり、殊に其撥の如きは、全然其形狀を異にせり、即ち前者の撥は半開の扇の如くなるに、後者のそれは全開の形をなせり。予は前記西班牙人の弄ぶ樂器に就きて、之を仔細に檢するの機會を有せざりしも、恐らくは印度式よりも薩摩の方に遜きものならんかと、想像せらる。

二九二 辨才天と白蛇

辨才天といへば、何人も先づ琵琶を抱ける美貌の天人を想像せん。然れども、有名なる彼の金光明最勝王經、即ち唐の義淨の翻譯に係る、佛教天部神の經文中に現はるゝ者は、先づ手は四双即ち八本ありて、種々の武器を執り、決して美人と云ふ形相に非ず、只だ胎藏界曼荼羅に見ゆるものは、肉色二臂琵琶を彈ずとありて、是こそ七福神中の辨天様に稍や遜き者かと思へ共、未だ必ずしも代表的美女神なる可しとは定め難し。左に少しく此天女の事に就て記すべし。

辨才天は、印度神話の河神、薩囉薩伐底 (Sarasvati) が、佛教に歸化せる者にして、サラスワチーは、元と河の名也。その所在地今は明白ならぬ共、アリヤン種族の住地を區劃せる境界線となり、其北方の山地に居住せし同種族は、常に此河岸に來りて祭典を擧げ、其都度此河を女神として勸請し、恰もガンデスと同様大に之を崇敬せりと云ふ。而して此女神サラスワチーは、水を豊かに且つ清淨にし、荒れたる田野に肥沃の土壤を堆積し、富裕財産を下す神として、専ら崇拜せられたり。然るに、それが一轉して言語智慧の女神と結合せしより、茲に妙音となり、辨才となり、やがては象徴的の琵琶を抱き、或は毗濕紐 Vishnu と關係

雅樂用の琵琶と薩摩琵琶との相違

金光明最勝王經に現れたる辨才天

胎藏界曼荼羅に見えし辨才天

辨才天の由來

複雑なる結合的女神

辨才天自身
窟に迷ふ

蛇を附物と
せる由來

白蛇は病的
也

を生じ、又は梵天 Brahma を夫に持つなど、艶福にも富みし女神とはなりし也。のみならず日本へ渡來しても、頗る複雑混淆の神となり、施福妙音智慧は元より、或時は陀枳尼、或時は龍神、又或時は白蛇の神となり、倉稻魂命となり、本地法身の彌陀如來ともなるなど、恐らく辨才天自身にしても、人間を濟度するどころか、先づ其身を何れに託して然るべきかに迷ふ位なるべし。

或人の説に、辨才に蛇を附物とせしめたるは、恐らく印度の河海神たる水天、即ち婆樓拏神と混同せしならん。水天の頭上には、五匹の蛇を戴き、左手にも亦蛇を握れり。こは眞言宗の十二天の一として、東寺に祀り居れるが、此他には間違にも辨才と蛇との因縁なしと。

序に記す、某理學士の説によれば、白蛇の色白きは、一種の病にて、其柔順なるも病軀の爲めなりと云ふ。

實は今年(大正六年)の干支に因み、此女神の靈驗を記さんとて、筆を執り初めしが、却て渴仰者の信仰を破壊する様な事のみを記述せり、多罪々々。

二九三 初夢

季節上の初
夢

節分は、季節上冬の終りにて、翌日より春となる。昔は此時を最も重視し、追儼の式などあり、夜半を過ぎ、愈々新春を迎へる間に見る夢が、即ち初夢なりし也。這は山家集にも

年暮れぬ春來へしとも思ひ寝にささしく見えてかなふ初夢

などあり、初夢といふ事、これより以前の歌には見かけず。去れば藤原氏の末か、平氏の初代よりいひ初めけるにや。

曆日上の初
夢
元旦にかけ
ての初夢
元旦の夜の
初夢
二日の夜の
初夢

以上は専ら季節の上よりいひし初夢なるが、曆日上にては、一年の終は十二月末日にて、其夜半を過ぐれば、翌年の正月となる。従て初夢が元旦の朝見るものとせられしは、一理あり。然るに又、一年の吉凶は元旦に在れば、元旦の夜の夢を以て、一年の吉凶を占すべしとて、之を初夢なりと稱せし時代もありしが、江戸にては、大晦日は誰も繁忙にて、殊更商家は殆ど徹夜業を營み、元旦の夜は衆人疲勞の爲め熟睡し、初夢を見る邊なければ、寧ろ二日に譲り、心の落ちつきたる時こそ、善き夢も見らる可しとて、遂に二日の夜を初夢の夜となせり。

二九四 寶船

寶船といふ者昔は單に船の形を畫き、厄難を拂ふ心にて、初夢の夜、之を枕又は床の下に打ち敷き、寢ての翌朝水に流すこと、恰も夏越の祓ひのそのの如き一種の禁厭に過ぎざりき。

一説には、韓退之の窮鬼を送る文を見て、支那人の風習に倣ひし者ならんとあれど、如何にや。北越の某地にては、今日も尙ほ船の形のみを畫き、初夢の夜、床下に入れ置き、もし心に叶はぬ夢を見れば、翌朝帆を畫き添へて水に流しやり、もし吉夢ならば、碇を畫き、一年中大切に仕舞ひ置く由なるが、こは蓋し簡單なる板ひの心より、一轉して初夢と結合し、一年の吉凶を占ふといふ事になりしに外ならず。要するに此寶船なるものは、厄難を攘ひ、吉凶を占ふの外、尙ほ進んで海國民性を發揮し、浮御寶の名に負へる數々の珍寶貨財を満載し、目出度き入船と享福の縁起を祝ひしより起れる名稱なるが、後には尙ほ夫にても飽き足らず、種々の方面より施福神を驅出して、追々に乗船せしめ、遂に今の七福神とはなりし也。

去れば此福神中には、天より降れる神のみならず、日本人あり、支那人あり、又印度邊より來りし者もあるが、要するに、最初我國民一般に、施福神として崇拜

二九五 不可思議論

されし者を中心とし、後より佛教又は道教方面より、種々の理窟や情實の下に同船を是認し、之を七の奇數に纏めし者にて、或人の云ふが如く、決して一時に七體が揃ふて出現せしには非ず。

然らば、此等七神が一團となりて、乗船せし時代如何といふに、夫は足利時代狩野松榮の筆により、初めて今の如き顔觸れが描き出されしものにして、固より空海も天海も、一切關係せぬ事と知る可し。尙ほ七福神の戸籍調べにつきては、之を他日に譲るべし。

或人の不可思議論に曰ふ、『太古の民は皆な無智也、蒙昧也、野蠻也。其中の優者は必ず不可思議に驚異したる人種也。不可思議に驚異するが故に、思索あり、研究あり、智巧あり、道德あり、宗教あり、發明あり、科學あり、哲學あり、文化あり。驚異せざるものは、依然として野蠻の域に止まり、動物と五十歩百歩云々と、洵に其通り也。』

惟ふに、我邦都鄙幾百萬の善男善女共が、舊來の迷信に囚はれ、怪しき淫祠邪

二九五 不可思議論 二九六 閻字の解

神に歩を運ぶはまだしも、現今上流に位する人の中には、或は目白の阿鉢羅婆の奴となり、或は穩田の行者の僕となり、或は天理教の爲めに財産を盡し、或は大本教の豫言を信じて一家を分散せんとする者あり。凡そ世に不思議も多かれど、斯かる奇怪極まる不可思議はあらじ。而も此不可思議を不可思議とせず、益々迷ひの淵に向つて身を投ぜんとするもの多きは、更に不可思議中の不可思議にして、大本教の豫言の如く、日本人口中、少くも三分一位は、既に精神的に滅亡し居るには非ざるや。敢て識者の救済策を聞かんとす。

二九六 閻字の解

或人閻字を解して曰く、『閻とは宦者傳に聲榮莫暉於門閻などある閻にして、閻字はもと伐に从ひ門に从へり。功伐を以て家門を顯はすといふこと、固より決して卑しむべきの意義にあらず。然るに、今日に至りては、此門閻以外に藩閻あり、黨閻あり、學閻あり、財閻あり、甚しきは閻閻と稱する者までもあり。是れ國民の多數が、自己の能力に依らず、閻力に籍て、身家を立てんと欲するの證憑ならずして、何ぞや、一國の墮落之より甚しきは無し。是に於てか功伐の

門は變じて伐つべきの門とはなれり」と。

藩閻は憲政を破壊すと云ひ、黨閻は國家を無視すと云ひ、互に排詆克撃すと雖も、其閻たる所以のものは一のみ、誰か烏の雌雄を知らんや。富豪相依り、財閻を立て、一國の福利を壟斷し、官學出身の先覺者、學閻を作つて官海事業界を縱斷せん事に腐心す。若し夫れ結婚政略に由り、閻閻の力に依り、門地を興す輩に至りては、其心事の陋劣なる眞に人間醜恥の事あるを知らざる者、而も彼等は閻閻を鼻にかけ、傲然として白晝社會に跳梁を極む。嘆ずべき哉。

二九七 役人問答

問 一人の人でも半人判任とは、是れ如何。
答 一人の人を二人(奏任)と云ふが如し。
問 一人の人でも二人とは、是れ如何。
答 曲つた人をも直人(勅任)と云ふが如し。
問 曲つた人でも直人とは、是れ如何。
答 古い人でも新人(親任)と云ふが如し。

富豪の盛宴
と賓客の席

此語味ひあ

我邦の例

一人一役と
高橋老驛長

二九七 役人問答 二九八 一人一役
問。古い人でも新人とは、是れ如何。
答。嗚呼面倒な、役に立たぬ人間共をも、役人と云ふが如しぢや、喝。

二九八 一人一役

巴里の大富豪某、一夕知名の士數十名を招待して、盛宴を張れるが、其席順の第一座には、タルゾウ社の技師長を置き、次に文學士某、次に化學士某といふ順にて、時の大統領カルノー氏の如きは、實に第十何番目かの座席に着かせられぬ。人其理由を問ひしに、答へて曰く、「予は世間に代理者を有たぬ人、即ち其人自身ならでは、勤らぬ役を有する人を以て、最も價値ある人と信ずるが故なり」と。此語味ふ可し。

我邦中流以下には、一人一役といふがあれど、上流には、一人にして十も十五もの會社重役を承はり、樂々と兼勤しつゝある者いと多し。是れ蓋し誰にでも出来る仕事のみの故ならん、若し假りに現代の日本人にして、前記富豪の宴席に招かれたりとせんか、其上座を占め得ん者は、恐らく高橋老驛長位ならんか、呵々

井上外相と
條約改正

未曾有のフ
アンシー・ポ
ール

伊藤首相

山縣内相

井上外相と
杉内藏頭

松方藏相

二九九 外交政略ファンシー・ポール

附 元老連の假裝振り

明治二十年、井上外務大臣の條約改正協議當時、力めて外國人に近接するを要すとの見地より、一夕伊藤總理大臣の官邸に、内外朝野紳士貴婦人方を請待し、開闢以來未曾有のファンシー・ポールを開催せしが、出場者無慮四百餘名、各十二分の意匠を凝らし、西洋人共を駭かしたりと云ふ。今、其時の假裝振りを記したる中より、最も尤なるものを左に列記し、以て當年我政府の那邊に意を用ゐしか、又些か世態人情の變異如何を見るに資せんとす。

先づ當夜の主人公伊藤總理大臣は、ヴェニスの貴族に扮したるが、是は至極無事。

山縣内務は、馬關當時の奇兵隊々長萩原慶之助源有朋の文字を、白木棉に書きたる一片を筒袖の肩章とし、葦山笠を戴き、兩刀を手挿みて、意氣軒昂。

井上外務は、三河萬歳の烏帽子素袍、之に隨ふ才藏は杉内藏頭。
松方藏相は、烏帽子直垂の扮裝にて、是は頗る平凡。

大山陸相
山田法相
榎本選相と
佐々木願問

三島總監

山尾長官

高崎府知事

澁澤榮一

長
渡邊大總

高木兼寛

二九九 外交政略ファンシー・ボール

大山陸軍は、チョン鬚頭に、大小を腰にせる田舎武士。

山田司法の吉備大臣は古色蒼然。

榎本選相と佐々木願問官とは、兩人ともチョン鬚にて麻上下とは、餘りに簡

單。

天莫空勾踐云云を白旗に書し、鎧の上に篋を着し、竹の子笠を冠りしは、備後

三郎にあらずして三島警視總監其人也。

山尾法制局長官、府三は、九段目の本藏に扮し、尺八を持ちたる虚無僧姿。

高崎東京府知事は、七ツ道具を負ひたる武藏坊。

澁澤榮一は、安宅の辨慶に扮し、金剛杖をつく。

渡邊帝國大學總長、洪基は、富士見西行。

最後に高木兼寛は、満場唯一の圓頂にて、七條の袈裟を懸け、金色燦爛たる眞

宗法主の扮装、是には人皆な思はず喝采せし由。坊主丸儲けとは此事か。

舞踏會は、四月二十日の夜九時に開かれ、翌二十一日午前四時に至り、始めて

退散したりしとぞ。なんぼうも目出度き世界にてはあらざりしか。

迷信の都

三〇〇 京都の迷信

京都は、何と言つても迷信の都である。濫に神佛等を難有がり、淫祠邪神に
隨喜する人の多き土地である。論より證據、あれ程澤山ある神社佛閣以外に、
私に祀られてゐる淫祠邪神は、却々夥しいもので、夫れが近郷近在は云ふも更
らなり、國境山坂を越えてまでも散在し、皆な相應に繁昌しつゝあるのは、主と
して京都人が參詣に出掛けるからである。而して其禮拜する神が、果して何
の神であるか、又其神が、何の因縁で其社に祀られて居るのかも知らず、神を拜
するのやら社をおがむのやら、トンと分らぬ様な連中もある。

然らば京都及び京都人は、何故斯うであるかと云ふに、夫れには夫れ相當の
理由がある。即ち搔き摘んで云ふて見様ならば、先づ第一に、京都は土地が古
い。桓武天皇よりズット以前に、他よりも大に開けてゐた所であつて、夫れが
遷都の理由の一つにも爲つた位である。尤も此所計りてなく、今の攝河・泉等
ともに、皆な開け方は他よりも早かつた。そこで、古くより開けた土地だけに、
昔ながらの太古の原始的風習、信仰などの色彩が、鮮明に引繼がれて有つたと

迷信の都た
る理由

三〇〇 京都の迷信

同時に、又四方八方から輸入された思想の混淆も、決して尠くは無かつたので、何時か知らぬ間に、原型に變化を生じ來つたのも事實である。

神道
佛教
陰陽道
異教の混在

固よりは、京都に限つた譯では無いが、太古の遺風、即ち神道を中心として、外國から種々のものが附隨して來るのである。即ち先づ以て佛法が流れ着く、そこへ陰陽道の様な者が割込む。それに近畿地方には、古代から、外國の歸化民が多く居たから、彼等の信仰する異教の分子も、混じて來る。浮屠氏は躍起と爲つて、本地垂迹説を出し掛け、甘く神道を抱き込んで仕舞ふ。兩部習合が行はれると、陰陽道の方も、黙しては居ない、皇室内廷の意を受けて、物忌とか怨靈畏敬とかを物にして、神やら、佛やら、鬼やら、人魂やらを内々陳列して、互ひに善男善女を引ッ張り子にした者だ。

切支丹

斯くても宗教界の表面は、大凡そ浮屠氏に依つて統一されたかの觀ありしも、内容は必ずしも然らずで、傳教や弘法の行爲は、佛敎家の理想として、當然の様で有つたにもせよ、其末流の奸僧や神主が、世態に變應し、一時を糊塗する爲め、種々の經軌などを偽造して、益々人心を迷はせ、國家を毒した事は、決して尠少でない。其中には切支丹が浸入して、京都に本陣を構へたので、入宗の僧侶

京都は諸宗教の策源地

來勿處と塞神

共は大に狼狽を極め、皆な其銳鋒を此方に向けたので、從來宗教の策源地であつた京都附近は、全く包圍軍の營壘と化した。其後徳川の力で、耶宗はヤット退けたが、爾來一層諸宗共に緊張し、因襲久しき在來の信仰を基とし、之に伴ふ迷信、惑信、益々時を得て、其餘弊今日に至つたのである。斯う云ふ次第であるから、京都に迷信家、淫祠邪神などが多いからと云つて、強ち驚くにも及ぶまい。

三〇一 道祖神

幾多迷信家の禮拜する對象の一例として、甚だ複雑を極め居る者は道祖神也。

道祖神とは、元と支那にての名なる可きも、日本にては、來勿處キムドコロ又は塞神サイカミと呼ぶを至當とす。是れ蓋し記紀に見えたる神話が種子なれ共、例の根國底國又は黄泉國の有らゆる邪惡共を來る勿れと制して閉塞せしめたる神なるが故也。而して後世の人は、其時投げ付けたる杖に形どりし自然石、人工石、乃至木材を、路傍又は辻々等に建て、之を大八衢オホヤチに塞へ座す、黄泉門ヨミカド佐閉サヘ之大神として祀り、又或時は、之を大八衢オホヤチ彦ヒコ大八衢オホヤチ姫ヒメといふ男女二神としても祀れり。

三〇一 道祖神

斯くて此塞神は敢て往來安全を守る神にはあらで、寧ろ受動的に有らゆる土地の邪惡神を防ぎ塞める役なりしが、常に辻々路傍に在る爲めに、岐神道の神又は道陸神などとも呼ばれ、田に出づれば田の神、山に入れば山の神、峠に上れば手向の神、家庭に在れば竈神、井戸神より、終には厠神とまで祀られしのみか、又男女二神揃ひしといふ點よりして、幸神とも認められ、結縁和合の世話する神ともなれり。尙ほ最近耳にせる或人の説によれば、塞も障も共にさへにて、塞の河原は塞の神、シヨウ塚は障塚、即ちサヘ塚なるべく、道祖神の祖の字も畢竟は阻の字となすべきものなりと云ふ。

惟ふに、杖柱類形の物を對象とする事は、大凡前述の如くにして、大は下諏訪神社の御棒の如きより、小はアイヌのイナオ削懸けの如きに至るまで、孰れも同意義を含む者と見做すを得べし。

此所までは左のみ複雑ならね共、降て彼の石物崇拜の異民種が、多く歸化せし當時より、塞神の名に籍て、大巖小石、奇石、珍石、石像乃至石神等を祀り込み、石器時代の遺物たる石棒をも此中に數ふる様になり、加ふるに佛法の本地垂迹時代となり、又は支那の道教思想を混じ、幸神を音よみにして、庚申に結び着け、

更に荒神とする者もあれば、神主側にては黙視しては居られず、早速庚申として奪はれし塞神の申の字に因み、彼は猿、田、彦なりとして取り戻せしのみか、尙ほ猿田彦より、銅目を聯想して、遂に猿田と銅目とを結婚させ、男女二柱の命運を以て、再び元との幸神に復歸せしめ、往々陰陽石などを對象として祀るに至れり。

夫にも増して可笑しきは、古來出雲大社を目して、縁結びの神と爲せる事に、是は昔、京都、今出川の北を出雲路と稱し、今も加茂川の上に出雲路橋といふが架けあり、又幸神町あり、其邊に有名なる道祖神が祀られたれば、往時は陰陽和合結縁の神として、近國近在より參詣する者夥しかりしが、何時しか此出雲路の路を忘れて、出雲と心得し結果、何等結縁に關係を有せざる百穀の神、醫藥の神たる大己貴命に向て、良縁の御世話を願ふ様になりしなどは、何ぼう方角違ひの事ならずや。但し大國主命をば、誤て大黒天と思ふ人ならば、夫も無理のない所、何となれば、大黒天は元と印度に於て崇拜さるゝ稜説の總本家なれば也、呵々。

III 石棒

道祖神の神體であるとか無いとか、兎角の議論ある石棒とは、抑も如何なる物ぞと云ふに、是は其名の如く石にて造れる杖様のものにて、小は數寸の長さより、大は五尺、徑之に伴ふ恰も墓標の如きものもあり。

通例其兩端若しくは其の一端に隆起部あり、且つ曲線又は凸凹等にて種々なる模様を附し裝飾せるが、其の形狀多種多様にして、往々陽物に彷彿たる者もあり、又手頃の小武器若しくは指揮杖、元帥杖にも適すべき者もあり、要するに、石器時代の遺物ならんとの事にて、一時は太古民族の古跡と稱せらるゝ地域より、夥しく發掘されしが、未だ大和民族の古墳などよりは、多く見出されずといふ。而かも果して先住民族のみの遺物なり否やは確かならず。

序に甲州中巨摩郡高砂村に、傘地藏とて安産の守佛あるが、そは此地藏尊の背部に口あり、本箱の蓋の如く、内には一尺八寸の石棒を蓮坐に安置し、石棒の外見恰もつぼめし傘に似たれば、斯く名づけしものならん。尙ほ斯様のもの廣き世間には、幾多もある可し。

石棒の形狀

甲州の傘地藏

石棒とは、外人の考古學者間に Stone Rod と呼ばれたるを翻譯せし名也。

III 稻荷と茶枳尼

稻荷は稻荷の轉

道祖神に劣らず、國內到る處に祀られつゝあるは稻荷也。稻荷の訓イナリに就きては、種々の説あれども、先づ稻荷が元にて、荷が荷に轉じたる者とあるが、妥當なるに近し。

御饌津神と三狐神

然らば此神は如何なる者ぞといふに、這は五穀の神にて倉稻魂命と稱へ、伊勢の外宮の豐受大神と同一の神なるが、略して單に御饌津神ともいふ。之よりして三狐神などと書きしかば、誤て狐を捉へ來りて、稻荷の使者と爲せしならん。加之、佛教と結び着くに及んで、佛徒が印度の悉伽羅野干の本主たる茶枳尼を起し來つて、前記の三狐神と合體し、野干と狐を同一視せんとせしは、大なる錯誤と謂ふべし。

悉伽羅野干と狐、茶枳尼の素性

謠曲『殺生石』には、「野干は犬に似たれば云云」とありて、九尾の狐を野干と心得、犬に類似したる者といふ意ならんも、前出悉伽羅野干は梵名スリガーにて、野干は英語にてジャカルといひ、狐とは全く別種の猛獸也。殊に茶枳尼は、印

度蒙古西蔵等にて崇敬せらるゝカトリック女神、即ちシヴァ大魔王の婦にして、兇悪なること夫に劣らず、死と破壊とを司どる墓地神也。

されば稻荷は別として、野狐に赤飯、油揚を捧げ、又は豊川茶枳尼天に福徳圓滿を祈願する事は、少々考へものならずや。

三〇四 お十日と専女

下總國相馬郡にては、野狐を尊敬して之を「お十日」と呼ぶ由、他にも同様のことあらん、但し是は稻荷を音讀せるものによ。

然るに「鎮座傳記」には、「宇賀之御魂神、亦名専女三狐神云云」とあり又或書には、専女三狐は、燒米御食津なりと云ひ、又白専女として、白狐又は老狐と云ふが如き意義を含ませたる所もあり、尙ほ考ふべし。

三〇五 陰陽崇拜

古來、花柳界に於ては、縁起棚と稱する神棚を設けて、大小の陽物を並べ、之を金精明神と崇め、朝夕禮拜するの奇風ありしが、明治五年三月、太政官布令を以

お十日は稻荷の音讀か

鎮座傳記

金精明神

陰陽崇拜の遺風

秘佛

日本に於ける徑路

發生地と流布の徑路

て禁止されたり。然るに此風習は、今日に至るも未だ全滅とは思はれざるが、是れを前出道祖神同様に、我邦太古よりの遺風 Phallic Worship (陰陽崇拜) の存在をば、最も露骨に示せるものならずや。此外、全國都鄙に散在する數多の淫祠には、往々リンガ・ヨニの面影を見るのみか、嚴格なる寺院内にさへも、往々秘佛などと稱して、怪しき偶像を藏むる者亦尠ならず。

元來、陰陽崇拜は、原始時代に於ける一種の宗教にして、世界到る處に流布され、我邦の神話などにも、荒誕無稽に等しき傳説あり。而かも其多くは南洋臺灣支那朝鮮等の諸蕃土俗間に在りし者の、換骨脱胎たるに過ぎざりしが、推古帝已來、佛教の浸染につれ、古來の信念以上に印度思想を混入し、其結果甚だ複雑のものをつくり上げ、神ともつかず佛ともつかざる、一種異型の家庭神を奉祀するの風習を馴致するに至れり。

此宗教發芽の地、及び流布の徑路を考ふるに、最初は印度原始の亞梨耶民族が奉ぜし事勿論にして、彼等民族が餘りに繁殖せし結果、密集生活の不可能となり、終に天然の樂土より漸次他に移住するの止むなきに至り、一たびは西北に向て東歐に出て、逆轉して西蔵、蒙古に入り、更に東漸して支那及び日本にま

でも波及せしや疑なし。

亞梨耶族は稜説教徒

去れば亞梨耶族は眞面目なる稜説教徒(Linga)にして所謂 Phallicos 崇拜者也。但し稜説は梵語にて根の意義 Phallicos は希臘語にて同じく陽根を意味す。

印度人と婆

由來印度人中には、極端なる稜説教徒ありて、多くヨニ、即ち女陰を象徴せる圓形の臺石上に、圓柱形の石棒の如き物を置き、之を以て大自在天濕婆の陽根と爲し、常に崇敬禮拜せり。

希臘人

女神ウニヌス

次に之を希臘に見んか、希臘は往古文華燦然たる國にて、詩人、文人、美術家其他科學者等を輩出し、國民の思想概して高雅なれば、印度に等しき信仰を有しながらも、露骨の醜物を禮拜するが如き事稍や少く、皆無とは言ひ難けれども、其多くは之を詩化し美化して、理想の美神となして讚美すること、例へば猶ほ女神ウニヌスの如し。女神元とは萬民の母、即ち生殖の源と稱されし一個の家庭神にして、畢竟は女子生殖器の異名たるに過ぎず、而して之を渴仰禮拜するものは、即ち印度、西藏等に於けるカーリー女神(茶枳尼)と同一種なる、ヨニ(女陰崇拜)と何の擇ぶ所なし。

羅馬人とバツカス神

羅馬時代に在りては、毎秋葡萄收穫期に際し、バツカス神の祭禮とて、新酒に

フアリコとハリカク

生殖慾と色慾

原始的蠻人の不可解物

醉へる村男村女悉く裸體となり、巨大なるフアリコ(陽物の造り物)を擔ひ、市街を暴れ回ること、恰も我國の祭禮に、氏子共が神輿を擁し騒動すると一般なりしと云ふ。因に記す、此フアリコの語が、我國のはりこはりこのかた、即ちはりかたと國音相通じ、且つ同形の物なるは一奇ならずや。

亞梨耶族は勿論、印度稜説教徒にしても、將又我國の迷信家にしても、陽物の形を禮拜するに當りては、彼等は微塵も醜猥の觀念を懷くことなく、最も敬虔なる態度を以て信仰を捧ぐるを常とせり。人類學者の説に據れば、生殖慾は人類保存の慾望にして、色慾と同一にあらず、原始的動物には、生殖慾は存すれば、共色慾といふはなしと。去ればにや原始的蠻民の如きも、右に類したる者なれば、旺んに同族の繁殖を希ふの極、管に生殖器其物を崇拜するに止らず、今尙ほ印度に行はるゝ、精液崇拜なども興り、又は西藏蒙古等に於ける喇嘛教の如くに、男女交接の偶像に對してさへ、恭禮を施すにも至りしならん。

尙ほ考古學者の言ふ所を聞けば、原始的蠻人は、凡そ彼等の眼に映じ、耳に響くものを以て、一々不可思議のものと思惟せり。従て單純なる頭腦を以てしては、到底判斷す可らざる夥多の問題中、彼等が殊更に不可解のものとして、果

三〇五 陰陽崇拜 三〇六 ミラマー宮の秘體
ては恐怖の念を懐き、又神祕的のものとして畏敬せしは生殖器也。就中其男子に屬するものに對しては、全然之を神聖視して大に敬虔せりと云ふ。此等は今人の目より見れば、如何にも不審にて可笑しき事の様なれ共、此邊が即ち動機と成つて崇拜ともなり、又宗教の創意ともなりし者なるべし。

惟ふに創世時代に在りては、人烟の稀薄なるは固より、彼等は恒に猛獸類と格闘し、爲めに同族を亡ふ事絶えざるにより、生殖問題と共に繁殖補充問題は、日常彼等の腦裡を離れざりしものなるべし。聞くが如くんば、現今歐洲大戰の爲め、獨逸は終に強制的繁殖補充問題を解決せんと企て居れるが、果して然らば、獨人の如きは、今や既に文明の域を棄て、原始的蠻族の群に退化しつつある者と見て可ならん。人生の墮落も茲に至て亦極れりと謂ふ可し。

三〇六 ミラマー宮の秘體

予、往年埃太利のボトラに在りし頃、一日友人に誘はれ、トリエヌト港なるミラマー海宮を參觀せり。此宮殿は當時は皇帝の離宮の如くなり居れるも、元はフランツ・ヨーゼフの亡弟、墨西哥廢帝マクシミリヤンの好んで住みし所なり

とか。

倍、案内者に導かれ殿中深く進み入り、殘る限なく縦覽し、行く／＼廢帝の寢室として、最と清げに且つ萬事軍艦内のキャビンの似くに造られし、小室を通過せんとせし折柄、案内者遽かに歩を止め、煖爐のある方を指し、「彼の巨大にして光澤あり、而かも石にも非ず、金屬にも非ざるマンテルピースこそ、陛下の廢帝が墨西哥撤退の時齎らし給ひし天下無二の名物にして、材料は古き南米の珍木なり」と説明し、尙ほ何事かを語り續げんとせしが、急に口を噤み、敢て輕々しく發言せず、暗に訪客の掌中より、何物かを獲んとするものゝ如き舉止を示せしかば、竊かに若干の阿堵物を握らせしに、彼れ忽ち破顔一番、進んで煖爐の陰に入り、鎖鑰を一捻りすると見る間に、爐柱自から開け、そが暗黒面の徐々と光線に曝さるゝや否や、料らざりき太くして逞しき麗大の一物、ニョキとばかりに出現せしまし、何者出づるやと好奇心もて近づき居れる吾等の鼻をば危ふくも衝かんとせんとは！

三〇七 御靈社

三〇六 ミラマー宮の秘體 三〇七 御靈社

人鬼怨靈を
崇敬する遺
風

御靈社の由
來

御靈會

三〇七 御靈社

人鬼怨靈を畏敬せる事は、奈良時代に上下を通じて最も甚しかりしが其遺風今に存し、京都の御靈社、北野天滿宮等を首め、東京神田明神又は佐倉の宗吾靈神など、迷信家の悉く崇敬する所にして、國內尙ほ幾多か此類ある可し。京都の御靈社に就ては、初め桓武帝の都を長岡に營み給ふに當り、皇太弟早良親王、帝の寵臣藤原種繼と隙あり、因て廢せられて淡路に配流さるゝの途、斷食して殞落し給ひぬ。然るに後年平安京成りしも、厲祟頻りなりければ、崇道天皇の追號禮祭あり、且つ京中の出雲郷に御靈社を置くとあり。次で崇道天皇の母井上内親王(聖武)寶龜の廢太子他戸親王(井上内親王と同時に出死す)をも併せ祭り、其後に伊豫親王(平城の弟、桓武帝の第四子)及び其母藤原吉子(右大臣是公の女、桓武帝の妃)、大同二年十一月母子共に川原寺に幽せられ、藥を仰いで薨去させられしをも、又併せて祭りたり。此他、觀察使橘逸勢、又は文室宮田麿の如き謀反の爲め伊豆に流されし者共の靈をさへ併せ祭らせし事もあり。而して御靈會と云ふ事は、是等善惡邪正混合せる幾多の怨魂、厲を成し、疫を起し、上は皇族より、下百姓に至るまで、之が爲めに死亡する者多しと信じ、朝廷にては民情を泰くなさんとて、特に御祈りあり、又此會を修し、宿禰に賽なし給

井上皇后の
御名

將門の靈社

將門の首塚

ひしと也。

愚按ずるに、是れ皆な因襲久しき迷信に囚はれし結果に外ならず。但し無論愛民の御主意は、最も可なるが如しと雖も、忌憚なくまをせば、畏けれ共朝廷としては、後世に甚しき迷信惑信の例を示されたるものと云ふの外なし。

【追記】井上皇后の御名は、キノカミと訓むを正しとす。其次第は、昔大和の櫻井に「櫻井」と呼べる井戸ありて、皇后は其井戸の上に御住み給ひし故なりと云ふ。されば、東京市近郊の井頭を、キノカシラと訓むと同じ意味なるべし。

三〇八 神田明神

東京神田明神は、諸人の知る如く元と將門の靈を祀りし所なるが、明治七年教部省の命により之を別殿に移し、更めて大國主命及び少名彥命を合祀し一ノ宮と號せり。而して今日此本殿の背後に當り將門神社の扁額を掲げたる小祠あるが、是れ即ち元との靈社にして、將門を祀れるもの也。

然るに此靈社の外に、尙ほ神田橋内なる大藏省の庭園内に將門首塚とて立

三〇七 御靈社 三〇八 神田明神

派なる一基の石碑保存せらるゝが、今其由来を聴くに、天慶三年二月將門誅に服せしにより、首級を京都に送らんとせしに、其殘骸之を追ふて、武州豊島郡の或地點まで來り、打ち倒れしに、爾來種々の祟り多かりしかば、一祠を建て神に祭る、後ち延文年間遊行上人眞教坊、此所に芝崎道場を建立し、(豊島郡は往昔の芝崎村也)、日輪寺と號し、深く將門の靈を弔ひしと云へるが、此古刹の舊跡こそ、即ち今の大藏省内石碑の位置に合せり。

死人の胴が首の後を追ふて來たと、將門の家士等が、遺骸を奉じて此處まで來りしと云ふに外ならず、故に大藏省内の首塚は寧ろ胴塚と云ふを至當とす。降て徳川時代となりては、此邊總てが諸役人の官邸となり、從て寺社は他に移され、將門の靈社亦神田の臺に建て直されしも、塚のみは茲に居残りとなり以て今に至りし者ならん。

夫につけても、將門は從來世間より天位を覬覦せし大逆人の如くに認めらるゝも、或人の説に據れば、彼は決してさる惡人にては無く、其實全く腹黒き親戚等に誣られし結果、心ならずも朝敵の汚名を蒙るに至りし者なりとの事也。後の參考に資する爲め、序ながら茲に記し置く。

三〇九 菅公左遷の素因

北野天満宮は菅公薨去の後、朝廷其靈を和め給はんとして奉祀せられし者の如くに傳ふれども、苟くも忠臣道實公たる者、いかでか死後上を怨み奉るなど到底あり得べき筋にあらず、「菅公斷じて然らず」とは、先師近藤芳隣先生の夙に喝破せられし所也。此頃某文士の物せし菅公論の末に、公が左遷の禍を招かれし素因として、其事情を序列するを見たり、讀史上の參考にもと思ひ、左に之を摘記す。

- (一) 公、儒林より出で、宇多帝の殊遇により、官職權門を抜きし事。
- (二) 常に直言を忌まず、公卿百官の奢侈淫逸を諷諫し、恭謙己を持し、よく其範を示し、自然に憎しみを求めし事。
- (三) 公の女が宇多帝の女御たりし事。
- (四) 公の女が齊世親王の室たりし事。
- (五) 學閥の關係と公の學識。
- (六) 公の抱ける博愛主義と、時平等の貴族主義との衝突と反抗。

- (七) 形式を重ざる所謂公の保守主義と時平等の急進主義の衝突と反抗。
 - (八) 宇多帝の禪位と遺誡の累。
 - (九) 醍醐帝に對する諫止の過多。
 - (十) 晩年に於ける公の性格の圓熟。
 - (十一) 奇略謀計の類を忌みし事。
 - (十二) 自己の眞實の尊重。
 - (十三) 己れを責むるにも嚴なるが如く、人を責むるにも嚴なりし事。
 - (十四) 理想的ならずして實際的なりし事。
 - (十五) 寛大放漫ならざりし事。
 - (十六) 干涉に過ぎたる事(頭腦が餘りに緻密にして、人の不可能と云ふ事も公には決して不可能にあらざりし事)。
 - (十七) 佛教の徹底的信仰による心眼の明と、時代的迷信の錯誤。
 - (十八) 蠻勇(或は嫉勇)の缺如。
- 以上を概括して言へば、菅公左遷の原因は、公が「餘りに學識高く、餘りに意思強く、餘りに伶俐にして、而して餘りに公明正大たりしが爲め」に外ならざる也。

五體の禮佛

徳川吉宗と
永代極秘佛

實際の禮佛

る也。

三一〇 淺草カンノン

淺草の觀世音は、古來秘佛と稱し、五體あり。開帳の度毎に、交るく之を開扉するが故に、參詣の輩一定の姿を拜する能はず不審する者多し。徳川吉宗或る日此寺に詣で、自から佛體を拜せん事を望みしも、寺僧言を左右にし應ぜず、強ひて開扉せしむるに、内には佛體にも似ぬものあり、因て直ちに再び封鎖せしめ、永代極秘佛たるべき旨、嚴命ありしとか。

或説によれば、彼の有名なる黄金佛は、北條上杉の戦争以來、何處へか持ち去られ、行方不明の由なるが、然も日々參詣する幾千萬の群衆に對して、各々夫々諸願を叶へさせ給ふは、蓋し鯛の頭も信心からの譬に洩れざる所なるべし。

所謂一寸八分の觀音様は、兎も角も、世間幾多秘佛などと稱すれ共、今日嚴正に其意義を保ちつゝあるは、僅かに高野金剛峰寺の本尊、同奥院の弘法大師像、信州善光寺の本尊如來様、及び三井寺の黄不動の像だけにて、是等は未だ何人も拜んだと言ふものなかる可しとは、或寶物通の實話也。